
男の娘なCQCで！

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の娘なCCCで！

【Nコード】

N9849U

【作者名】

百合姫

【あらすじ】

注＊タイトルをかなり変更。おそらくもう変わりません。

（僕はCCCで世界を取る！という気概でもって・・・あくまでも”気概”である↓男の娘なCCCで！）

主人公がやっていたオンラインゲームの世界にーーという話。

女性不信（ないしは女性恐怖症）の主人公が概ねファンタジーな日常を過ごしつつ、ちょいちょいラブコメを繰り広げながら、たまにバトルするというほのぼの的日常みたいな内容です。

「せっていしりょう」のページにはキャラのラフがありますが、ト

ーシロの絵なんざ見る価値が無いという方や、キャラは自分でイメージ出来るという人はお手数ですが、挿絵設定をOFFにして頂ければ。

横読みがし易いように改行してます。

書き途中のがあるにも関わらず・・・また新しいのを書いてしまったり
orz

気づいたら書き上げていたのだ！

他の作品を見てたらやりたくなっただからしょうがない。

内容は主人公が女性恐怖症になって、自分がプレイしていたゲームと類似した異世界に飛んでいくという話。

まだ本筋すらろくに考えてないのでこれ位しか言えない、完全な勢いによる作品なので、グダグダになったら”冒険はまだまだ続く！”

”みたいな打ち切り展開もあるかもしれません。

最初に謝っておきます。

そしたらごめんなさい。

せっていしりょう(前書き)

主人公や主人公の武器のラフ以外は作中に書かれた物を纏めて書いているだけなので、見る必要はあまり無いかと。
本編が進むごとに書き足していきます。

せっていしりょう

ひびき
「響」

>i27909—2238<

名字は無し。この世界では名字は存在しないという設定。

種族 妖精族

覚醒スキル「妖精王の加護」光のリングが背後に出現。飛べるようになり、目と髪と羽が淡く輝く。

隠しスキル「ふえありい・ぶれいかあ」マップ兵器とも言える範囲に、超攻撃力を備える超距離砲撃。遣いどころが難しい。

好き ツナ缶 サイゼンナのミートスパゲティとマルゲリータピザ

甘いもの全般

嫌い 辛いもの 女性全般（子供はセーフ） マヨネーズ 納豆

歳 24歳（肉体年齢は15前後）

装備 ペレッタ90TWOカスタム 装弾数 17＋1 消音器、
サブレッサー

ナックルガード付き

>i27910—2238<

性格 女性恐怖症を患う前は肉食系で男らしかった。現在は女の子のような肉体に引っ張られているのか少し女々しく、草食系男子となる。男同士の熱い友情に憧れを持つ。人助けはその場のノリによる部分が大きい。もとい気まぐれ。

戦闘スタイル 忍び寄って後ろから刺す、という基本的に肉弾戦はしないスタイル。スピード優先なので敏捷値を落としてしまう防具や武器と言った物を一切、装備しない。背後からの攻撃に失敗した

場合、遠距離からの魔法でちまちまダメージを与えるスタイルに変更する。少年漫画の主人公には慣れない戦闘スタイル。どらごにあってから魔法攻撃力やMPが落ち込んでしまったので、基本的に銃器の中でも軽いハンドガン（ペレッタ90Two）を使用する。たまに狙撃銃で遠距離から。狙撃銃はVSS。

〔称号〕

「ざ・ぼす」敵を掴んで投げればステータスに関係なく状態異常気絶。

敏捷3・気配隠蔽の補正効果

「びっぐ・ぼす」敵を気絶させることに成功した場合、ランダムで装備を一つ獲得。（どらぶれの中のみ。どらごにあってからはこの効果は無くなる。）

敏捷5・気配隠蔽2の補正効果。

「厨2病」ネタ称号。死ぬ寸前に勝手に口が動いて死に間際の厨2台詞を言う。とても恥ずかしい。

「ほんやくか」異国の言葉を理解できる。文字は不可。

「スキル」（ステータスプラス系は1増えるごとに50アップする。たとえば敏捷は50。敏捷3は150となる）

「CQC」実践さながらのCQC技術を会得できる。背後からの首絞めにより、100パーセント気絶の効果を付け足す。

「CQC EX」CQCの強化版。よりCQCの技術が上手くなる。

CQCを使う際のデレイ値が半分に。

「ナイフスキル」ナイフの扱いが上手くなる。ナイフ装備時、攻撃力UP。

「ハンドガンスキル」熟練度に応じて手ぶれが少なくなる。リロードのスピードがアップ。

「すないぱー」熟練度に応じてスナイパーライフルの手ブレが少なくなる。リロードのスピードアップ。

「天空・だんそう」虚空にイベントリに入っている銃のマガジンを出すことが可能になる。MPを消費する。いちいちイベントリから取り出しておく必要が無くなる。

「光魔法」熟練度に応じて光魔法を覚える。熟練度に応じて攻撃力と詠唱がUP。

「火魔法」熟練度に応じて火魔法を覚える。熟練度に応じて攻撃力と詠唱がUP。

「気配遮断」スキルを使った気配探知の類を無効化。（索敵魔法を使われるとアウト）かつ視界に入らない限り気づかれない。

「気配隠蔽」相手に気づかれにくくなるという効果。

「気配隠蔽2」気配隠蔽の強化バージョン。効果は気配隠蔽と乗算する。

「無味無臭」毒系アイテムを使用する場合、味を完全に消せる。体臭や装備品の匂いを消せる。

「敏捷3」敏捷値に150プラスされる。敏捷値がすでにカンストになっても効果がある。

「敏捷5」敏捷値に250プラス。

「必殺技」（スキルの熟練度をあげていくと習得。）

「バックナイフ」ナイフスキルを上げていく過程で習得。相手に気づかれる前のみ発動可能。背後から攻撃することで即死効果。

「クリティカルエッジ」ナイフスキルを上げていく過程で習得。相手が動けないタイプの状態異常になった時のみ発動可能。ステータスに関係なく即死効果。

「中腰歩き」中腰でも立っているときと同じスピードで歩けるようになる。中腰の態勢の時、疲れにくくなる。

「魔技（魔法）」

「サンダーボルト」麻痺の追加効果のある帯状の雷を相手に向けて発射する光魔法。

「マノフィカ」

種族 上位親族

覚醒スキル

隠しスキル

好き 甘いもの 響

嫌い 響以外の全て 魚介類（生臭いもの。特にイカの刺身が苦手）

歳 16

装備 刀と銃デザートイーグルの遠近両用式。

性格 喋るのが好きではなく、基本的に一度に一文で終わる程度の言葉しか発さない。恥ずかしいときは声が小さくなり、非常に聞き取りづらくなる。

戦闘スタイル

備考 本作ヒロイン。黒髪褐色少女。ヤンデレ。

「フィネア」

種族 半魔族ハーフ

覚醒スキル 「魔の波動」紫色のオーラをまとう。攻撃全てに（魔技含む）攻撃力が加算される。MP消費量がその分増える。

隠しスキル 「魔神の衝動」前方に莫大な魔力の塊を連射する。追尾性能を持っていて、どこかに着弾すると爆発。状態異常”呪恨”を付与する。

性格 天然。そのため、会話があらぬ方向に飛んでいく。貧乏性。主人公に多大な負い目を感じてはいるが表には出さない。主食は家の裏手に生えるやたらと成長の早い雑草。雑草と言っている草はバ

ラ科で、滋養強壯の薬としても使われているハーブ。
一応、かなり希少なハーブなのだが、彼女以外にそれを知る者はいない。
男性と付き合うと尽くすタイプ。ただ、いまだ手を繋いだ事すらない。彼女から見た響は可愛い妹。男だということをちよいちよい忘れる。

「レト」

種族 精霊族

依頼屋の職員。

可愛い物が好きで、男の娘というジャンルが大好物。

主人公を気に入ってはいるが、あくまでもマスコット感覚。

出来れば自分の手で響を育てたいと思っている。むしろ食べたいと願っている。どんな意味かは言わずもがな。

その性癖？のため、良い噂は全くなく、依頼屋に来る冒険者達に口説かれても決してなびかない。

精霊族の特徴として相手の人間性を直感的に理解するため、精霊族は一目惚れで結婚までいくことが多い。

また、いささか物騒な世界ゆえに自分の身を守るため、依頼屋に勤める人間としても荒事に対応できる能力はある。

LV・120。どらごにあには転生の概念はなく、レベルの上限値はどらぶれと変わらず、999。

もんすたあずかん(前書き)

作中に出たモンスターを順次書き加えて行きます。
作中にも無いモンスターの生態が赤裸々に!?

もんすたあずかん

☆昆虫族☆

「キメラアント」

アリ型モンスターで、その生態はアリに類似する。ドラクエで言うところのスライムのモンスター。ある程度慣れた冒険者にとっては片手で捻る事の出来る程度の強さしか持たないが、大抵複数匹でまとまってるので舐めてかかると簡単に死ねる。元々集団で格上を仕留めるような狩りをするため、何時の間にか10匹以上のキメラアントに囲われていることも。

鋭い爪と顎が武器。アリで言うところの働きアリに相当。

比較的甘い物を好む。死骸はモンスターの肉として売れるがあまり美味しくは無く、安価で取引される。

女王アリにあたるクイーンアントが殺されると一匹のキメラアントが周りの仲間を食い殺しながら肥大。

新女王アリになると言う習性を持つ。なお、キメラアントは全てメス。ちなみにH×Hに出てくるキメラアントとは言わずもがな別物である。

「キングアント」

アリで言うところの兵隊アリに当たる。戦闘要員だけあって、キメラアントよりも遥かに強い。

初心者冒険者はまず逃げるレベル。キメラアントに比べ、フタ周りほど大きく、巨大に発達した顎が一番の特徴。知能も高く、他のキメラアントに指示を出したり、背後に回り込んだりもする。

キメラアントと同様に新女王アリになる習性を持つが、滅多に無い。

「クイーンアント」

女王アリにあたるキメラアント。

食べて寝て産むを繰り返して生涯を終える。

戦闘能力の一切が無く、アンバランスに大きな像二頭分の腹を持つ。体の八割以上が産卵のための器官であり、内臓。

唯一の防衛手段は巢全体に行き渡らせることの出来る鳴き声。

異常を感じると女性の悲鳴のような叫びをあげる。

物を見るための複眼は退化し、申し訳程度の単眼が3つあるのみ。足も退化しているため、動けない。

「アルガスタ」

竜族の卵に寄生する大型のハチ。

気づかれないように接近したあとに自分の卵を産み付ける。

卵から産まれた幼虫は竜の卵に侵入し、竜の卵をある程度食べると、幼虫の体でありながら卵が産める幼熟形態ネオテニとなる。

卵の大きさによりことなるが、卵内が3〜30匹ほどになると一斉に蛹になり、羽化。外へ出る。

この間、三日の早技。余談だが人間に取っては益虫と見られてる昆虫族モンスター。

成虫の餌は花粉や蜜。

「ファイヤーモール」

ミミズのような形をしているため、ゴカイやヒルといった生き物の仲間である環形動物の仲間に思われがちだが、実際は昆虫に近い内蔵の構造をしている。肉食動物。ミミズに昆虫のような短い足を取り付けたような外見をしている。見た目的に女性冒険者が遭いたくないヤツナンバーワンのモンスターである。

土表面を高速で這いより、頭から少し離れた口にあたる部分を開いて一気に丸呑みにする。大きさに人間くらいが丁度いい大きさの餌になるので、よくよく人間が狙われる。味よりも舌触り（舌は存在しないが）を重視するのか、手ごろな大きさの餌以外はあまり口

にしない。

ファイヤーモールの名の由来は攻撃を受けると空気中の水素と反応する液体を発射。小さな爆発炎を発生させるからである。またちょっとした火魔法も扱う。

性格は臆病。攻撃を受けると液体を発射して一目散に逃げる。死骸は畑の高級肥料として高値で取引される。

雌雄同体。胎生と卵生を状況によって使い分けるといふ非常に珍しい生態を持つ。

繁殖期には質より数ということで卵を沢山、とにかくいたるところに産み落とし、繁殖期が終わりに近づくとき胎生に切り替えてある程度お腹の中で幼体を育ててから体外へ排出する。天敵はインペリアル・マッドキラー。待ち伏せ型の捕食をする生き物に弱い。

「バグボール」

大きなダンゴムシのような姿をしたモンスター。甲殻は魔法抵抗性を持っており、なおかつ特に攻撃手段がないことから乱獲され、現在では絶滅寸前になっているモンスター。

主に城壁や門、防壁など材料になる金属などに粉々に砕いたバグボールの甲殻を適量入れて使用する。

エビやカニに近い仲間なので大変美味。バグボールの身や足と言った防壁に使われない部分は珍味として高値で取引される。

これもまた乱獲される原因となった哀れなモンスター。ちなみにダンゴムシと違って丸まらない。

繁殖期には卵を自分のお腹に抱えて、孵化した後もしばらくは孵化した幼体をお腹で保護する。

この際に親が幼体にあげる餌として体の内側から出てくる液体は非常に高濃度の魔力液となっており、良質な魔法具の高級材料となるため繁殖期のバグボールはこれまた乱獲される。

とにかく乱獲されることの多いモンスターなのだ。

そのため、今では人が入らないような広大な森、もしくは危険な森

の奥地にのみ生息する幻の虫となった。結果、とても高価である。餌は森に落ちている死骸や朽木。雑食性。

☆植物族☆

「マッドキラー」

カマキリのような形をした、大型食虫植物。（分かる人はPS3用ゲーム”ロストプラネット”、”ロストプラネット2”に登場するカマキリ型A Kのゴアティラックスを想像してもらえると早いかと。）

食虫とあるが、捕食するのは昆虫だけではない。昼間は植物らしく根を張り、木に擬態をしつつ光合成を行う。夜は活発に動き回り、貪欲に餌を捜し求める。お腹の部分、そして腕の付け根より少し離れた場所に光合成によって得た”でんぷん”を貯蓄するためのオレンジ色の核があり、そこが弱点。他の部分よりも攻撃が通り易い。自慢の鎌状の長い前足で獲物を斬り潰し、弱らせてから捕食する。獣の類よりも昆虫族のモンスターを好むために食虫植物とされているが、その理由は昆虫の甲殻に含まれるキチン質（植物の細胞壁と同じ成分）を取り込むためではないか？と長年の研究で分かってきた。尚、本体を殺しても千切れた腕や足は放って置くと光合成によって再生をするので討伐の場合はきっちり千切れた部位にも攻撃を加えておかななくてはならない。

年に一度、口の奥にある胞子を放出して繁殖する。

着床した胞子は光を吸収しながら成長していき、最初は小さな小さな小型の昆虫として厳しい自然界を生き抜いていく。

光合成も行うために凄まじい速度で成長していくが、生き残れるのはその中でもほんのわずか十数匹である。

歳を重ねるごとに大型化する傾向にある。

高さは5メートルほど。体重10トン。

「インペリアル・マッドキラー」

マッドキラーが長い年月を生き抜くことで大型化し、装甲も厚く、黒くなったマッドキラーの上位亜種。

インペリアル

帝王の名に相応しくも、竜族すら圧倒するほどの大きさで、小さめのビルほどの高さになると言われている大型モンスター。とは言え長年の経験からかなりの知恵を蓄えているため、人里や街を襲うことは滅多に無い。

植物の厚い細胞壁による装甲もより厚くなり、マッドキラーにあった弱点も覆われている。

基本的な生態はマッドキラーと同じだが、その大きさゆえに完全に根を張り、一箇所に留まる性格を持つ。そのため、近くに寄ってきた生物を捕食する待ち伏せ型の狩りをする。

とはいえそれだけでは巨体を保つエネルギーが得られないので光合成が主なエネルギー源となるそうだ。

「朱薔薇」

フィネアの裏庭に自生しているバラ科の紅い草と青い茎というカラフルな外見が特徴のハーブ。普通のバラよりもより赤い。どらぶれではHPが一時的に倍加する効果を持つ薬品の材料であり、重ね掛けも可能でボス戦では重宝される。そのためゲームバランス的に手に入りづらいつかりのレア素材であるはずだが、フィネアの家裏庭では取り放題。

主人公が転生した世界、どらごにあでも滋養強壮剤の材料で、一時的に身体能力をUPさせることのできる魔法薬の原料にもなっている。その原料たる朱薔薇は高価で取引されるがフィネアも主人公もそのことに

は気づいていない。花は咲かせず、ランナーと呼ばれる特殊な形で増えていく。根元から横に這うように茎が生えていき、それを起点に上へと葉が伸びていく。紅い見た目どおり、緑色の色素がないために光合成をするための葉緑体が非常に少ない。そのため、光合成

はあまりせずに空気中の魔力を吸って成長する。（フィネアの裏庭でよく育つのはフィネアが垂れ流す魔力に反応して育ちがよくなっている。）

なお若い芽は青い茎ではなく、葉と同じく紅い茎である。しっかりと年月を経て育った朱薔薇は見事な青色を出し、観賞用植物としても価値が高い。貴族の家には必ずあると言っていいほどのポピュラーな高級植物でもある。

また、青くなった朱薔薇は上質な身体能力UP薬が出来るため、より高値でさばける。

「ラフレッシュアン」

大型の植物。回復アイテム系の材料となる巨大な紅い花。生息地は木々の生い茂る森の奥地。花の中央に蜜を溜め込み、その蜜が回復アイテムの材料となる。蜜と名が付くが、実際は光合成をした結果できる過剰なでんぷんと花自体が持つ特殊な物質を溜め込んだ水が溜まった液体で、人間で言うところのオシッコにあたる。現在は養殖物があり、それによって安定的な回復アイテムの生産がされているが、回復スプレーEXの材料になるラフレッシュアンは野生の物のみと決まっている。

野生で育ったラフレッシュアンの方が品質が高くなる傾向があるためだ。原因は自然化における適度なストレスのためだろうと予想されている。なお、この花は森林の中のモンスター達の重要な水分補給地であり、近くには多種多様なモンスターが多くいるため、野生のラフレッシュアンの蜜の採取は困難を極める。そのため野生のラフレッシュアンの蜜は非常に高価。結果、回復スプレーEXも高価で手に入りづらい。

☆竜族☆

「アームドドラゴン」

竜族の中でもトップクラスの攻撃力・防御力を誇る。体長は25メートル、体高は15メートル。見た目はティラノサウルスに巨大な翼をつけたような姿。自身よりも小さな動植物を捕食する。肉食傾向の強い雑食。体中に筋肉に埋もれた毒針を保有しており、これが武器の由来。毒はブフォトキシンと呼ばれる神経毒で、この毒からは強心剤が作られるために意外と重宝される。性格は比較的温厚。餌として必要な時と繁殖期以外の場合は縄張りに入ろうとも人間を襲うことはない。

繁殖期にはオスとメスが一個の卵を産み、孵化した幼体はオスとメスに守られながら育っていく。幼体の時は草食傾向の強い雑食である。

天敵はアームドドラゴンの卵に寄生するアルガスタ。

「ハンニバル」

第二種警戒モンスター。”警戒”と名の付くモンスターはどれで言おうところのボスモンスターにあたり、非常に強い種が多い。なおかつ個体数が少ないため、死骸は素材として非常に高く売れる。ハンニバルは二足歩行をするため非常に機敏。防御力も高い。体のところどころの鱗が大型化しておりとても分厚いため、天然の鎧と化している。攻撃力も凄まじく手の平から発火性の液体を噴出し、さも炎の剣のように扱う。腕を振るうのと同時に液体が噴出されるが、このとき腕が振られるため液体は自然と放物線を描き、発火する。それが剣のように見えるのだ。かなりの高温のため触れれば火傷ではすまない。

なお、口からも発火性の液体を吐き出す。液体を吐き出しているのだが、発火性の液体は口から出た瞬間に空気中の酸素と水素に反応し、一気に燃え上がるため、一見すると普通の火炎球である。

意外にも草食で、繁殖はハーレム形態を作る。

一つのオスに2、3のメスという形をとり、小さな群れを為す。卵を産むために体力を失い易いメスが狩りにでかけ、残ったオスは

ただひたすら卵を守るのみである。

卵が孵化するまでのオスの餌はメスが産む無精卵のみである。

ちなみに、アルガスタの寄生を防ぐために卵には虫除けの香草を塗りつけるという珍しい生態を持つ。

☆獣族☆

「オーク」

基本的に温厚で知能が高い。全長2メートルから3メートル。雑食性。繁殖は普通にオスメスの交尾で行い、一度に2〜3体の子供を産む。生後3ヶ月で倍以上の体躯に育ち、さらに3ヶ月を経て成体へと化す。ちなみにオークは手先が器用なモンスターとも知られており、オーク自身が木を削りだして作った棍棒や槍を装備している。中には弓矢などを持つオークも居たりで、常に3体ほどで群れていることから初心者冒険者には非常に辛い相手である。集落によっては人間と不可侵条約を結んでいるところもある。

「キングオーク」

☆無形族☆

「ウロボロス」

1わ しょーりした(前書き)

主人公名は考えるのが面倒だったので、もう一つ書いてるオリジナル物と一緒に。

この小説は完全な気分で書く物なので更新スピードに過度の期待はしないでください。

1わ しょーりした

VRMMORPGというものを知っているだろうか？

ヴァーチャル・リアリティ・マッシブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム。

の略称である。

MMORPGもとい、マッシブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム、とは簡単に言うならば2000年代頃から流行り始め2150年まで主流だったオンラインゲームを指す。

具体的に言うならば一つの世界（オンラインの世界）を多数のプレイヤーが共有して楽しむオンラインゲームのことである。

そしてVRもといヴァーチャルリアリティとは2170年ごろから市場に流通し始めた新規のハードゲームとも呼べる今までのゲームとは一新を隔したオンラインゲームで、具体的にはその名の通りゲームの世界に入り込んだようなプレイができると言うことで一躍有名化。今までのハードが一気に廃れるほどの人気を博した新規ハードである。

（ハードとはゲーム機本体のことを指す言葉。PFPやPP（PP3、BOX360や昇天堂DSなどなどの本体ゲーム機などがこれにあたる。）

とはいえ、意識を電子空間に潜入^{ダイブ}させるとなると非常に高度な科学力が必要であり、意識計算機やら電子変換機、潜入回路や意識^{ダイブ}がなくなったときの人体の保護の役割を持つパーソナルコンテナ。大型の電子機器にとっては非常に重要な役割を果たす大型の冷却装置。などなど必要な物が大量にありーー結果。

場所を取りまくる据え置き型ゲーム機となった。
それがVRMMORPGの唯一の欠点である。
ちなみに一機100万〜500万円とそこそ良い値段をするが、
まあ無理ではないというレベルである。
年の整備代などもあわせるとさらに50万はプラスされるのだが、
それらを惜しむ必要すらない素晴らしいエンターテイナー。
それがこれなのである。

といううちくはさておき。

僕は今日も今日とてVRMMORPGをプレイしていた。

その中でも一番ユーザー（ゲームをしている人のこと。ゲーム管理者からすれば顧客。ということになる）が多いと言われる『どらごにつく☆ぶれいかあ』。

名前がヒラガナ表記でフザけている上に安直なネーミングセンスなため、発表当初こそ人気が無かったオンラインゲームだ。

VRMMOマニアからすると地雷臭がぷんぷんするとのこと。

ところがどっこい。

試しにやってみるとこれが思いのほか面白かったのである。

まず、戦闘スタイルの幅広さが尋常ではない。

過去の格闘技から、今日の格闘技。

魔法や剣はもちろんのこと銃器や重火器。

モンスターを捕らえて戦わせるテイマーやーーーと話しているとき
りが無いので割愛するが。

ありきたりなものからマイナーなものまで。

すべてにおいて取り揃えていたのである。

それにともない、職業も多く、称号も多い。

称号の中には“厨2病”なんてものもあり、これを獲得したプレイヤーは死に実際に勝手に口が動いて「お、オレノ右腕の封印が……がああああああっ!？」と叫ばずにはいられないという、誰が得をするのか良く分からない称号である。

ちなみに僕も持っていたりするが……。恥ずかしすぎます。はい。人によつては「オレノ右目が疼く……」とか「うがああああっ!」オレノ中の力が喚きたてる……。血を欲しろとっ!命を食らい尽くせと!」とか「オレノ右手が真っ赤に燃えるー以下略」とか。

オレノ〜で始まるのが共通点である。

もちろんそんな能力が付くことも無く。

単に恥ずかしいだけの称号である。

尚且つ、設定画面にて『ペイン』のON、OFFが可能と言うこだわり。

これはこのゲームにしかなかったもの。

ペイン＝痛み。

すなわち斬られれば痛いし、死ねば死ぬほど痛いという設定ができるのであった。

これは今までに無かった革新的なアイデアだ。

もとよりゲームなので痛みなど必要ない。

ヴァーチャル“リアリティ”とは名ばかりだ!と憤慨してこのゲームの会社の社長の威光で実装されたシステムである。

あのゲーム検閲第三者機関。

『SERON』を押し切つての実装ゆえにゲーム業界がどっと動いたのである。

そのためかなんなのか。

一気にユーザー数が増えた『どらごにつく☆ぶれいかあ』。

さらには細かいところで所持重量や装備重量、ゲーム内での自分が操作するキャラクターアバターのカスタマイズの自由度。メインストーリーはメインストーリーで『鍵』と呼ばれる俗に言う泣けるゲーム、もとい『泣きゲー』を作ることには右に出るものはいないと呼ばれるゲーム会社に頼んでいたりと、他には熱血系や鬱系、さわやか系、ほのぼの日常、戦争イベントなどなど。ストーリーはストーリーでプレイヤーの数だけ存在すると言われるほどの緻密さ。

ヒットしないほうがおかしいと言うものである。

『響殿、響殿！』

と、今更ながら“どらぶれ”の詳細を無駄に思考していると。顔の右手前にウィンドウが開く。

そこには長年のどらぶれ友達である“ひきがえる”の顔。そして僕を呼びかける声。

今更だが、もう少し良い名前が無かった物かと少し思う。

けど本当に今更なので、やっぱり気にしないことにする。

ちなみに顔は美少年。

ひきがえるというHNハンネルムのくせして。

まあアバターなのであまり関係ないが。

「こちら、響。

潜入成功。」

『了解。』

さすが響殿。いつもながら敵に回したくないほどのお手前ですなあ。では今から派手に陽動をしますので、手はずどおりに。』

「響、了解。」

『では・・・』

そこで通信は途切れる。

現在は戦争イベント中で、敵勢力とどんばちあってる最中。

このゲームは複数の勢力があり、プレイヤーはそのどれかの勢力を選ぶのだ。

僕は無所属。

最初こそ“どらごにつく王国”に帰属していたのだが、そうした所属をお金で買えたり無所属にすることができるようこのゲームの面白いところ。

昨日までの味方が次の日には敵になっていたり、敵が味方になっていた。

また、味方と見せかけてスパイだったり敵と見せかけて味方だったり。

謀略ごっこまで出来るのがこのゲーム。

あとは僕のように無所属になって、傭兵ごっこなんてものも良い。気ままに世界各地を渡り歩き、気まぐれにどこかに味方する。

ちよつと憧れをもっていたので、せっかくのヴァーチャル。

そういうプレイスタイルにしてみたのである。

が、結構苦勞も多い。その辺は後ほど。

外で轟音が鳴り響く。

「始まったみたいだね。」

僕のいる場所であるが、ここは敵陣地の拠点地。
忍び込んで敵のトップを殺るのが僕の仕事である。

味方はすべてその間の陽動。

簡単な策に思えるが陽動ゆえに僕を除く味方は敵を倒すことを頭に
入っていない。

僕が失敗すればそれだけで勝つのがぐんと難しくなる。

責任重大である。

逆に言えばそれだけ信用されているということに他ならない。

「さて、と。」

行動開始といきますかね。」

音をたてずに敵の基地を渡り歩く。

人の気配がした瞬間、スキル『気配遮断』を発動してやり過ごす。

気配遮断は視界に入るか探查魔法の類を使われない限り気づかれな
いというスキルで、まさか自軍に敵が忍び込んでいるなどと思いも
寄らない相手からすれば後者の警戒は必要ない。

「まずは捕らえて情報を探るとしようかな。」

後ろから忍び寄り、瞬時に首を極める。

敵プレイヤー“とんま”は瞬時に意識を失った。

とんまって・・・もう少しなんかあっただろう。とか思いつつ。
すぐさま引きずり、物陰に隠れる。

スキル『拷問』発動。もちろん本当に拷問するわけではなく、拷問

をして情報を取り出しました。という体^{てい}で相手の記憶——といってもゲームに関することだが——それを読むことが出来るのである。

ただし、相手が動けないタイプの状態異常にかかっている時の場合のみに限る。

気絶させたのはスキル『CQC』の効果。

現実では警察や軍隊が使用してる近接格闘術のことで、クロース・クォーターズ・コンバットの略称。

相手の背後から攻撃するとステータスに関係なく状態異常“気絶”にするという結構強力なものである。

正面からの場合は“投げ”でも気絶効果をだすことが出来るが、一回だけでは出来ないことが多い。

CQCのスキルは上がりにくく、接近しなければ効果がないということ人で人気が無く、マスターしてるのは僕ぐらいなもの。

マスターすると称号「ぎ・ぼす」を手に入れることが出来るのにな。敵を掴んで投げることができたならば必ず状態異常“気絶”にできるという称号。またCQCの技をすべて扱えると言う効果もある。

敏捷3と気配隠蔽の称号補正も。

（敏捷3はステータスの敏捷の値にプラス150。これらのステータスプラス補正はカンストした後にも効果を持つ。気配隠蔽は相手に気づかれにくくなるという効果。）

さらにはスキル『CQC EX』が手に入り、こちらもマスター済み。コレをマスターするのに毎日毎日ひたすら道場に通い続けて1年。なんとかマスターしたものだ。

そして手に入れた称号「びっぐ・ぼす」。

敏捷5と気配隠蔽2の称号補正に続き、CQCで敵を気絶させた場合ランダムで相手の装備を一つだけ剥がすと言う美味しい称号も手

に入った。

ちなみに目の前の彼。

とんまからは『非業の鎧』というそこそこのレア装備を入手。
売るけどね。

「さて、指揮官の部屋も分かったわけだし、とつとと行きますかね。」

とんまを近くにあったロッカーに詰めて、僕は物陰から出る。
ええと？

確かここを先にいって右に――

☆ ☆ ☆

「そいっ!!」

「むっ!」

おわっ!?

かわされたっ!?

気配遮断、さらには気配隠蔽が二つ分の僕の不意打ち――もとい
背中からナイフでブスリをかわすとはっ!?

相手は気配探知2ゝ3、索敵2ゝ3を持ってるを見た。

ナイフスキルを極めると手に入る必殺技。

『バックナイフ』。

相手に気づかれて無い状態で背中からナイフで攻撃すると即死する
と言う技だが・・・かわされるとは思ってもみなかった。
一度気づかれるとそのプレイヤーは一回死ぬまでこれを使うことは
出来ない。

「おまえっ!？」

何者だっ!？」

「いや、聞かなくても頭の上にあるネームを見ればわかるじゃない。
」

「・・・ノリだよノリ。」

「そ、それは悪いことをしたね。」

相手プレイヤーと軽口を言いあいつつもちょっと焦る。
仲間と呼ばれる前に片付けないといけない。

「まあ良い。響ひびき・・・それに男の娘な外見。なるほど。

オマエがあハミットの。

隠密者と名高いCQCマスターか。

あのスキルって反則じゃね？

ステータス無視で状態異常気絶にするとか。」

「それだけじゃないか。」

「それだけなもんか。」

ナイフの『クリティカルエッジ』と合わせれば最強だろ。」

「まあね。」

クリティカルエッジは相手が動けないタイプの状態異常にかかった

時、ステータスに関係なく即死させるという物。

ちなみに僕の外見は僕の彼女の希望で男の娘。

彼女はちよつと厨2病も入ってるので、外見は白い髪に赤い目と言うカラーリングまでも希望された。

余談だが、これのせいで“厨2病”の称号を手に入れてしまったのである。入手条件は厨2な外見アバターを作るとのことなので。

「とはいえ、だ。

転生を5回もして、なおかつ現在562レベルのこのオレを倒すにはいささか無謀かな。」

「う、5回とは・・・すごい。

ていうか、レベルが中途半端だな。」

「ほっとけ。」

このゲームの上限レベルは999。

そこまですになるとコマンド枠に転生というのが表示され、転生しレベルが1からになる。そして能力の高い物から順に能力値にボーナスが付くのだ。

繰り返せば繰り返すほどこのボーナスポイントは多くなり、レベルが上がるごとに伸びる能力の値もある。

ただ能力の低い物は極端に伸びが悪くなるという欠点もある。

「5回ってのは凄いね。」

「ふふふ。

さらに言えば貴様の弱点も分かっている。」

「あははは。

何を言ってるのやら？」

「とぼけても無駄だ。

紙装甲君。」

「さて、どうだろうね。」

「ちなみに俺のステータスは全部が4000以上。攻撃力、防御力、HP、MPにいたってはカンストだ。」

こ、これはキツイ。

さすが転生を5回も繰り返しただけはある。

ちなみにステータスとMPのカンスト（上限）値は9999。HPは19999。

彼の攻撃力は少なく見積もっても9999はあるということになる。称号や装備によって表示されなくともさらにプラスされるのではつきり言おう。

それなりのやり込んだプレイヤーでも通常攻撃一発でこっそり体力を持っていかれる。

さらに言えば必殺技は、かするだけでも即死級だろう。

それに大して僕の防御力は1000くらいしかない。HPも1000前後。

通常攻撃一発かするだけで死亡です。

僕も転生は3回しているのだが（3回だけでもかなりの古参プレイヤーと言っても良い。）、5回は本当に凄い。

他のオンラインゲームの例に漏れず、どらぶれもレベルが上がりにくい。

いや、“非常に”上がりにくいといっても良い。

さらに言えば転生すればするほどレベルアップに必要な経験値が増えるのだ。

4回以上となるとそれこそ二週でなければ出来ないほどのもので

ある。

かくいう僕も今はようやく三回目の転生を終えてレベル30になったとこなのにな。

「超特化型ブレイヤーハイミット隠密者。

俺が引導を渡してやろうっ!!」

「あたらなければどうと言うことは無いよ!!」

三回も転生してるにも関わらず、僕のステータスが低いのにには理由があり、超特化型と呼ばれた原因でもある。

僕のステータスは敏捷と必殺技や魔法を使うためのMP、魔法の詠唱速度や必殺技の連発速度に関係するディレイがカンストしており、あとは魔法攻撃力が5000ほど。

それ以外にはボーナスポイントを1Pも振っていない。

ゆえに防御力が100しかないのだ。

これは転生したことのない30レベルでも200はある。

これは低い能力ほど能力は伸びづらいと言うゲームの仕様でもある。さらに言えばこのゲームは所持重量、装備重量で敏捷値もといスピードが減るために防具を一つもつけてない僕からすれば、どんな攻撃にせよかすれば即死である。

とはいえ。

かすらなければ良いのである。

「ちっ！」

こなくそっ!!！」

「ふふふ！」

その程度のスピード!!！」

ハエにも劣るわ!!！」

僕は敏捷値がカンストというステータスなので、まず相手の攻撃があたらない。

そして相手に気づかれた段階ではCQCはナンセンス。

まちがってあたるだけでも即死であるがために。

ここで魔法攻撃力が出てくるのである。

万が一にでも当たらない様に遠距離からチマチマと魔法攻撃で削る。それが僕の戦法である。

距離をある程度とっておけば、とっさの魔法が飛んできても僕の敏捷値ならば見てからでもかわせる。

「サンダーボルトッ!!！」

「ぐがっ!？」

そしてこちらの攻撃はほぼ100パーセント当たる。

敏捷値は命中率にも影響しているからだ。

相手を麻痺させるべく、麻痺の追加効果のある攻撃魔法でじりじりと追い詰めていく僕。

「ほらほら、弱点がなんだってっ!？」

「ちっ!!！」

調子に乗るなよっ!!！」

げっ!?

「グランヴァッシュッ!!」

いつもよりかなり“多め”に回避距離を取る僕。

敵の持つ斧から吹き出るオレンジ色の光が当たり一面を打ち砕く。飛び散る岩の破片にも攻撃力が存在する斧技の基本スキル。

その破片は使用者の攻撃力によって変わるのだが、これはまずい。使用者が使用者なので僕の場合はこの一センチにも満たない破片一つを食らうだけでも即ゲームオーバーである。

飛んできた破片を避けながら、時に魔法で相殺しつつ、バックステップで距離を取る。

「なるほど・・・これね。」

僕の弱点。ってほど大げさな物じゃないけどさ。」

「結構、致命的だろ?」

「まあ・・・そう言えばそうかな?」

僕は防御を捨てた紙装甲なため、“範囲攻撃”と言う物が苦手である。

たとえばどんな攻撃も当たらないスピードを誇ろうとも周りのフィールドごと吹き飛ばされては適わないのである。とはいえ、その対応策が無いわけではない。

その時のための魔法攻撃力なのである。

「というわけであらうやっ!!」

カースオブゲートツ!!」

闇魔法の中でも最高位に位置する魔法を使ってくる敵プレイヤー。じ、自爆する気かつ!?

室内で使うような魔法じゃないし、たとえ彼と言えどかなりのダメージを受ける超広範囲大規模魔法。

「こいつはまずっ!?!」

「ふははははっ!!」

俺は死なないが、オマエは耐えられまいっ!?!」

ズゴンツと爆音があたりに鳴り響く。

拠点内に残っている周りの味方ごと僕を潰しにかかるとは天晴れである。

が、甘い。

「ふっ。

・・・いてえ・・・が。

これでやったか・・・がふっ!?!

ど、どうしーー」

背後から首を絞めて気絶。

クリティカルエッジで止めを刺して、目的を達した僕はそれを味方に通信で知らせる。

その後、さっきの爆発を受けても生き残ったキャラを気絶させて適当に放っておき、今回の戦争は僕達の勝ちにて終わった。

魔法攻撃力も鍛えているのは相手の避けられないタイプの攻撃を相殺、もしくは一部だけでも削り取って逃げる範囲を確保するためである。

ハーミット
隠密者を舐めてもらっては困るぜ！！

「任務完了。

帰還する。」

『あいあい。ご苦労様です。響殿。』

こうして今日のVRMMOは良い気分で終えたのだった。

2わ げんじつ で うわき された(前書き)

今回は少し生々しい話です。

主人公の特徴である女性恐怖症の観点から、後半への主人公の恋愛イベントへのフラグとして外せない話なので僕自身の性に合わずとも、今までの作風を無視してでも描く必要がありました。

ただこの話が終われば『どらぶら』っぽい世界でギャクテイストが続くのみとなりますので(シリアスはあっても生々しくは無い予定)、この1ページのみ我慢して頂ければと思います。

苦手な方は「浮気された」↓「女って恐ろしい」↓「貴方がいないと生きていけないとか言ってたくせに」↓恐怖症に。
と理解して最後の数行を読んで頂ければ。

2わ げんじつ で うわき された

と、良い気分でVRゲームセンターから帰ってみると。
玄関には見慣れない靴。

そして聞こえてくる彼女らしき女性の悲鳴。
というかあえぎ声。

あれ？

これはもしかして？

と思ってベッドルームを見てみれば。

普段は2人で一緒に寝ているダブルベッドに見知らない男が1人と彼女。

見られて固まる彼女と男。

あれか、これが噂に聞くU・W A・K Iというやつか。

浮気ですね？

分かりました。

2人して気まずそうに僕を見た後、男は逃げるようにそそくさと。
外へ出て行った。

去り際に「男はいねえとかいったじゃねえか」とか「話が違う」と
か言っていたが、まあよしとしよう。

いや、良くは無いが。

彼女は彼女で固まったまま。

あれか、いいわけでも考えているのか？

いや、そんなことはどうでも良い。

世間一般では男が浮気をするものと認識されがちではあるが、意外
と純情で一途な男も多いと言うことをご存知であろうか？

その筆頭が僕であろう。自分で言うのも難であるが、事実なのだか

らこれまたよしとする。
しておく。

決して浮気をせず。

携帯の連絡先はすべて同性。

友達やオフ会に誘われても異性しかいないならばやんわりと断る。

自主的に彼女が嫌だろうな。と思うことは決してしないよう心がけていた僕がなぜ浮気をされているのか？

全くもって不思議だ。

あれか。

僕がしなかったから、彼女がしてみた。的なの？

いや意味分からんな。

それともあれは最新式のダッチワイフ女性用とか？

これも無いな。喋ってたし、歩いていったし。

目の前の彼女。マキは泣きそうになりながら言い訳を始めた。

マキ曰く愛欲と性欲は別物だそうだ。

それって逆に言えば今回の一件は僕への愛欲よりも性欲が勝ったと言いうことだろうか？

あはははは。

とんだ獣ちゃんですね。

さらにマキは言う。

あなたが今でも大好き。

結婚をやめるとか言わないよね？とか。

そんな彼女の前に婚約書を持ち出してやる。

何を思ったか、安心するような表情をする彼女。

僕は婚約書を「そおおいっ！」と叫びつつビリビリに破り捨てる。そのまま通帳や服を何着か。

一部の漫画やゲームデータの入ったメモリーカードなどを回収。

「悪いけど。僕、浮気とか一度でも許せない性質なんだ。」

だからこそ僕も浮気を絶対にしないように心がけていたと言うのに。というかそう言っておいただろうに。

なのに浮気するとは、僕との関係の保持よりも日々の本能を満たすことの方が大事だということになる。

あんまりである。

彼女は泣きながら、逆ギレをし始めた。泣きたいのはこっちだ。

なけなしの男としてのプライドで耐えている僕を誰か癒して欲しい。マキ曰く、夜の営みが下手すぎるせいだ！とのこと。

だったら上手いヤツと結婚しろよと言いたい。

なんで僕を選んだの？

わけがわからない。

というか今回の同性にあたりそもそも結婚を前提としていたため、そういう話で進んでいたはずなのだが・・・せめて結婚する前まで我慢しろ。

結婚目前で浮気とか。どんだけだよ。

が、結婚した後からだとか色々後始末が面倒だし、これでよかったと思う。

同棲する前は毎日のように「貴方と一緒にじゃないと生きられない」とか「一生そばにいて」とか調子のいいことを言っていたくせに。ちよっと経つとこの変わりよう。

オンナノヒトは怖い。

もともと男子校出身の僕にとっては女性に少なからず恐怖心を抱いていた。

周りに異性がいなかったために女性と言う“生き物”に対しての理解が無かったためである。

理解できない物は怖い。

これは人間の本能だ。

マキと付き合うことになって女性は怖くない。と思っていたものが、むしろ高校時代の時よりもその感覚が深くなってしまった。

二度と女性とは付き合える気がしなくなった僕である。

かといって同性とーリーというのはありえない。

ゆえに僕の一生独身生活が決まった記念日でもある今日だった。

出て行こうとする僕を引き止めるマキだが、正直臭い。

男の体液と彼女自身の汗。

それでかなり臭う。

触らないで欲しい。

いろんな意味で汚らわしい。

さらには一度の浮気くらいとかなんとか開き直り始めたわけだが、その一度の浮気を許せる彼氏と仲良くなってくれ。

僕はもう君を愛せそうに無い。

いや、いまだ愛してはいる。

愛してはいるのだが、深く愛してるがゆえに彼女の顔を。

だらしなく秘部から垂らす濁った液体を。

汗ばみ、上気した肌を。

これから何度も見せられると思うと気が狂いそうになる。

嫉妬心で。

独占欲で。

愛欲で。

きっと彼女は僕が言ってもやめないだろう。
止められないだろう。

謝りもせずにつらつらと僕のせいにし始めるその行為からそう分かる。

強引に彼女の腕を振り解き。

僕はVRセンターへと引きこもるのであった。

だって主夫だから。

仕事は家事なのである。

お金も無ければ社会的なコネクションも無い。
貯金も少ない。

どうしよう。と考えながら僕はVRセンターで一晩を過ごした。

☆ ☆ ☆

一週間後。

今からでも復縁しようかとか考え始めた女々しい僕。

やっぱりマキのことが大好きなのである。

一度の浮気くらい・・・と思ったが、浮気と思い浮かべた瞬間にフラッシュバックする、僕しか見たことの無かったはずのマキのだらしない格好と男と絡み合うマキの姿。

ズキリと胸が痛む。とはいえ、そんなことばかり気にしてる場合ではない。

生活費を稼ぐためのバイトも探さなくてはいけないのだ。

見つからなかった場合、田舎の実家に帰るしかない。

でも、そうすると“どらぶら”がプレイできなくなってしまう。

とはいえバイトに関しては解決した。

VRセンターで寝泊りする常連の僕を見て店員さんの綾瀬 由香さんがバイトとして雇ってくれると言う。

普通に嬉しい。というか凄く嬉しい。

女性と言うだけで少し身構えてしまったが、彼女はマキではない。別人だ。

一緒にしたするのは彼女にとってもマキにとっても失礼だろう。

昼間はVRセンターで雑用。

夜は少しどらぶらを現実逃避がてらプレイしてという日々を過ごしてさらに一ヶ月が経つ。

唐突だが、由香さんに告白された。

僕と結婚を前提に付き合って欲しいと言う。

マキのことについて親身になって相談を受けてくれたり、仕事を一緒にしているうちに好きになったとのこと。

が、僕は断った。

なんだかんだでいまだマキのことを引きずっている。

そんな気持ちで付き合うのは君に失礼だと告げると、「だったら、前の彼女のことを忘れて私の事を好きになってくれるまで待ちます」と言われた。

ええ娘である。

と言うとでも？

そういう調子の良いことを言って裏切られた経験があるため、僕個人としては半年もすれば別に好きな人が出来るだろうと思っていたのであった。

ところがどっこい。

半年どころか、1年経っても彼氏を作らなかったのである。

僕の見てる限りでは肉体関係のみというのも無いようで、それを疑っていると感じたときには無意識的にでも彼女をマキと比べてい

たことに申し訳ないと心の中で謝罪。

そして謝罪の代わりと言うわけではないが、彼女との関係を真面目に考え、結果付き合うことになったのであった。

そして付き合ってから半年。

VRセンターにて久々にマキを見かけると、やはり男を連れ立っていた。

なにやら二股三股余裕って感じのチャライ男である。

少しマキに注意を呼びかけようとしたが、そんな男だからこそ彼女の浮気も許せるのかもしれないと考えなおして見なかったことにする。

余計なお世話と言う物だろう。

バイトが終わり。

由香の家に居候してる僕はそのまゝ由香の家に帰る途中。

女性の悲鳴が聞こえた。

どこかで聞いたことのあるような悲鳴である。

ちょっと入り組んだ路地裏に入り込むと、マキと先ほどの男が組み合っていた。

マキとしては友人感覚だが、男の方は下品なそれをやるき満々で彼女に近づいたらしい。

友達を選ぼうぜと嘆息を吐きつつ。

前の彼女と接触をするというのは僕の主義には反するのだが、まあ致し方あるまい。

ちよつと殴られる覚悟を持って仲裁をすると、男は軽く舌打ちをしながら逃げていった。

すでに男がいる女性には興味が無いということかな？

「あ、あの・・・」

「気をつけてね。
じゃ、じゃあ。」

特に喋ることもなく。
挨拶もせずに立ち去る僕。

「あ、あれから・・・誰とも関係を持ってない。」
「はい？」

いきなり何を言い出すのか？

「や、やっぱり私は・・・響君が好きだから・・・だから・・・」
「悪いけど、すでに彼女がいるから。
よりを戻すって言うのなら無理。」

はっきり言っておかなくてはなるまい。

「あ、そ、そうだね・・・そんな都合の良い・・・ぐず・・・」

そのまま泣き出すマキだが、僕は何も声をかけずにその場を去って
言った。

なんて声をかければ良いんだという話である。
とはいえ。だ。

仮にも惚れた相手。

その相手を泣かせたまま、というのは忍びない。
一言くらい気持ちを入れて。

「・・・幸せになってください。」

これが精一杯であるけれど。

より泣きじゃくる音が大きくなった気もしないでもないが、やっぱり余計なことだったろうか？

だとすれば申し訳ないばかりである。

そのまま由香の家に帰るとあら不思議。

二年前のような状況が目の前に広がっていた。

見慣れない靴。

女性のあえぎ声。

ベッドルームに入ると先ほどあったばかりの男。

やたらドヤ顔なのは・・・なるほど。

もともと僕を知っていた。ということか。

どおりであつさり手を引いたわけだ。

邪魔された意趣返しのもりだろうか。

ベッド上にはすっかり骨抜きにされた由香が。

僕を見て「ち、違うの、これは」と言っている。

何が違うんだろうか？

あれか。

僕はまたしても性欲とやらに負けてしまったわけか。

愛欲よりも性欲。

この世の真理ですか？

そうですか？

あれだな。

やっぱり女性は怖い。

浮気しておいて普段と態度が全く変わらないんだもん。

ばれないゆえに男の浮気よりもよっぽどたちが悪い。

というか、今回ばかりは泣く。

にマキの顔が映る。

他はすべてぼんやりとしているというのに、マキの顔だけがはっきりと確認できる。

あれだな。

多分、膝枕されているのだ。

「・・・足、痺れない？」

「し、痺れないよ・・・今したばかりだもん。」

マキの声は震えている。

「・・・泣いてちゃ可愛い顔が台無しだよ。」

「・・・余計なお世話。」

頬に当たる水滴。

「マキを捨てたから、天罰かね。コレって。」

「・・・天罰なら私が受けるべきだよ。」

マキから伝わる懐かしい体温。

「・・・幸せにね。」

「・・・なれないよ。あながいないのに。」

マキの匂い。

久しぶりだ。

「・・・はっはっはっ。愛欲よりも性欲を取ったやつがよく言う。」

「・・・つぎは間違えない。えっちの仕方でも私がレクチャーするし。」

「

嗚呼、死にたくないな。

「そいつはどうも。」

「・・・死んじやいや。」

そいつは無理な相談ツス。

というか、こんなにも簡単に復縁できそうならもっと早く話し合えば良かったのかもしれない。

一度の浮気で目くじらを立てずにちゃんと話し合えばと思わないでもない。

「あれだ。僕は女性不信になったからね。

言葉でそんなことを言われても信用ならん。

行動で示して欲しい。」

「・・・何をすれば良い？」

そんなの決まっているだろう？

「キスして欲しい。」

「・・・うん。」

彼女の唇が目前まで迫ったとき。

僕の意識はスッと落ち込む。

唇の感触は分からなかった。

2わ げんじつ で うわき された（後書き）

ちなみに主人公が扱う武器はナイフと魔法と銃器のみ。
なぜ、銃器？とは聞くまでもないかとWW

3わ　しょきか

チュンチュンとすずめっぽい鳥の鳴き声が聞こえる。

あれ？

確か、僕は最愛の彼女に浮気され、支えてくれた二人目の彼女にも浮気され・・・女性という存在に絶望して無我夢中で走り去ったら、トラックに引かれたわけだが。

そして死に間際に都合よくその場に居た最愛の彼女、マキに抱かれて死ぬと言う結構格好良い死に様を演出して死んだはずだ。

死ぬ前の一言がキスして、は無かったな。うん。

マキも内心、“血まみれの肉の塊の分際で何を贅沢言ってやがる”

とか思っていたに違いない。

なぜなら、キスされた覚えが無いもの。

とはいえ、だ。

今こうしていられるということはトラックに引かれて尚、僕は生きていたらしい。

常軌を逸した頑丈さだな、オイ。

どらぶらではちょっとした魔法やスキルの余波で即死だと言うのに。ま、そんなことはさておき。

なにやら寝心地が酷く悪く、身を振じらせるたびにじやりじやりと、砂利がこすれあう音がする。

誰だよ、僕のベッドに砂利を詰め込むなんて言う意味の分からん嫌がらせをしたのは。

というか、病院のベッドだろ？

不衛生極まらないわっ！！

枕も無いし、どこのヤブ医者にかかったの？僕は。

とツッコんでやろうと思って目を開けてみると、あら不思議？
目の前には――関係ないけど不思議と言う言葉が口癖になってる
気がする――森。

は？

「あ、えと・・・なにこれ？」

病院かと思ったら、野外で放置プレイ？

怪我人を野外に放置とかこの鬼畜がやったわけ？

マキではないだろう。

確実に。そんな意味不明な思考をしてたら深く関わる前に関係を断
つとる。

アリに食われたらどうするんだってんだ。ぷんぷん。

いや、まあ無いけど。

食われる途中で目、覚ますわっ！！

と、1人ノリツツコミで平静を保ちつつ。

とりあえず起き上がってみると、目の前には可愛らしいアリが居た。
クリクリとした複眼おめめにチャーミングな触覚アホゲ。

細く長いモデル顔負けの足（いささか多いが）に力強さを感じさせ
る顎おぐち。

正直、アリって萌えの塊じゃない？

と思ってた頃が僕にもありました。

「い、いやああああああっ！！」

みっともなく叫びをあげながら逃げ出す僕。

だって、体長が異常だもん！！

大型犬並みのアリを見たら誰だって逃げるだろう！！

逃げながら、振り返ってみるとアリがよだれを垂らしながら“待ってえんっ！”と言わんばかりに嬉々として追ってくる。

オマエは浜辺で彼女を追いかける彼氏かっ！！

と誰にとでもなくアリに心中でツツコンでみたのだが、それが通じるはずも無く。というか、通じたからなんだという話である。

そもそも、喜んでもるかどうかすら定かではない。そう見えるというだけであって、本当にアリに喜怒哀楽があるのかと言えばあるとも言えるし、無いとも言えるだろう。

なぜならば、僕は紛れも無い人間であり、アリではないのだからして。

すなわち何が言いたいのかと言えば所詮、霊長類のトップを過ぎない人間様ではアリの気持ちをも本当の意味で100パーセントの確立で断言することなど不可能だからだ。

アリになってみないとそれこそ分からない。

科学的に脳の仕組みからそこまでの知能は無いといわれても、実際にアリと同じ神経構造を持つ科学者など、人間などが居るはずもない。―――というか、それは人間ではない。

ゆえにそれが本当に正しいかなど、重ねて言うがそれこそアリにしか分からないことなのである。

話がやたらと飛んだわけだが、とにかく僕が何を言いたいかといえば単純なことである。

今こうして逃げ惑っているのは彼が―――いや、彼というのは人間の男、オス、メン、に分類される生物に対する二人称の言葉であり、この場では適切ではない。ゆえに彼ではなくヤツと呼ぶ―――彼改めヤツが喜び勇んでいるように見えるのは餌を見つけたゆえに僕を追ってくる。

ゆえに僕は逃げる。

そりゃ普通、大型犬に迫る勢いの節足動物を見れば逃げるだろう？と

いうわけで決して僕はヘタレではない。
それを言いたかったのだが・・・あれ？

なんでこんなに無駄に長い思考をしたのだろうか？

我ながら不思議だが、つとまた、不思議という言葉を使ってしまった。

いやはや、これもまた一種の現実逃避なのかもしれない。
こうして長々考えることによって――以下略。

「あれ？

いつの間にか、居なくなってる？」

あのデカイアリはどうしたんだろうと振り返ってみるとアリが居なくなっていた。

願わくばイキナリ地面の下からゴバッとヤツが出てこないようにと
念じながら。

「というか結構、走ったんだけど・・・振り切ったってことか？」

こんなに体力あったかな？

というか足は遅いほうだったし、そもそも服自体がヒラヒラして邪魔臭い。

なんでこんなファンタジーな病院服を使ってるの？

実に変な病院――いや、病院じゃないよっ！？ここっ！？

って、今更っ！？

と自分で自分にツツコみを入れながら、とりあえずちよっただけ荒れた息を整えて気持ちを落ち着ける。

落ち着くとすぐに周りの状況が見えてくる。

まず僕の声だが、幼い。

いや、幼いというより小さな女の子。という感じの声で常日頃から聞いている声の気がする。

というかこれってVRでの僕の声だ。

具体的に言くと声優のタマラン・ユカリンさんの声だ。

外国人の声優さんである。「魔法幼女アツカンなのは」というアニメのヒロイン役で一躍有名になった人。

ちなみに“なのは”の部分は“なのわ”と読むらしい。

幼女なのにアツカンって何？

未成年禁酒法に真っ向から勝負を挑むようなタイトルである。

それはさておき、他には背丈も違う。

目線が結構低い。

現実では180を越す身長なのだが、体感差30センチ近くである。

トラックに引かれたことでダメになった部分を切り取った結果、これだけ縮んだのだろうか？

まああるあーいや、ないなっ！！

無さ過ぎるがなっ！！

そして森にほっぽられてるという状況にさっきの巨大アリ。

見たことがあるぞ？

確かどらぶらのどらごにつく王国周辺の森林フィールドで登場するちよつと強めの雑魚敵だ。

名前はキメラアント。

完全に名前負けである。

というかそんなの相手に逃げ出すとは情けない。

そして恥ずかしい。

なるほど。

そういうことか。

僕は今、瀕死の重傷を負っていて、VRのコンテナの中に詰め込ま

れてるってことだ。
なるほどなるほど。

納得したわー！ーあれだよ、あれー！ー

「つてっ！！」

あほかあああああああああつっ！！」

盛大に1人ツツコミをする僕。

ば、ばばば、バカじゃないのっ！？

コンテナに突っ込んでどうすんのっ！？

確かにコンテナには生命維持装置が付いてるよ？

でも、これはあくまでも意識を電子空間に飛ばしてる間の体の生理機能などの保護目的であって、治療に使えるような技術は積み込まれてませんよ！？

そもそもコンテナが僕の鮮度の良い血、もとい鮮血で血まみれになるわっ！！

防水加工がされてるから壊れはしないだろうけど、思いっきりコビりつくよっ！？

そもそもなんでVRに突っ込む必要性がっ！？

仮に治療後だとしてもだ。

なんで素人目にも絶対安静でなければならぬ意識不明の状態の患者をVRコンテナに突っ込む！？

その摩訶不思議な行動にドンビキだよっ！？

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・まあいいや。

ログアウトすれば良いだけだし。」

念じるとメニューウィンドウが空中に出現する。

そこでログアウトボタンがある“おぷしょん”を指先で押す。
下にスクロールしていつて・・・あれ？

あら？

おや？

ふむ？

なんーで？

ログアウトボタンが無い。

他にも探してみたがこのメニュー画面にも存在しない。

なんでやねんっ！？

なにこの不思議？

あ、また使っちゃった。

エラー・・・かな？

「・・・はあ。

まあいいか。

エラーならエラーで。

しばらく待ってれば回復するでしょ。コンテナのことは知らん。
勝手に汚れてればいいさ。僕のせいじゃないし。

・・・フレンドと適当に通信会話でもしてればーへ？」

“ふれんど”のメニュー画面はあった。
あったが。

誰の名前も存在していなかった。

「・・・これもエラーか？」

次は“てんい”の画面を開く。
今更だが、どらぶらにおいてメニュー画面はすべてヒラガナ表記である。

「転移ポイントがすべて消えてる・・・これは無い。
ありえん。

面倒な。歩くしかないのかな。
というか、エラーが酷すぎる。
ちゃんと戻るの？」

せっかく作った僕だけの秘密基地への転移ポイントも存在しない。
僕はどこにも所属していない根無し草だったので、いたるところに秘密基地がある。
活動拠点だ。

“すてーたす”を見てみるとレベルが1になっていて、他のステータスも全て初期化されていた。
ほ、ほほ、本当に戻るよね？これ？

三回分の転生が無駄になったら、もうこのゲーム、やる気しないんだけど・・・

全部でステータスは12個ある。僕のステータスは――

響	LV	001	
HP	500	(19999)	
MP	500	(9999)	
スタミナ (ST)	150	(999)	
攻撃力 (AT)	100	(9999)	
防御力 (DE)	100	(9999)	
魔法攻撃力 (MAT)	500	(9999)	
魔法防御力 (MDE)	100	(9999)	

敏捷 (AG)	700	(9999)
ディレイ (DY)	500	(9999)
器用 (DEX)	100	(999)
運 (LUC)	999	(999)
成長率 (GR)	10	(10)

あ、いや、運と成長率だけがカンストしてる。
ワケが分からない。

幸い、スキルや称号は初期化されて無いようなので、称号補正も付
け足していくともう少し全体的にあがる。
カッコ内は上限値。

(成長率は転生回数がそのまま表示される。)

それとカンストしていたステータスだけはかなり高めだ。
というか、全体的に高めである。

転生回数がゼロのキャラだと100以上のステータスが出るのは職
業や種族に関係なくHPくらいのはず。
転生回数5回の廃人プレイヤーのキャラでも一番高いステータスで
500。

他は良くても100〜300なはずだ。

成長率 (転生回数) の影響？

いや、三回しか転生して無いのに。

とりあえず、どうにかできるわけもなし。

久しぶりにどらごにつく王国でも観光しますかね。

ピクミーン之歌を歌いながら街道を歩いていくと、ちらほら馬車が

ごつとらごつとらとすれ違うときがある。

そのたびに僕を見て驚かれるのだが、何を驚いているのだろうか？
あまりのアバターの可愛さにびっくり仰天？

ふふん！！

だとしたら嬉しいね！！

このアバターはマキとーあ、そういえば。

マキはどうしているんだろう？

良い雰囲気ではあったけど・・・まあ復縁はないだろう。

そもそもマキのような美人は僕のような甲斐性無しには荷が重かったということだ。

あんなことになったのもそもそも僕が彼女を見初めなければ良かった。

そうすればお互いに幸せな生活を過ごしていたのかもしれないのに。
結局のところ、浮気か僕か。で、浮気を取るくらいには僕の価値が
低いってことでしょ？

これって？

それが由香まで・・・二度も続けば気づきますよ、そりゃ。
僕という男の価値の無さなんてのはね。

三度目は無いッス。マジで。

絶対、彼女作らないです。

あれだね。

一度死に掛けたせいかな、目が覚めた。

きっぱり冷めたよ。

彼女達が言いたかったのは“僕ごとき一時的に歯牙にかけてやるだけ
でもありがたく思え”ってことでしょ？

ふふふふ。

分かってるよ。

もうね。二度とこんな思いごめんですわ。

本当に勘弁してください。

あ、また泣けてきた。

ほんと、情けない。

一応肉食系男子のつもりだったんだけどもすっかり牙を折られたわ。それは、もう見事に。牙の断面図見る？グロイよ？いや牙といったもただの犬歯ですけども。

そもそも犬歯も折れてないけど。

比喻表現だからあまりつつこんじゃダメ。

なにはともあれ、何を調子乗ってんだ虫ヤローってことでしょ？そうでしょ？

分を弁えて生きていこう。これからは。

女怖い。

男をその気にさせる言葉ばかり吐くオンナノヒト怖いよう！

で、てくてくと街道をひたすら歩いていくと（意外と遠いなこのやろー）モンスターに襲われてる馬車が“出現”した。

出現というよりは元からそこにあったという自然な感じだが。

ふむ。どらぶらもやるじゃないか。

いつもはサーバーが重くなるからと、ある程度近くに行かないとNPC（ノンプレイヤーキャラクターの略。ゲームに置いて人が操作しないキャラクターのことを言う。）は表示されないのに。

大分遠いところからでも視認できた。

仕様を変えたのかな？

そもそも、こんな場所でなんかイベントあったっけ？なんも無かった気がするが。

まあいいや。

今はとにかくどらごにつく王国に行きたいし、イベントが始まると

宿屋などにいけなくなることもあるので、今の弱体化状態では困る。
というわけでスルーする。

阿鼻叫喚の悲鳴が横で聞こえるわけだが、なんか無駄にリアルな悲鳴ですね？

何この悲鳴？

「ぎゃああああっ」とか「ひいひいひい」とかチャチなもんじゃない。

それこそ奇声と言って良いほどの心からの叫び。

こう・・・心にズシッとくる、誰が聞いても思わず目を背けたくないほどの必死な悲鳴は。

声優さん頑張りすぎでしょっ！？

あまりの悲鳴のリアルさにむしろモンスターよりもその悲鳴に恐怖を感じた僕はそのまま馬車で襲われてる人を凝視する。

つい目を引く張られ、そのまま視線が外せなくなってしまった。

あまりの光景ゆえに。

ちなみにモンスターはさっきのキメラアント。

というかキメラアントさん？

人を食い殺すグラフィッククーラーというかエフェクトがリアルすぎませんか？

そんなに頑張って食さなくて良いんですよ？

内臓が飛び散ったり、白い骨らしきものをゴリゴリ碎いては吐き出したり（いらなら口に入れるなよ）、ちょっと粘性をもったような血液が飛び散ったり・・・すこしめまいがするでござる。

中学生のときにカエルの解剖を経験してよかった。

あとは所詮グラフィックという思いが強いのもかもしれない。

今の精神的強さをあのときに発揮できればと思って・・・手遅れ

だね。

「た、助けてくださいっ!!」

藁にでも縋る思いなのか、襲われていた商人らしきおっさん――は失礼か。

オジサマが抱きついてくる。が、むさいおっさ――オジサマに抱きつかれる趣味は無いので瞬時に避ける僕。

「ひでぶっ!?!」

「あ、すいません、大丈夫ですか？」

顔面スライディングを唐突にし始めたオジサマ。

「オジサマ。」

命の危険って時に顔面スライディングとは……蛮勇は身を滅ぼすと言う言葉をご存知ですか？」

「蛮勇っ!?!」

今のがそう見えたっ!?!」

「はい、しかとこの目で。」

「いやいや、助けを求めたからでしょっ!?!」

そこを避けた君が言うのっ!?!」

「抱きつく意味が分かりますが……」

「そ、それは……確かにすまん。気が動転しててっ!?!」

ていうか、良く見れば……君みたいな女の子がこんなところで何をして――

ぎゃああああああああっ!!

肩が、肩がっ!?!

肩が食われとる!?!

むしゃむしゃ食われとる!?!」

キメラアントが僕達の会話を待ってくれるはずも無く、肩を食われたオジサマ。

うわ、近くで見るともつとグロイ。

とうか、血飛沫が飛んできた!?

もちろんこれも避ける。

このままスルーしていこうかなと思ったのだが、見過ごすのも悪い気もするし、しかたあるまい。

それにしてもNPCの割には表情豊かなオジサマである。まるで本物みたいだ。

とりあえずオジサマの肩を食って次は僕を味見しようとはかりにキメラアントが襲い掛かる。

鎌状になっている前両足を振り上げて僕を捕獲しようとしてくるキメラアントだが、いくら初期化されたといってもそれなりの敏捷性を持つために問題ない。

さらには称号での能力補正効果もある。

こんな雑魚に負ける要素はそれこそ万に一つしか無いだろう。

「グガアアアアアアアッ!」

「しっ!」

そのまま懷に踏み込むことによって鎌を避け、踏み込んだ勢いで頭を拳で軽く弾く。

すぐにしゃがみつつ、回転。

足を出して、足払いを食らわせる。

ドウと軽く音を発てて、倒れこむキメラアント。この間1秒。

そして急所である頭に向けてメニュー画面“いべんとり”からハン ドガンを一丁、取り出して装備。

ベレッタ90TWOと呼ばれる自動拳銃で、装弾数は17発。

弾は状態異常“睡眠”にするための麻酔弾である。反動が少ないように作られており、デザインの的にも僕が一番好きなハンドガンである。

サブレッサー
消音器付き。ナックルガードもつけてある。

頭を狙って撃ち据えると、キメラアントは先ほどまでの獰猛さがウソのように静かになった。

無駄な殺しはしない。

それが僕の美学。

・・・なんてね。

殺しも何も、仮想空間ゆえに“ごっこ”でしかないわけだが。

一体、眠らせるまでに1秒ほど。

全盛期？の僕ならば0.1秒とかからず眠らせられたと言うのに。

まあそれを言ってもしかたあるまい。

他にも4体ほどいたので、CQCで体勢を崩して麻酔弾をヘッドショットさせるということを繰り返すとすぐさま周りのキメラアント達は沈黙した。

一体だけ、クリティカルにも関わらず状態異常になんなくて焦ったが、CQCのスキル「押さえ込み」でそのまま押さえ込んで気絶に持っていた。

派手な必殺技が存在しないってのもCQCが不人気の理由だったりする。

「あとは・・・っと。あ、忘れてた。」

うめくオジサマを見て、オジサマが死に掛けていることに気づいた。ウィンドウを開いて“いべんとり”から回復スプレーEXを取り出す。

それを傷口に吹きかけるとオジサマの傷がみるみると回復していく。それを見て驚きの声を上げるオジサマ。

そして周りの生き残りの人達もめっちゃくちゃに驚いている。

というか終始驚き通しだ。

何か変なことしたのかな？

「あの？」

「お嬢ちゃん、貴族か何かなのか？」

でも、今の身のこなし・・・冒険者？ウィンドウも開いてたし・・・なんにせよ良かったのかい？

こ、こんな高価なものを使ってもらって・・・」

「構いませんよ。」

まだ沢山ありますし。」

なんだ。そういうことか。

確かに序盤の街であるどらごにつく王国では回復スプレーEXはバカ高い。が、後半の街になるにつれて安く売られるようになるので（正確には自身のレベルが上がるのにつれて）、今は吐いて捨てるほどにある。

いべんとりには99個の塊が10個分も入れてあるし。

RPGでは回復アイテムを買いだめしておくタイプなのである。

「もう少し安いのも良かったのだが・・・」

「コレしかないので・・・」

僕が攻撃を一撃でも食らった場合、大抵瀕死まで追い込まれるか即死するかなので他の回復薬だと回復が間に合わないのだ。

なおかつ自分で使うよりも仲間に使う機会の方が多かったりする。

「それじゃ、僕はこれで。」

とっとと立ち去ることにする。

イベントはいらん。

というか、仮にあったとしてもこういうイベントはアバターが女ならバイケメンが。

アバターが男ならば美少女、美女が出てくるのが相場なのではないだろうか？

なんでおっさーオジサマなんだよ!？

いや、オンナノヒトで無いだけマシか。

オンナノヒトコワイ。

オンナノヒト、ウソツキ。

ワタシ、接点をモチタクナイヨ!!

などと考えつつ。

目の前に見えてきたどらごにつく王国を目指すのであった。

4 わ しょうげきの の じじつ (前書き)

作中に出てくる銃器の知識はにわかです。

間違っていたら、教えてください。

見た目を知らない人のためにそのうち銃器のイラストを入れます。

4わ　しょうげきの　じじつ

どらごにつく王国。

街の中に入ると人々の活気の溢れる声で気おされる。

何時来ても騒がしい街である。

どらごにあ大陸最大の街だから仕方ないことだが。

「掘り出し物屋も寄って置こう。」

掘り出し物屋はその名の通り、掘り出し物があるお店。

街によったら必ず見ておくお店である。

高い物は万々億単位を超える物もあり、安い物では1ルークもしない。

ルークはこのゲーム内での公用金貨である。

ところが。

色々とおかしい点に気づいた。

というか問題点。

まず一つ目が店の看板の文字が読めない。

日本のサーバーなら日本語だし、英語圏のサーバーなら英語。

ドイツのサーバーならーと各国に対応してるはずなのだが、見たことも無い文字である。

エラーで僕の知らないどこかの国のサーバーに入ってしまったと言うことだろうか？

ちなみに街行く人の言語はちゃんと日本語に聞こえるが、これは外国人のユーザーともコミュニケーションが取れるようにと、称号「ほんやくか」を持っているからである。

登録すれば何よりも真っ先に手に入る称号だ。

効果はもちろん外国語の翻訳。

そして次に気になったのが、僕以外のユーザーがいらないということにある。

プレイヤーにはフィールド上や気配隠蔽などのスキルを使っていない限りハンドルネームとそのキャラのレベルが頭上に出現するはずである。

それが1人もいないというのは明らかにオカシイ。

僕の頭上のネームプレートも無いことに気づいた。

三つ目がちょいちょい地名や店名が違うことである。

その辺のオバサンや商人の話を盗み聞きしてみるに、どらごにあ大陸のどらごにあ王城というのがこの街の正式名称のようだ。

国としての名前もどらごにあ王国となっていた。

どらごにあ王城から出た先ほど、キメラアントと出くわした森の続く街道も「どらごにつく街道」から「どらごにあ森林街道」と言うらしい。

さらには掘り出し物屋「おたから」が無くなっている。

いや、あるにはあるのだが店の様相が変わっていた。

見たこともない文字で書かれてるため、店名は分からない。

軽く入ってみた。

「え、ごめんくださーい？」

きいーと木作りのドア特有の音を発てて店内に踏み入る。

割としっかりしていた様相だった店はとてもボロくなっており、正直店なのかも分からない。

「はいはい、お客さんとは珍しいです!!」

奥から現れたのはボロツちい服を着込んだオカッパ頭の女の子である。

オンナノヒトツ!?

ちよつと身構えてしまったが、所詮はAIでCPUでNPCだ。

怖くない、怖くない、怖くない。

ここはヴァーチャルであり、これは現実じゃない。

大丈夫大丈夫・・・ふう。

仮に彼女がリアルだとしてもだ。

彼女にはなんら罪はない。そう、仮に友達として付き合う分には問題ないーハズだ。

いや、でも中には友達としての信頼すら裏切る女性がいてもおかしくない。

いやいや、まてまて。

なんにせよ店員である彼女がなんだろうとドウでも良いことである。どうせもう会うこともあるまい。

なぜなら女性店員と言うことでこの店は僕のブラックリストに入っただのだから。

たとい一つしかないレアアイテムが出ても買いに来ることは無いだろう。

自分にそう言い聞かせつつ。

「ここってお店・・・ですよね？」

「は、はいです！」

お、お客様ですよね!？」

「掘り出し物屋・・・ですか？」

「はいです!!」

お客があまり来ないようで、僕が来たことがよほど嬉しいらしい。

カウンター越しに身を乗り出してくる。
それを半歩下がって距離を取る僕。

体が自然と反応してしまうところを見るとどうやら僕は女性恐怖症になったのかもしれない。

それも重度な。

目の前の少女は12、13くらいにしか見えないが、やたらと胸の発育が良いので嫌でも女性だということを認識させてくれる。

耳の上辺りから生えている角を見ると鬼族か魔族あたりの種族だろう。

どちらも長寿（という設定）な種族なので、もしかしたら見た目よりも歳を食ってるかも。

せめて胸が無ければ異性ではなく、子供として接することが出来たのが無いものねだりをしてでも仕方あるまい。

まさか千切りとるわけにもいかないし。

いや、この発想自体無いわ。

我ながらアホらしいことを考えた物だ。

自分で自分に笑う。

「あ、あの何か変ですか!？」

そ、そういえば私が出てきたときも身構えていたような・・・やっぱりこんなボロ布纏った店員なんてお目汚しですよね。

・・・産まれてきてごめんなさい。」

ヘヴィな自虐を始めたっ!？

変といえば変だが、確かにボロ布来た店員はお目汚しだろうが、とりあえずそこまではないからねっ!？少女よ!!

「そ、その女性が苦手です・・・近くに寄られると思わず身構えちゃうんです。」

「えと・・・男なら分かるんですけど・・・失礼ですけど女の子同士で怯える意味が・・・」

ちっ。男の娘の外見は不便だな。

いちいち訂正しなくてはならん。いや、もう来ないしその辺もまたどうでもいいか。

「とにかく苦手なんです。

ですからあまり近くに寄られると殺しちゃうかもしれません。」

「そこまで!？」

「具体的に言うとはムにして出荷プレイを・・・」

「出荷プレイっ!?!なにそれっ!?!」

お、お客さん!?!変人ですか!?!」

「失敬な。変態だ。」

「どちらにせよ気持ち悪いっ!?!」

「気分を害したので帰ります。」

「あっ、待ってくださいっ!?!」

わ、私が悪かったですから、なんか買って言ってくださいっ!?!
ひもじいのはいい加減、嫌なんです!?!」

「見た目美少女の私に言われても・・・そんなにお金を持ってるように見えます?」

見たところ私に買える物はありません。」

「そ、そんなウソを言わずともっ!?!」

サービスしますから・・・今なら私の脱ぎたてパンツも付いてきますから・・・」

「アホかッ!?!いらんわっ!?!てか、美少女のトコスルーしやがったな。」

「え、でも、お母さんが“変態さんにはパンツが効果抜群よ”って・・・しかも脱ぎたてであればそれで100万は堅いって・・・」

「そんなことを実の娘に教える貴様の母こそが変態だろおがっ!?!」

「ひ、人の親を捕まえてなんたる暴言っ!？」

慰謝料を請求します!!」

「断固拒否します!!」

「パンツつけても?」

「たりめえだっ!!」

てか、いらねえって言ってんでしょっ!？」

「この変態・・・強情ですネ!？」

「なんも我慢して無いからねっ!？」

「じゃあブラジャーもつけますっ!!」

「もっとマシなもんを用意できないのっ!？」

「え？」

・・・ほ、頬にちゅー・・・とか？」

「顔を真っ赤にしつつ言うだけの羞恥心があるのにどうしてそんなことを言い出したんだか。」

「だって、だってえ・・・もう、体を売るしかないじゃないですかっ!!」

「厳密には体じゃないよ!？」

「私の始めてを売れとっ!？」

げ、外道ですっ!!ここに外道が・・・鬼畜が居ますっ!!」

「人聞きの悪いっ!？」

なんなんだ。この極端娘は。

とにかく。

「本当にお金はないんです。」

「・・・そ、そうなんですか？」

「そうです。」

ほら、この金貨。

見たことありますか？」

「・・・無いです。」

結構な田舎でも見たこと無い・・・野蛮人？」

「失礼な破廉恥娘ですね。」

「そ、それこそ失礼ですっ！！」

頬を膨らませてぷんすか怒る少女を尻目に。

やはりか。と嘆息をつく。

ざっと一億ルークもの大金をいべんとりに収納してあるのだが、先ほどの言い合いの最中にちらつと目に入った値札らしきもの。

そこにはR^{ルーク}じゃなくてLと書かれていた。

この分だと銀行に納めてるお金も鉄くずと化している。

この国の金貨に両替できるかもしれないが、今の彼女の言葉を信じると恐らく無理だろう。

今回のエラーの原因ゆえの仕様変更。ではないはずだ。

いくらなんでもこれは無い。ここに来て金貨の仕様を変えるなど“どらぶれ”スタッフからすれば余計なプログラミング作業だ。

そもそもプレイヤーからの猛烈なバッシングを受けることになる。

それは避けるはず。

わざわざ変える意味も無い。

ここまで来ると・・・これはもしかして？

いや、まさか。ありえない。ウィンドウも出たし。ここが“そう”であるはずがない。

先刻のオジサマも珍しくは無い目で見ていた。他の部分で珍しかった。はいたが。

それに目の前の少女。

幾らなんでも表情が“豊か過ぎる”。

隠れメインキャラ・・・とか？

「なんていう金貨なんです？」

いまさらだがこんなアホっぽい小娘にも敬語を使うのは初対面だからである。

たといこの娘ツ子がアホであろうとバカであろうとマヌケであろうと礼儀は守る主義なのだ。

礼儀に厳しい。それが日本人である。

むっ、少し少女からの視線がきつくなったような気がした。

「リーフです。」

本当に持ってないんですか？」

「ええ、無一文です。」

「・・・はあ。」

お互いに貧乏なんですね。」

「失敬な。」

ボロ布しか纏えない底辺少女と一緒にしないで下さい。」

「んなっ!？」

そ、その言い草はあんまりです!!

異議を申し立てます!!」

「却下です。」

「お、横暴だ!!」

横暴すぎます!!」

「それに私なら多分、すぐにお金持ちになれますし。」

「ふ、ふざけんなです!!」

人生そんなに甘くないってのが世の常なんですから!!

お母さんがそういつてましたし、現在進行形で私はそれを味わっています!!」

「じゃあ、明日、また来ますから。」

度肝を抜いてあげます。」

「じよ、上等です!!」

もし、稼げたなら私を嫁に貰ってもらいますからね!!」

「なんでっ!？」

「このまま貧乏なくらいなら愛して無い相手だろうと、同姓だろうと・・・え、えええ、えっちなことをしてやるってことですよ!!」
「ありがたく思うです!!」

「僕に対するメリットが驚くほど無い!？」

「本当に失礼なっ!？」

私というお嫁さんを貰えるんだから素直に喜べば良いでしょう!!」

「・・・わーうれしいな。」

「棒読み過ぎませんか!？」

「では、失礼します。」

まあ、もう来る気は無いが。お嫁さん？

二次元のお嫁さんを貰ってもね。

いや、ポリゴンなので三次元だが。

今日の晩までにはログアウトできるだろうしエラーも回復するですよ。

あれ？

そうなると稼ぐまでもないな。

いや、でもエラーにしては修正が行き届きすぎてる気がする。

周りの店を軽く除いて見てもLに変わ^{リッ}っていた。

何を考えてるんだろう？

運営側は。

ま、これから先、Lになるとしても宿屋にちょっと泊まるくらいのお金は持っておいたほうが良いだろう。

依頼屋にでも行く。

☆ ☆ ☆

と、思ったけど字が読めなくてどこなのか分からない。

今更だけど、これって文字化けか？

文字のテキストくらいしつかり打ち込んで置けよと思う。

ここの依頼屋に来たのは数年前以来だしな。

いちいち使わない施設の場所まで覚えてない。

しょうがないので地道にそれっぽい建物を探すことにした。

少し歩いて見つけた。

依頼屋は色々なクエストが受けられる施設であり、中には特殊なストーリークエストなどもある。

西部劇に出てくる酒場のような内装、外装で、ドアは無く、そのまま押し入る形のーードア？

ドアの真ん中だけをくりぬいて、押し開き形にしたーーあのだアってなんていう名前なんだろうか？

クールビズドア？

風通しが良くなりますって？

おほん。

とにかくそこに入っていくと、酒場内の空気が一変した。

え、何？

その珍獣でも見たかのような視線の数々は？

こっちみんな。

というかイカついNPCが多いな。

ただの日本人にはちょっととした怖さがあるぞ。

もちろん中には優男風や美女や美少女と言った感じの人達も少なからずいる。

「あら？

こんなに可愛い女の子がここになんのよう？」

「あ、はい。」

依頼を――ひあっ!？」

鈴のような綺麗な声をかけられたので、内心女性職員か。とストレスを抱えつつも振り向くと、悪い意味で期待を裏切るルックスの職員がいた。

ゴリマッチョである。

いや、単に男であるならば僕にとっては良い意味でなのか？
だがしかし。

さっきのオカッパ少女の言葉をパクルわけではないが、世の中甘くない。

男の服装はピチピチの女性用のスクール水着。

これが悲鳴をあげかけた理由である。

圧倒的な存在感。

戦慄すら覚える。

というか直視に耐えがたい。

人の趣味にケチをつけるつもりはないのだが、これは目が腐る。

僕は恐怖症であろうとも、基本はやはりノーマルなのだ。

可愛い女の子を少し離れて見る分には問題ない。

だが、これは――あらたなトラウマを発生させそうなほどキツイ。
どうせなら女性職員の方が良かった。

顔を引きつらせつつも僕は目の前の変態に用件を伝えた。

「依頼を――」

「それにしても可愛い子ね？」

リンスは何を使ってるのかしら？」

「依頼を受けー」

「このキューティクル！」

大きなお目目！！

小さな唇に長いまつげ！！

将来確実に美人になるわよっ！！

いや、でも白い髪に赤い目ってことは妖精族か魔族かしら？
だとすると今が限界ってことも・・・」

「いや、だからー」

「服のセンスも良いわねっ！

どこで買ったの！？」

話を聞かないぞ、この変態。

もしかしたらこいつは話しかけてきただけの変態なんじゃないか？
と思った。

いや、そうに違いない。

依頼屋は国が主導の国家機関。

その職員がこんなシュールな生き物を雇うはずが無いのだ。

あまりのインパクトにそんな常識も吹っ飛ばしていた。

全く、僕としたことが。

失敗、失敗。

ちなみに僕の種族は妖精族。ディレイと敏捷、魔法攻撃力が上がり
安い種族である。

なぜ目の前の変態は髪の色で種族を言い当てたのだろうか？

髪や目は自由に変更できるから当てにならない。

そして男の娘を女の子として扱うことも“無い”。

なぜなら彼等はAIなのだから。

まあ良いや。こいつをシカトしてちゃんとした職員のところへー

「ちょ、ちょっと所長っ！？」

置くから女性職員が出てきて、目の前の変態に声をかけたようだ。
OH MY GOD!
現実は無常である。

「あら、何?」

「“あら、何?” じゃありません!!」

なんで私のスクール水着を持ってい——きゃあああああああ
っ!」

変態改め所長を見てゴキブリを見たかのような悲鳴をあげる女性職員。
員。

気持ちは分かる。

僕もあげそうになったから。

そもそもなぜスクール水着を持ってきたのだ? 女性職員よ。

それさえなければ目の前の悲劇を回避できたものを。

周りの冒険者はまたか。という視線である。

どうやら目の前の所長とやらは恒常的に変態的らしい。

残念な人のようである。

そして女性とは別の意味で係わり合いになりたくない。

声と見た目のギャップもそこに拍車をかけているのがなおさらである。
る。

所長は女性職員につれられ、奥へと引きずりこまれて行った。

せいぜい痛めつけて欲しい。

「あの・・・」

「はい、どうしました?」

カウンター内で冷静にそうした小事（と言えるほど小さなことではないけれど）を見つめていた職員に声をかける。
うっ、ストレスが。

男性職員をだせや！と叫びたいのを堪えつつ。

「依頼を受けたいのです。」

「ええと・・・」

という困惑した表情を浮かべる女性職員。

ああ、確か前金が必要なクエストが大体だったっけ。

「前金の無いクエストをお願いします。」

「ええと・・・本当に大丈夫？」

命の危険がある仕事なのよ？」

「大丈夫です。」

いちいち聞き返されるとはまた不思議な。

どんどん違和感が強くなる僕。

「でも・・・あ、そうだ、クエストカードは持ってる？」

「持ってます。」

クエストカードはクエストを受けた回数や成績などが記載される物。
依頼屋に初めて来たときに貴重品だ。

いべん通りの“きちょうひん”カテゴリからクエストカードを取り出した。

もちろん最高のSSランク。

転生を一回でも経験した人は大抵の人がSSランクだろう。

「？」

これって、どこの国のかしら？
おかしいわね。

文字も見たことが無いし・・・ちょっとこれでは受けられないかしら。」

ば、ばかなっ！？

なんでっ！？

これもエラーかつ！？

いくらなんでもありえないだろっ！？

いや・・・もしここがーーーーいや、それはありえない。

そう、ありえないハズだ。

バカな考えを頭の片隅に押しやり、そのままクエストカードを貰うための手続きをする。

これが面倒だった。

同意書やカードの機能取扱説明書、規約書などなど。
まるでーーーー「現実」のような。

いや、まさか、ね。

エラーである。

エラー。

そうに決まってる。

やたらと心配したような目で見てきた職員さんに見送りされながら
ーーーー餞別でコンバットソードを貰った。要らないと断ったのに
ーーーーどらごにあ森林街道にやってきた。

クエスト達成条件は最近増えてきたというキメラアントの討伐。

殺した数が多ければ多いほど報酬が多くもらえる。

ちなみに成績の項目として倒したモンスターの討伐した日付、場所、
数などが記載されるため倒した証拠などとは必要ない。が、素材は売

れるのでイベントリに入れて持ち返ると良いと職員さんに言われた。無理しないようにね、とも。

プログラムにしてはやたらとしつこく僕がクエストに行くのを渋っていた職員さん。

大丈夫。そういうプログラムなんだろう。もしくはエラーだ。

そう自分に言い聞かせた。

街道をしばらく歩いた後、森にスキル「気配遮断」を使用して入っていく。

気配隠蔽1〜2もあるので仮に視界に入ってもよっぽど接近しなければ気づかれない。

気配隠蔽3も欲しいなとちょっと思う。

ただ気配隠蔽3は麻酔弾やCQCで20万以上の敵を眠らせるか気絶状態にすることで手に入る称号。「はだかすねーく」というので手に入る。

今はおそらく19万くらいか。あと1万だが少し遠い。

「この辺かな？」

丁度良い狙撃ポイントを見つけたのでここから狙い打つことにする。

狙撃銃は中々近距離で使えるVSSという狙撃銃。

狙撃銃はその射程距離ゆえに音速クラスで弾を打ち出すため、射出音が特別大きい。

その射出音とマズルフラッシュ（銃を撃つときの火薬の光）を緩和しつつ狙撃できるというコンセプトで作られた銃がVSSらしい。

連射性も高く装弾数も多いことから突撃銃としても使える汎用性の高い銃器であるが基本的に接近戦では使わない。

装備重量ゆえに敏捷性が落ちるからだ。

装備重量は3。ロングソードが1。銃器というのは意外と重く、3は軽いほうだ。現実では3キロなんてざらで、ハンドガンでも70

0〜900グラム前後が平均らしい。

1につき敏捷が100落ちるのでこれは大きい。

ただ、思ったよりも敏捷が落ちて無い気がする。

そう、根性でカバーできるレベルーいや、ここはゲームである。数値で測れる世界だ。もちろんVRゲームであるがゆえに根性と気力でカバーできる部分は多いがーそれとは根本的にーいや、まさか。

現実じゃない。そんなはずがない。

そうだ。

試してみれば良い。

キメラアントの死体を一体分だけ守れば良いだけだ。

ボス敵はマップを切り替えるまで。

雑魚敵は一分ほどでフィールド上から消える。

消える前に他のモンスターが食べて体力を回復するというシステムがあるが、そうさせないためにも守りきる。

よし。基本方針はこれで行こう。

背後に敵が近づいたら気づけるようにイベントリから“赤外線センサー”を取り出して木々に取り付ける。赤外線センサーも買っておかないとな。

なにはともあれ準備完了だ。

後はただスコープを覗いてトリガーを引くだけ。

一体を殺して後はひたすら撃ちまくる。

日が暮れた頃。

僕は帰った。

いや、“帰れなかった”。

これからもずっと。

4 わ しょうげきの じじつ (後書き)

オカッパ頭の少女はヒロインでは無い。予定。
ただの仲間キャラ。の予定。

不思議とオリジナル小説はギャグが書きやすいです。

5 わ きぞく は しっかりしてた（前書き）

主人公の女性恐怖症は女性を信じられない。

女性に触れられるとストレスによって鳥肌になり、長時間触れ合うとお腹を壊す、まれに吐血といった症状です。

5 わ きぞく は しっかりしてた

ここは現実である。

その事実はずなわち。

良くは分からないが僕は「どらごにつく☆ぶれいかあ」に似た世界に来てしまった。

と言うことに他ならない。

そしてHPやMPなどの数値は“ただの目安”であることも理解した。

キメラアントを狩っている最中。

ありえないことが多々あったからだ。

信じたくなくて。

モンスターの体が何時まで経っても消えないことを認めたくなくて。ただの仕様変更だと。信じたくて。

ただ無我夢中に照準にキメラアントを入れて撃っていたら、赤外線センサーの警戒音も認識できなかった。

結果、背後から攻撃を貰った。

やってきたモンスターは「キングアント」。キメラアントの上位種である。

しかも数匹のキメラアントを率いてやってきていた。

狙撃者を探し出して背後から仲間を引き連れて忍び寄る。こんな行動は見たことが無い。

こんな行動をプログラミングされてないはずだ。

そもそもキングアントはまだ先に出てくるモンスターで、初っ端のフィールドで出てくるような雑魚ではない。

何より、攻撃力が強く、今の防具もない僕では一撃かするだけでも

即死である。
だというのに。

直撃を受けても体は霧散しない。
なおかつ体が動いた。
ずるずるとでも動けたのである。

ウェインドウで自分のHPを確認した。死に掛けているのにもかかわらず。

現実ではないということを否定したくて。

HPはゼロになっている。
霧散する。はず。
ポリゴン化して消えて欲しい。
消えて欲しかったのに。

自分の血溜まりの中で現実だと認識してしまった。
一度認識すればもういい。
あきらめは付く。
どうせ死に掛けていた。
命を拾ったんだから。

でも、マキに会えない。
それが凄く嫌で。認めたくなかった。

結局のところ、キングアント含めて殺した。
関節を狙って。

あえて素の攻撃力で。
使わないと思っていたコンバットソードを使い、関節を狙って切り裂く。

ゲームならば切れるはずが無い。

だが、切れてしまった。

体重をかけて、しっかりと踏み込むと。

やりようによってはステータスの差を埋められる。

まるで現実だ。いや、違う。

これだけやればさすがにもう間違えようも無い。

背中の痛みの質と良い、これは確実に。

確定だ。

回復スプレーEXも間に合っちゃったし。

とはいえ、血を流しすぎたのがめまいがする。

めまいまでは治らないようである。

ま、現実だしね。

やたらと突き刺さる視線にうんざりしながら僕は依頼屋へと報告に行く。

なるほど。

依頼屋で珍獣を見るみたいな目で見られてたのは一見小さな女の子にしか見えない僕があんな場所に入っていたからか。

実際は男だし、中身はそこそこ歳を食ってるのだけど。

防具も無く、武器らしい武器も持たない。

そりゃ職員さんも無謀にも命を投げ出そうとしてる人がいればさすがに止めるくらいはするよね。

納得した。

だが、今度は街の人の視線も感じる。

なんだろう？

裏路地を通って行こうか。

不愉快だし。

☆ ☆ ☆

依頼屋に入るとまたもや無遠慮な視線にさらされる。

心なしか驚きの表情がほとんどだ。

ふふふ。

僕みたいなちびっ子が生きて帰ってこれると思わなかったとか？
少し心地良い。

「あの・・・」

「はいはい、今・・・って、きゃああああああああっ!？」

行く前にやたら心配してきた女性職員が僕を見て悲鳴をあげる。
し、失敬な。

スクール水着を着た変態を見ても動じなかった職員さんが悲鳴をあげるなんて、どれだけのものを見れば良いというのだ。

そんな酷い見た目をしてるのか!？

と自分の姿を省みて気づいた。

服が血でどろどろっ!？

そうだ、ゲーム感覚で居た!!

一度死ぬと服は初期化されるので、その感覚で―――となると街での視線はこれを見てたのかっ!？

しかも後ろから爪でバツサリときられたので背中が尾てい骨あたりまで丸見えである。

これは恥ずかしい!!

ちなみにヒラヒラとしたゴスロリ風の服なので背面がぱっくり割れたドレスに見えないことも無い。服の種類や女装しているのはマキの趣味だったため僕の趣味では無いことを言うておく。

何はともあれ、まるで露出狂のちびっ子である。

きっと街で見えていた人は「あの歳で変態とは――将来が怖いわね」とか思っていたに違いない。

は、恥ずかしすぎる。

何よりも気づけなかったことが恥ずかしい。

「だ、大丈夫ですか!？」

「ええ、まあ。」

それよりもクエスト報告を――」

鏡を見ればきつと顔が真っ赤であろう。

そんな顔を見られたくないので、俯きながらぼそぼそと話す。早く宿屋に行きたい。

ここで着替えるわけにはいかないし。

「いや、そうは見えません!」

「それはだから――」

「傷を見せてください!!」

「だ、だから・・・というか、さ、触らないでっ!？」

おうわ、腕を掴んできて服を脱がしにかかる職員。

なぜここでっ!？」

というか、大丈夫だって言ってるのに!!

「ちょ、ちょっとやめてくださいっ!!

てか、やめろおおおっ!!

こんな場所で脱がすとか正気っ!？」

意外と力が強い。

攻撃力Ⅱ筋力でもあるのでそれが低い僕は負けてしまう。

「あ、そうですね。」

奥に行きましようか。」

「ちょ、ちよつと、奥とかそうじゃなくて―――そもそも掴むな―――オンナイヤ、コワイ。」

と、ととと鳥肌が。

そしてストレスで胃がキリキリと。

「ごふっ！」

「ほら、やっぱり無理してたんじゃない!？」

と、というか、回復アイテムを―――」

吐血する僕。

これは別に無理してたとかじゃない。

強いて言えば今、無理をしている。目の前の女性のせいである。

肺もバツサリいつていたのでその傷が開いたのだろう。

ゲームなら回復薬ですぐに回復だが、ここは現実。

無理をすれば塞がりかけた傷が開くのは道理。

もがいて逃げ出そうとしていたのも手伝った。

ウィンドウメニューを開いて、いべんとりから回復スプレーを取り出す。

それをもう一度体に吹きかける僕。

さすがに二つも使えば完璧だろう。

「これは回復スプレー？」

ほ、本当に大丈夫なのね？」

「大丈夫ですから、とにかく離してっ!!」
「むむむ。」

渋々と僕から離れる女性職員。

まだ心配そうな顔を向けてくる女性職員だが、それを気づかぬフリをして話を進めることにする。

再度驚かれたが、そこは気にせずお金を受け取る。

もって帰ってきた素材も合わせると50万リーフも貰った。

いやあ、ぼろもうけである。

ゲームではバランス上、100匹狩って素材と報酬を合わせても1万が精一杯だが。

ここは現実で命の危険がある分、討伐報酬が高いのだと思う。

素材の値段はゲームと変わらなかった。

モンスターは武具の素材として使われるほかに、他のモンスターの餌にならないようにと街の畑の肥料などにするそうである。

大抵のモンスターは後者の意味合いが強いそうなのであまり高くは売れない。

なんにせよ良い仕事である。

200匹ほど狩って、キングアントも狩った為になかなか美味しかった。

「あ、それとこっちに来て。」

「な、なんですか?」

もう帰るところとところで、引き止められる。

まだ何かあるの?

「そのまま街を歩くわけにはいかないでしょ?
部屋を貸すから、着替えていきなさい。」

「・・・えと。お言葉に甘えます。」

確かにそうだった。

この服はもう使えないな。

換えは・・・女物がほとんどで、あとは妖精族専用の服が何着か。ここはやはり妖精族用のを着るべきだろう。

今となつてはこの女の子みたいな顔した男の子ボディが僕なのだからして。

ゲームならばともかく、現実で女装をするつもりは無い。

いや、ゲームでは普通に女装していたし、女装自体はそれほど抵抗が無い。望んでしたいと思わないけどさ。

男なのに女の子のような外見だからと女装をしていたら周りから変態扱いされるだろう。

それはイヤだ。

普通にイヤだ。

というわけで着ないのである。

一番はマキに「可愛い」と言われながら着せ替え人形にされたことを思い出すから、というのであるが。

「さて、どれにしようか。」

妖精族の服はファンタジックな服でなんというかデザインが複雑すぎて伝えづらいのだが、民族衣装風。とでも言えればいいだろうか。そんな感じで男性でも女性でも似合うという服である。

「服の換えはある？」

「あります。」

「そう。それじゃ、着替え終えたら言ってね。」

クエストカードの更新をしておくから。」

クエストカードにはランクがあつて、8段階。

両生類のカエルの成長過程をモチーフに決められているらしい。
なぜカエルなのかは知らない。

卵　ゼリーのような物に囲まれた卵がクエストカードに表記される

オタマジャクシ初期　小さなオタマジャクシが表記。

オタマジャクシ中期　後ろ足が出たオタマジャクシが表記。

オタマジャクシ後期　前足も生えたオタマジャクシが表記。

カエル初期　尻尾が生えてるカエルが表記

カエル中期　尻尾が半ばまで吸収されたカエルが表記。

カエル後期　尻尾が無くなったが小さなカエルが表記。

カエル成熟期　大きなカエルが表記。

となる。

それぞれにこの世界特有の名前があつて文字で書かれてるため見てもこれらの言い方は分からないけれども。

今回はオタマジャクシ初期にランクアップ。

200匹狩ったことよりも、キングアントを倒したことを評価されたいらしい。

ちなみにレベルは1上がったので今は2である。

転生回数が10回のせいかわどくレベルが上がりづらい。

2〜3レベルの雑魚敵200以上に20レベルを超えるキングアント。

それを倒してもようやく1レベル。

先は長い。

ただステータスが少なくとも50上がったのは凄い。

敏捷やディレイにいたっては100以上だ。

と、振り返りつつ着替えを終わらせる。

丁度職員さんが戻ってきた。

イキナリドアが開いたのでちょっとビビった。普通、ノックくらいしない？

「はい、響ちゃん。

クエストカードの更新終わったよ。」

「ノックぐらいしたらどうです？」

「別にいいじゃない。女の子同士だし。」

「・・・僕は男ですよ。」

これからもしばらく付き合っていかなくてはいけない以上、性別の訂正はしておこう。

しばらく通って、レベル上げがてらお金稼ぎに興じるとする。

「またまたあ、意味の無い嘘を！」

「というか、なれなれしいです。」

なぜこの人はここまでなれなれしいのやら。僕が“わざわざ”敬語を使って、離れた距離感というのを回りくどくアピールしていると
いうのに。

もう、どうでもいいかな。

いや、良くないな。

死活問題だ。特に胃の。

「私はレト。

よろしくね。」

「そんなこと聞いてません。」

というか最初の時の敬語はどこへ？

なによりも僕は女性が苦手なんです。

あまり近づかないで下さい。」

「うーん。やっぱり男の子ってのは嘘でしょう？

自分で言うのもなんだけど、私って一番人気のある受付嬢なのに。

思春期真っ盛りの男の子が女の子を苦手にとってのも少しおかしいし。

男色家なの？」

「ち、違うわっ！」

こいつに敬語はいるまい。

無礼千万だ。

男色家？

バカを言っちゃいけない！！

確かに女性が苦手にはなった。が、だからといって男に走る！というわけでは断然無いのだ。

ありえないのだ。

バカなこと言わないで欲しい。

男とはそうした薔薇色の気色悪い関係ではなく、少年漫画に出てくるような熱い友情を前提とした関係を持ちたい。

これが夢である。

「・・・もう話は終わり？」

僕はもう帰りたいんだけど。」

「今度からここに来たときは私を呼んでね。

レトお姉ちゃんって呼べば来るから。いや、むしろそう呼ばないと来ないから。」

「別の職員に頼むから結構だ。」

「ふふふ、それはどうかしらね。」

「？」

不気味なレトの笑みを尻目に宿屋へと帰る僕であった。
そして次の日。

「ふああああ。」

良く寝た。ベッドは同じでよかった。」

トイレも不安だったし、ご飯も不安だったが良かった良かった。
どらぶれは中世ヨーロッパを再現した世界観だが、トイレやベッド
は現実そのままである。

ただやはりここは異世界のお風呂や石鹸が無かった。

お風呂、というかお風呂代わりは宿屋の裏に引いてある川の水で体
を流すらしい。

そんなのイヤだ。

冷たい川の水じゃ体が冷えるため長時間洗えないし、石鹸が無いの
も耐え難い。

石鹸は仕方ないとしてもお風呂。少なくともお湯で体をしっかり洗
いたいものである。

石鹸が無い以上、垢すりが基本なのか？

昨日は暗くなっていたのと、色々あって疲れていたのと髪の毛も血
でごわごわになったために止むを得ず我慢した。

が、それが毎日なんて耐えられない。

家を買って、お風呂を作るべきだろう。

水道自体は通っているため、風呂釜と湯を温める機構を取り付けられ
ば上手くいくはずだ。

というわけで50万リーフを使ってまずは家を買わねばなるまい。

不動産屋へ行こうとなった。

宿屋で朝食を取り、外へ出る。

湯を温める機構はどうしようか。

火の精霊石を上手く使えばなんとかなるかな。

お風呂の設計を考えながら歩いていくと掘り出し物屋が目に入った。
もちろん、スルー。

自分からオンナノヒトと接触するなんてナンセンスである。

ところがどっこい。

なにやら揉め事のように・・・小太りの身なりの良い男性に絡まれていた。

うん？

貴族かな？

本来のどらぶれならば貴族は大抵文字通りの良い人、ないしは誇り高い人が大半だ。

イベントで悪役の貴族がいたりとかするがそれはごく少数でしかない。

問題ないだろうと見なかったことにしようとする。

声がちょいちょい聞こえてきた。

奴隷とか体とかそんな単語も聞こえてくる。

ううむ。

これは奴隷になりそうなところを助けるフラグ？

雰囲気的に多分違うと思うのだが。

もう少しだけ近寄って話を聞いてみようか。

野次馬根性丸出しで近くに周りのギャラリ―に加わってみると話の内容がようやく聞こえた。

「イヤです！！」

私は奴隷になんてなりません！！

ここでお店をするんです！！」

「そんなわがままを言われても困るブリ。

オラの元で働けブー。

オマエだけ特別に扱えるわけがないブヒ。」

おはう。

またもや強烈なキャラだなオイ。

「そ、そんなこと言って体を求めてくるんでしょ！！

お母さんが言っていました！！

いやあああっ！！だれか助けてっ！！犯されるっ！！」

「ひ、人聞きの悪いことを言うなブヒ！！

貴族たるもの、弱みに付け込んで無理やりするなんてないブヒっ！！
そもそもオマエはオラの好みじゃないブヒ！！」

相手方がかわいそうになってきた。

その後の話も聞いてみるに、どうやら土地代というものがあるらしくそれを滞納してるのが今回の問題の発端らしい。

目の前のブヒブヒ言う豚っぽい体型の彼はそうした土地代を回収する役目を持つ王宮貴族のようで、20年もの間見逃してきたが、これ以上は見逃せない。ということで土地代を払えってことだ。

オカッパ少女の両親は今の掘り出し物屋をやるまでは有名な傭兵で、数十年前の戦争で命を落としたとのこと。

両親を国が奪ってしまった慰謝料として10年は土地代をなくし、生活保護のお金も渡した。本来なら許されないことだが、さらに10年は見逃した。

ここまでしたけれど、これ以上は見逃せないということである。すなわち。

少女は見た目よりも歳を食っているということに他ならないわけだ。すくなくとも20歳ではあるようである。

うむ。

やはりオンナノヒトはコワイ。

って、そこじゃないね。

とにかく国の所有物となり、国の雑用をしてお金を稼げ。とのことらしい。

ちなみにお店と土地は国に貰われ、打ち壊されて別の公共機関がたてられるとか。

奴隷制度に関してはそうそう非道というわけではないようだ。

簡単に言うとな奴隷Ⅱ国保有の職員の扱いみたい。

実際に良くあるファンタジーのように奴隷Ⅱ酷い扱いということもあるらしいがそれは犯罪として取り締まられているようで、滅多に居ないらしい。

心配して損したね。

・・・いや、心配なんて毛ほどもしてないけど。

ほ、ホントだぞ！！

心配なんかしてないんだからな！！

さらに言えば周りの人はどうやら近所の人ばかりのようで、口々に少女への非難を浴びせている。

この世界における税金もとい土地代を20年もの間払ってないのだから、周りの土地代を普通に払ってる人から見れば面白くないだろう。

そしてなにやら嫌われている事情があるらしく、気味悪いあの子が居なくなるのねとかそんな感じのことを近所の奥さん同士で話している。

見た目の問題も含むが、何か別に含むところもある感じ。

オカッパ頭が全体的に悪いのだが、それでもこの状況を見るに少し面白くないところはある。

ま、あれだ。

彼女には会いに行く約束してしまったしな。

明日にはお金持ちになると。

とりあえず、会うだけ会おうじゃないか。

「どうしたんです？破廉恥娘。」

「だ、誰が破廉恥娘ですかっ！！私にはフィネアという可愛い名前があります！！」

「って貴方は・・・昨日と服装が大分違いますね？」

「まずはそこをツツコムのか。」

約束どおり来てあげたのに。」

「へん！」

き、聞くまでも無いです！！

世の中・・・はっ？」

「この手から溢れんばかりに漏れ出る金貨が見えませんか？」

ガタガタぬかす前にどんと見せてやろう。

金貨の山を。

おととと。

金貨がこぼれちゃったぜ。

ちなみに金貨一枚につき、1000リーフの価値を持つ。銀貨は1

00・銅貨は10。

僕の手持ちは金貨500枚に銀貨が10枚、銅貨が9枚である。

ふふふ。

恐れ入ったか。

ちゃりんと音を発てて落ちる金貨がオカッパ改めフィネアの視線を釘付けにする。

「それで。」

おっさーオジサマ。いくら滞納金があるんですか？」

「ぶ、ブー!？」

あ、えと、約50万リーフブヒ。なんだブヒ？
オマエが払うのブヒか？」

「・・・まあ。そうなります。」

「え!？」

まあ驚くか。

フィネアは悪いと思ってるのか、でも店は止めたくないと思ってるのか。

葛藤で揺れている感じた。

すごく悩んでいる。

「オラとしては構わないブヒが・・・後から返せとか言われても無理ブヒよ？」

「大丈夫です。」

一日で稼げるしね。

「・・・分かったブヒ。

いべんとりに入ってるブヒか？」

「ええ。」

「ならフレンド登録してそこから送ったほうが早いブヒ。いちいち出して渡してしまうというのは面倒ブヒ。ほら、さっさと手を出すブヒ。」

「え“!？”

「その嫌そうな声は何だブヒ？」

「いや、だって・・・豚と友達——あ、いえ、貴族と友達だなんて・・・恐れ多くて。」

「・・・オマエ、凄く失礼ブヒな。」

この口癖はただのキャラ作りブヒなのに。」

そ、それは言わなくてもいいんじゃないだろうか？

「もう良いブヒ。

とつとと出せブヒ。」

という貴族は少し涙目だった。

「ちょ、ちょっと待ってくださいっ!!

べ、別にそんなつもりで約束をしたわけじゃ・・・」

「何を言う？

嫁になるとか言うくらいだったのに。」

「ふえっ!!?

あ、あれ本気なんですかつ!?

そ、その・・・あれは実は冗談で・・・せめて男性じゃないと・・・

」

「安心しろ。

僕は男だ。」

「は？

嘘おっ!?

いや、でも、それならそれで甲斐性溢れる男性がお婿に・・・って、
そうになると私、ええええ、ええ、え、えっちなことをしないといけ
ないことにつ!?

でもでもでも!!

そういうことは好きな人とーーー」

「ひ、飛躍しすぎだっ!!

てか、真に受けすぎっ!!

冗談だからっ!!

冗談に決まってるでしょっ!?

ボケにボケを返したら、さらにボケ返しおった。
この子怖い。

このままボケてたら取り返しをつかないことになっていたかもしれない。

やむを得ず、ツッコんでしまった。

それに嫁とか、ね。

「・・・もうこりごりだよ。」

「はい？」

「いや、なんでもない。」

「そ、そうなんですか？」

ってそれどころじゃなくて、昨日今日会った貴方にお世話になる義理は――」

「まさか。」

僕がただの善人だとしても？
きっちり対価は貰うさ。」

「ば、パンツですかっ!？」

「それはもう忘れろっ!！」

疲れる娘ッ子だ。

「あ、あれだよ。」

丁度僕は家が欲しくてダナ・・・その・・・それでだ。

宿屋とかじゃない、自分だけの空間を持てるような空き部屋がある
ような古くても良い一軒家が無いかなとか・・・まあ、その。

それをだな。目的にどうか。

あれだ・・・さ、察しろよ、もう!！」

「・・・つ、ツンデレですか？」

「ち、違うわッ!! 属性を察しろとは言っていない!!
そしてツンデレじゃない!!」

なれないことをしたから言葉が出てこなかったただけだ!!

決して恥ずかしかったわけじゃないと断固として言うておく!!」

「へえ、そうですか。そうですか。」

ではそういうことにしてあげましょう。」

にやにや笑うフィネア。

忌々しい!!

「そ、そのニヤニヤ笑いを止めんかつ!!

本当に違うんだからなっ!!

くそ!

やっぱり助けずに放っておくんだっ!!」

「やっぱり助けてくれたんじゃないですか。」

「あ、がっ!?

い、今のは、その・・・ち、違ってっ・・・」

「ボロボロですね。」

「う、五月蠅い!!」

あれだぞ。

助けてないんだ。

ただ単に、落ち着ける住処が欲しくて、僕好みの一軒家に住まわせて欲しい家をだな。

丁度探してただけで、それ以外に含む理由は本当に無いのである。
ボロツちい家が大好きなのだ!!

風情があるというかね?

5 わ きぞく は しっかりしてた（後書き）

今回の吐血は胃に穴が開いたわけではなく、肺の傷口が開いて肺の中に血だまりが。結果むせて気管を通して吐血した。という原理。

6わ とても だらしない

というわけで。

僕はフィネアの家で厄介になることとなった。

まず入って思ったのが、店である一階だけではなく二階の居住スペースまでボロいということだ。

いや、正確には長年掃除をしていなかったためか、一見すればボロく見えるほどの汚れが家自体にも染み付いていると言ったほうが正しい。

家自体はしつかりとしたつくりで少なくとも20年前に建てられた物にもかかわらず、老朽化の一端すら垣間見えないというのは余程良い大工さんに作って貰った事を髣髴とさせる。

そんな立派な家をここまでボロく見せるとは大工さんも悲しいだろうし、僕も悲しい。

こんなハエやらゴキブリやらが飛び交う家で住むなんて嫌だ。

昆虫だからと嫌いというわけではないが、不衛生の権化であるハエやゴキブリがちょっと周りを見れば歩いていたり、飛んでいたりという環境はいかんともしがたい。

この環境は異常だ。

ゴミ屋敷かっていう話である。

「おい。」

「な、なにかな？」

さ、さっそく体をつてことですか!？」

後ろから申し訳なさそうに入ってくるフィネア。

申し訳なさそうなのは僕に土地代を払ってもらったからで、ゴミの

ことは何も思っただけいらしい。
尚のこと信じられん。

「片づけだ。」

「・・・かたづけ？」

「汚すぎるとは思わんのか？」

「何がです？」

「ゴミだらけのこの家がだ。」

「毎度毎度失礼にもほどがあります!!」

「ゴミだらけでも人の家ですよ!？」

「もう少しオブラートに包めー!」

「本当に何も思わんのだな？」

「あ・・・いえ、あの。」

その・・・でも、汚くても人は生きていきますよ?」

「まずはビニール袋を取ってこい!!」

「は、はいですうっ!？」

こんのバカ娘!!

なんなのこの子!？」

これが現代の“片付けられない女”ってやつか!？」

現代どころか、異世界だけどさっ!!

現実で体得した主夫スキルを舐めるなよ。

今日は一日かけてここの掃除をする。

それがまずやることだ。

出来ればお風呂の設置もしたい。

後で金買っただけ来ては。

「もって来ました!! たいちよおーっ!!」

「誰が隊長かっ!!」

艦長と呼べっ!!」

「船が無いのにつ!?!」

「心の中に船を持つんだよ!!」

人生という名の荒波を越える船をなっ!!」

「なんかカッコいいことを言い出したっ!?!」

「ふっ、さしずめ今はゴミ屋敷という名の未開地を船一つで渡る渡来人の気分だ。」

「み、未開地とまではいかなと思いますけど。」

「まずは燃えるゴミからだな。」

片付けられない女が何かを言ってるが、それは全無視。

とにかく片付けなくては。

めぼしい燃えるゴミをぽっぽと片付けていく。

無駄にCCCスキルの「中腰歩き」を使っていたりする。

効果は中腰歩きの時の移動スピードが立っているときと変わらないと言うスキルで、相変わらず地味だが、地味ゆえに地味に使えるスキルだ。

手際よく燃えるゴミを片付けつつ、他のゴミはすべて一箇所に集めていく。

燃えるゴミを集め終えると次は一箇所に集めた場所から燃えないゴミを。燃えないゴミを集め終えたら資源ごみをと順々にやっていく。

見る見る片付き、ゴミが纏められていく。

ここでちよっとした誤算もあった。

フィニアがドジッ子属性を持っていたことだ。

人が集めたゴミをぶちまけたり、足を引っ掛けて転んでゴミの固まりに突っ込んだりと、ボロツちい衣服がさらにボロツちくなるフィニア。

転ぶごとにやら良く分からない汁を引っかぶったりもするので、

臭いがまあキツイ。

人の仕事を増やしつつ、自分の仕事も一緒に増やしていく。

なんたる実害か!!

「カメモシ娘、もういいからじっとしておいて。」

「か、カメモシっ!？」

ひ、酷いです!!

私だって一生懸命——」

「頼むからじっとしておいて。」

ほら、飴玉あげるから。」

「わ、本当ですかっ!？」

あ、ありがとうございます!!

最近草ばっかりで甘いものなんて久しぶりで——って、子ども扱いしないで下さい!!

こう見えても28歳ですよ!？」

「・・・僕より4歳も上か。おばさんだね。」

「し、失敬な!？」

い、今は・・・今は今までで一番失敬な発言でした!!
取り消してください!!

そもそも、私は人間がベースですが魔族の血を引いているので28
だとしても人間年齢に換算するとピチピチの18歳ですよ!？」

そ、それをおばさんだなんて、心外にもほどがあります!!」

「18にしてはちみっこい。」

「ああもう!! ああ言えばこう言うっ!？」

貴方はちよつと礼儀を弁えたほうがいいですよ!!」

「くっさい臭いを垂れ流しながら昨日今日会った他人と平気で喋る
人が言う言葉じゃないと思うけど。」

「げ、原因を知ってるくせにそういうのは意地悪です!!
どうしてそうひねくれてるんですか!!」

「別にひねくれてないよ。
おっと・・・ゴキブリの卵塊発見。
これもゴミに出しとかないとね。」

成虫をいちいち殺す気までは起こらないが、卵塊は取り除いておかないと何時まで経ってもゴキブリが消えない。

少し可哀想でもあるが、燃えるゴミと一緒に出すことに。
この世は弱肉強食なのだ。

恨んでくれるなよ。

ちなみにこれでだいたい25、26個目。

どれだけ繁殖してるんだという話。

「とりあえず近くに寄らないで。鼻が曲がるから。そして、アンタは余計な仕事を増やすから黙って座ってなさい。」

「・・・つく!?!」

何もいえないのか悔しそうに黙るフィネア。

そのままリビングを掃除し続けて3時間ほど。のこるは後で掃除機をかけて雑巾がけのみ。次の部屋に行くことにする。

「フィネア、アンタはこのままここで掃除機をやってその後に雑巾がけ。」

そこに絞ったものとバケツがおいてあるから、壁もしっかりね。」

「う、動いていいの?」

「実際はネコの手でも借りたい状況だから。」

例えミスってもせいぜい水をぶちまける位でしょ?」

風呂まで取り付けるには時間が足りないかもしれない。
急がなくてはならない。

動くなどと言ったが、作戦変更である。

埃まみれになりながら部屋の大掃除と言う重労働をする以上、なんとしてもお風呂でゆっくりしたい。せめてお湯で体を洗いたい。この家には明かりが無いみたいだし夜になったらアウトだ。明かりも買えないとは。

今の僕は手持ちが1090リーフしか無い為、明かりが手に入るかは微妙なところ。

いくらするんだろうか？

そしてどこで売ってるんだ？

雑貨屋？

明かりは確実に無理だろう。

釜がいくらするかとは分からないが100リーフとか一食分の食費で買える位のものではないはずだ。

少なくとも1000、いや、それ以上する可能性もある。

最悪、今日も川の水だ。

この世界には魔法があるからそれで、とも思うがこの世界の魔法はすべて攻撃魔法。

さらに言えば僕が覚えてるのは基本的に状態異常攻撃からそこそこの回復力、そこそこの攻撃力、そこそこの防御力と万能性のある（器用貧乏とも言う）光魔法と、火力不足の時に使う攻撃力特化の火魔法を少しくらい。

水魔法なんて覚えてない。

ちなみに水魔法の特徴は回復特化。

僕は一発もらうと死ぬか瀕死だったので呪文を叫んで回復魔法を使うよりも回復アイテムのほうが死にづらく、手取り早いのである。幸い、僕のスタイルは防具も武器も最小限と言うスタイルでお金はあまり気味だったしね。

「そ、そうやって決め付けでも物事を言わないほうがいいですよ！！
わ、私だって日々進化するし、学習だってするんですから！！」

「はいはい、頼んだよ。そしてサボっちゃダメだからね。」
「だから子供扱いしないでくださいですっ！！」

なんとか日が暮れる前に掃除を終えて、僕は風呂に入ることが出来た。

労働の後のお風呂は格別で、最高である。

ちなみに日本の風呂のように長方形の釜？が良かったのだが、鍛冶屋で頼むにしてもお金が5万リーフも必要だと言う。

材料費、手間賃を加えてこの値段。

他にそんなものを頼む人がいないというのも値段の高さの理由だ。
なんてこったい。この世界の人間は川の水で我慢できるってことだ！！

信じられん！

銭湯を経営するのもいいかなと思いつつ。

結局、あまっていたと言うドラム缶を500リーフで譲ってもらった。

もちろん長方形の風呂釜も頼んだ。作成に2週間はかかるらしい。
お金を稼いでおかなくては。

「それにしても、恐ろしいほどに綺麗な体だな。」

ちやばあと音を上げながら足を組みなおし、体を満遍なく揉み解す。
肌の白さや張りは死ぬ前とは別人のようだ。

別人だけど。

そして次の目的を考えてみる。

「・・・お店の復興かな。」

このまま土地代が払えない彼女を放っておくのは人情的に少しどう

なの？という思いがあるし、勢いとはいえ助けてしまった以上ここでホイと放るのは無責任だろう。

気まぐれとはいえ助けた以上、中途半端はいけない。というわけで彼女を助けるためにもまずは復興からである。まずは、というか売れるようにしさえすればそれで全てが解決するけどさ。

などなどと考えていても、結局お店の経営も少し面白そうだと思っているのが一番の理由だったりするけどね。

当然だろう？

義務感や正義感のみで女性と深く関わろうとする物好きは居まい。いや、普通の男ならそうかもしれないが僕としては遠慮被りたい。

閑話休題。

とにかくお店の復興には何が必要か？

貧乏になった原因も単純なものでは無いだろうし、昼間の野次馬の目の色も気になる。

服装もそうだが、どこか別の意味で気味悪そうなものを見る目で彼女を見ていた。

店主のイメージが悪いのはそれだけでマイナスだ。

リピーター（何度も通い詰める顧客のことを言う）獲得においてはこれほど不利なことは無い。

ああ見えて実は腹黒いとか？

それとも実は犯罪者とか夢遊病患者なのだろうか？

はたまた無類の男好きとか？

正直、女性に関しての見る目は全く持って自身が無い。

どれもありそうでどれもなさそうだ。

すなわち分からない。

「ま、これまた考えても詮無いことか。

色々試していくしかないかね。」

そろそろ上がろうと思っていると、脱衣所に影がある？
なぜ？

ちなみに外でドラム缶風呂というのも風情があつてよかったのだが、住宅地のだ真ん中のため、露出趣味の無い僕は当然、余っていた部屋をかるく改造して風呂場にした。

ガラッと開くドア。

そこにつつたつ、フィネア。

立派な双丘が目に入る。のは男として仕方ないだろう。
恐怖症と言えども触れ合えない、過度な信用が出来ないということ
を覗けば僕は普通の男なのだからして。
とはいえだ。

見た目12、13の娘ツ子に欲情できるほど性欲が強いわけでも欲
求不満でも無い僕としてはなんのことは無い。
ただ、冷静につっこむ。

「な、なんで入ってくるのかな？」

無理だった。

未だに女性の裸は見てるこっちが恥ずかしくなる。

・・・へたれとか言わないで。

「えへへ！」

今日は色々と助けてもらったので背中を流してあげようかと思いま
して！！」

「・・・羞恥心はないわけ？」

体を全く持って隠さずに、あまりにも普通に言うからこっちとして

も恥ずかしがってるのがアホらしくなってくる・
逆に冷静になれた。

「なんでですか？」

女の子同士で恥ずかしがること無いと思いますけど？

「あ、そういえば女性が苦手だったんですっけ？」

「それもあるが根本的に僕が男だと言うことが問題だろう？ 嫁入り前の娘にしては過激すぎない？」

と、言ふ。

途端に顔を真っ赤にしてキョドる。

そして紫色のオーラが立ち上り始めた。

こ、これはまさかっ!?

「わ、わわ、忘れてまひた。」

[illegible]

「はっ!？」

脳天に拳をくらい、軽く脳がシェイクされる僕。

あまりのことに動転したフィネアは覚醒スキルを発動して、僕を攻撃してきた。

痛すぎるっ!?

HPが残り4とか、シャレにならない！！！！

僕は頭からぴゅーぴゅーと血を噴出しながらすぐさまイベントリから回復スプレーEXを取り出した。

「……し、死ぬかと思った。」

覚醒スキルというのは感情の高ぶりに応じて発動するスキルで、感

情直結のスキルなためコントロールが難しい。

もっと分かり易く、みもフタもない言い方をすれば少年漫画で言うところの「仲間を殺された怒りで主人公が秘められた力を解放して敵を倒し、実は仲間も生きていた」的な厨2チックなどらぶれのシステムである。

意外とユーザーには好評で、この世界にも存在するみたい。

これら覚醒スキルは種族によって決まっており、効果も固定。

差はレベルや能力値によってその効果の増減がされるくらいのもの。そして彼女の種族、魔族の覚醒スキルは「魔の波動」。

発動中は紫色のオーラが回り、すべての攻撃に魔力をまとうという物で、それは発動した魔法にも及ぶ。

魔力で出来た魔法にさらに魔力を継ぎ足すため、相乗効果が発生。魔族がこのスキル発動中に魔法を使うとそれなりの範囲を焦土に変える事だってお茶の子さいさいという恐ろしい覚醒スキルである。覚醒スキル中のみ発動できる隠しスキルなんかもあるそうだ。

妖精族以外は知らないけどね。

なにはともあれフィネアのもとの攻撃力が少なくて助かった。地味に死ぬ一步手前だったかもしれない。

自分が悪いくせに僕を殺しかけてトンズラ。

理不尽過ぎないだろうか。見せてきたのはあちら側でしかも頼んだ覚えもあまり嬉しくも無い。

やはり女性は信用ならんな。酷い生き物である。

というより、お風呂イベントなんて求めてませんよ？

ちなみに僕の覚醒スキル、というか妖精族の覚醒スキルは「妖精王の加護」。

背面にリング状の物に棘が付いたような羽が出現する。

発動中は空を飛べるようになり、髪の毛と目、羽が淡く発光する。

それだけという見た目重視の覚醒スキルで、全種族中際弱とも言われているが立体的な行動が可能になるというのはスピードを重視する僕にとってはありがたいことだし、妖精族の隠しスキルは凄いだぞー！

とフォローをしておく。

隠しスキル名は「ふえありい・ぶれいかあ」。

覚醒スキル中はMPがある限り何度でも使えると言う大魔法隠しスキルである。

一発で3500という全魔法中最大の消費MP量を誇るが（他の隠しスキルを含めてもこれを除いた最大消費MP値は1000。その差、三倍以上である。）、それだけに威力は一押し。

攻撃型でない僕でも地殻ごと街一つ消し飛ばせる遠距離ビーム砲だ。というか攻撃力でも全魔法中最大だろう。

その圧倒的攻撃力は使いどころが難しい。

ゆえに滅多に使えなかったりする。

戦争イベント中は十中八九味方ごと吹き飛ばしちゃうし、敵を吹き飛ばすにしても飛ばしすぎるため、距離が開く。結果、耐え切られなかった場合は止めを刺す前に態勢を立て直されていたり、その規模の大きさから相手も自分も敵がどうなったのかが分かりにくく、仲間からは「ぶっちゃけ、邪魔」、「エフェクトの無駄遣い。敵が見えん」、「砂埃とかハゲシス。あるあー！ーねえわあ」、「汎用性の低さゆえのしよぼさに全種族が泣いた」、「まさに外見だけがとりえの種族」とか、まあ難しい。

け、結局雑魚じゃないっ！？

とか言うなよ！？

絶対に言うなよ！？

べ、別にいいんだよ！！

妖精族専用のコスチュームは可愛いし、羽が生えて光るんだよ!？
それだけで選んだ僕は悪くない!!
それでも僕は悪くないんだ!!

「さて、そろそろ上がるか。」

余談だが、お風呂自体は知られているらしいので割と簡単にフィニアに受け入れられたお風呂。

ただ、どれほどのものかは知らないらしく、大半の人が知識の片隅
あるだけなそうな。

映画での臨場感是人から聞いただけでは味わえない。
そういうことなのかね。

「明日のやること・・・まずはお金だな。」

フィニアに「ここをどうぞ」といわれて部屋を宛^{あて}がわれたのは良い
のだが、そこには何も無かった。

逆を言えばゴミしか無かったという事でもある。

お店がどうのこうのの前にまずは家具を買い揃えることから始める
しかあるまい。

幸い、死んでこちらの世界に来る前にどらぶれで模様替えをして間
もないこともあり、ベッドがイベントリに一つ入ってたので、床で
寝ることだけは避けれそうである。

あと入ってるのは椅子が一つくらい。他はすべて“ひきがえる”に
あげてしまったのだ。

箆^{へら}や机、ソファと冷蔵庫。

必要なのはこれくらいかな。

いや、固定ウィンドウと通信機も要るな。

そうそう、トイレットペーパーも切れてたな。

トイレットペーパーも無いのに、フィネアは・・・ど、どうしてるんだろうか？

は、葉っぱで拭いてるとかは無いよね？

さすがに無いと思いたい。

多分予想は違ってないんだろーなと見た目が可愛いために、そのギヤップにげんなりしつつ。

あ、フィネアに石鹸の使い方教えるのを忘れてた。

ま、いいか。

風呂場の方から「目があああああ、目がああああああつ!!」

というラピュータの有名なフレーズを子守唄代わりに。

僕はぐっすり眠れた。

6わ とても だらしない（後書き）

ふえありいぶれいかあの元ネタはスターライトブレイカー。
なのはさんの全力全開な必中長距離砲撃です。

7 わ きょうから がんばります（前書き）

感想でスキルやらなにやらが多くて分かりづらいとかかんとかというのを頂きました。

そしてキャラ紹介や設定などを書いてみたいなことも書いときます。

主人公のデザインやペレッタ90TWOもラフですけど乗せておきます。

ハンドガンの写真を見たほうがいいと思いますけどね。

ツベでは実銃をぶっぱなしてる動画なんかもあります。

凄いカッコいいですよ。

7 わ きょうから がんばります

「おっはようございまーすっ!!」

「ごはあっ!？」

朝っぱらから豪快なボディプレスで起こされる僕。
なぜ!？

「・・・何をするのかな？」

「何って・・・朝ごはんが出来たので起こしにきたんですよ？」

「そうではなく、おこし方があるでしょ？」

そしてとつと僕から離れて。

胃に来る前に。」

「えと・・・家族を起こすときはコレだったので・・・その、ごめんさい。」

「・・・はあ、まあいいよ。」

それよりもどうしてまたボロ布を纏ってるのさ。」

「わ、私に裸で過ごせと!？」

「ち、違うわっ!!」

そうじゃなくて、汚いだろ。」

「しょ、しょうがないじゃないですか!!」

お金が無いんですから!!」

それに汚くないです!!」

残り湯でしっかり洗いました!!」

「替えの服をおいとしたでしょうに。」

「あれは響君のじゃないですか。」

「いや、普通に考えて替えの服だと思わない？」

状況的にあんたの服でしょ。」

「響君が服を着るのを忘れたんだな、と思ったんです!」

「どうしてそういう発想に行くの!？」

「ていうか、忘れないだろ!?! 常識的に!?!」

「え？」

「忘れたんじゃないなら、響君は・・・は、裸で!?! 自分で望んで服を置いてったってことですよね!?!」

「今も裸なのですか!?!」

「なんでそうなるんだよ!?!」

「僕が裸とか無いでしょ!?!」

「僕が・・・ということは私が裸に!?!」

「だあっ!?!」

「もう、この子すっごくめんどくさいっ!?!」

「はあ。」

「なんだろうか、この子のボケっぷりは。」

「わざとではないかと思うほどだ。」

「・・・まあ僕がちゃんと言っておかなかったのが悪いかな。服はどうしたの?」

「椅子の上に置いてありますよ。」

「というか、今更な気もしますけどなんですか?」

「このベッドは!?!」

「僕が元々持ってたものだけども。」

「そういうことではなくて、こんな高級ベッドがあるなら言うてくださいよ!?!」

「・・・なぜ?」

「私だけボロボロの布団じゃ不公平じゃないですか。」

「僕にそれで寝ろ、と?」

「一緒に寝ればいいじゃないですか。」

「女性恐怖症の僕にそれを言うのか。」

「我慢・・・できませんか?」

「できないな。

うん。」

「・・・うう。」

「そんなことよりも、アンタの部屋は片付いたの？」

「は、はい大丈夫ですよ。」

あとは明日の燃えるゴミの日に全て出せばとりあえずの終結です。」

彼女の部屋だけは立ち入らなかった。いや、入れてもらえなかった。まあプライベートルームだしね。

そこまでは立ち入りまい。のわりにはやたらと必死に頑なに入らせないようにとしていたが。

どうでもいいかな。もともとこっちが勝手に助けて勝手に居候して
るようなものだし。

「そう。」

で、ご飯は何にしたの？

というかそんなお金あるわけ？」

「それはもちろん！！」

お金は無いですけど・・・その辺に生えてる雑草をー」

「・・・まあ、命を粗末にするわけには行かないからね。

食べるけどさ。」

草といえど命であり、食材。残すことはしまい。せめてまずくなく
ことを祈るとしよう。

☆ ☆ ☆

やはりまずは何をするにしても先立つ物が必要である。

というわけで僕はまたもや依頼屋に来ていた。
カウンター前に歩いていき、普通そうに見える男性職員に話しかけた。

「すみません。」

「・・・。」

「あの？」

「・・・。」

「すみません!!!」

「・・・。」

「寝てるんですか？」

「・・・。」

「ばーか。」

「・・・。」

「はげちゃびん!」

「・・・。」

返事が無い。屍のようだ。

じゃないっ!!

なんで無視するの!?

この職員さんは?

僕のことを嫌いとか!?

普通のまっとうな職員さんのように思えるのだが、実は変態思考の持ち主とかなんだろうか?

幼女以外と話さないとか。

逆に美少年以外は相手にしないとか。

さすがに無いと思いたい。

「ふむ。

こいつも変態か。

ここは変態の巣窟なのかな？」

「さ、さすがにそれは聞き逃さないよ!？」

「・・・やっぱり無視してたんじゃないか。」

「あ、その。ごめんね。

上司から君が来ても無視するようにと言われていて・・・その、首にはなりたくないのだからこれ以上は話せません。」

「・・・昨日のレトとか言う人？」

「・・・っ。」

ぴくりと動く職員さん。

なるほど。

昨日の意味深な笑みはこのためか。

なんてことをしてくれるのやら。

まあ良い。

本当なら別の街の依頼屋に行くくらいのことをして、彼女を避けていきたくらいなのだが転移ポイントもリセットされて、お金もリセットされてる僕にその余裕は無い。

ある程度お金を溜めたら拠点を移すべきだな、うん。

変態の居ない依頼屋がある街に。

「レトさーん。

レトさーん!」

奥のカウンターへ向けて呼びかける僕。

ところがレトさんはこちらを向き、ただ突っ立ってる。

何か言いたそうな目をしてる。

もちろん無視。

「レトさーん！！」

レトっ！！

・・・レトお姉ちゃん。」

最後は消え入るほどの声だったはずなんだが。

「はい、何かしら？響ちゃん。

“レトお姉ちゃん”が話を聞いてあげる。」

・・・僕の周りには面倒くさい女性が多いな。

「稼げる依頼を教えてください。

今日中に帰ってこられるもので。」

「となると討伐系か採集に限られるわね。

その中でも稼ぎが良いのはこれかしら？」

「“キメラアントの駆除”と・・・“クイーンアントの発見・調査”、
“マッドキラの討伐”か。」

ちなみにであるがキメラアントはアリの生態そのものだそうだ。

まず頂点にいるのがクイーンアント。アリで言うところの女王アリで、自分ひとりでは全く動けず、体の8割以上が産卵のための器官で出来ているらしい。

毎日食べては産む、食べては産むの繰り返しで生涯を閉じる。

その数は毎日、5万匹ほどのキメラアントと300匹ほどのキングアントを生み出す。

生み出された巣の中の幼虫や卵の世話をするための物を除き、巣の遠近をさまよい歩いて各地から餌を集めてくる。200匹のキングアントは戦闘要員として巣を守り、残る100匹は各地でキメラアントのボスとして小グループの長になる。

という特徴を持つ。

そして今は繁殖期にあたる春。

ますます盛んになっている頃合だ。

どうりで一箇所に留まってるにも関わらず、一日で200も狩れたわけである。

発見・調査ということはこの付近にクイーンアントの巣を見つけたということだろう。

女王を殺しても生き残ったキメラアント、もしくはキングアントが女王の役割を変える為、この世界ではゴキブリ以上にしぶとい生き物とされているそうである。

その分、他の肉食モンスターの良き餌になっているんだろうけどね。僕の技能的にはこれがいいかな。

ちなみにマッドキラーというのはでかいでかいカマキリのようなモンスターだ。

一見昆虫のようだが植物型モンスターに分類される。

植物型の特徴である高いHPと高い防御力、そして名の通り、凄まじいまでの攻撃性を持つモンスターで、獲物を自慢の鎌で斬り潰した後に食べるという食虫植物といえるモンスター。

光合成も可能らしいが、基本は動物を狩って育つという獰猛な植物である。

そこそこ素早い、攻撃力が高いといっても初心者の冒険者には辛いという程度。

なんとかなるレベルだろう。

しかし僕は防具を付けてないので致命傷になりかねない。

というわけで、これは却下。

キメラアントの討伐とクイーンアントの討伐。

この二つを受けることにする。

「確か二つでも受けることが出来ましたよね？」

「ええ、響ちゃんは“オタマジャクシ”でしょ？」

丁度二つまでね。」

ランクは8段階。

ランクが上がればその段階と同じ数だけの任務を同時に受けることが出来るようになる。

僕は2段階目なので二つまで。ということだろう。

ついでにランク、オタマジャクシ初期のことは、そのままオタマジャクシというらしい。

中期、後期はなんて呼ぶのだろうか？

少し楽しみだ。

そういえば文字も読めるようにならないといけなかったことをふと思ひ出す。

やる人が多いね。本当に。

「手続きは終わったわ。

気をつけてね。」

「分かってます。」

とりあえず、調査をしつつキメラアントを潰していくことにする。

☆ ☆ ☆

どらごにあ森林街道。

そこを南下していくと、切り立った崖が見える。

あそこにクイーンアントの巣があるという。

消音器付きのペレッタ90TWOで道中に出てくるキメラアントを

撃ち潰しつつ、死体をイベントリに回収。
進んでいく。

「ええと・・・巢の規模をできるだけ調べ、クイーンアンの大きさも確認しろ・・・か。それとマッピングも出来るところまで、ね。」

ウィンドウメニューを開き、“じゅたく”を選択。

現在受け持つる依頼の詳細が表示される。

それにしても、こういう潜入は今も昔もワクワクするものだ。
ばれるかばれないかのスリル。たまらない。

そして、報酬はその出来のよさによって変わるらしい。

巢の入り口らしき場所にたどり着くと、入り口周辺を見て回ってる
キメラアント発見。

気配遮断と気配隠蔽を使ってやり過ごす。

全員眠らせていくのもいいが、どこまでの知能を持つかは不明。

頭が悪くないことは承知しているので、下手に警戒されるのは面白くない。念には念を入れて、見つからないこと。

これを第一目標に潜入をしていく。

「おっと、ここは・・・卵の一時保管場所かな？」

卵がずらりとびっちり並んでいた。

なんかエイリアンの卵みたいで中身が少し透けてるのが尚のこと生々しく感じる。

少しげんなりしながらそれを見ると、後ろからカシンカシンと
キメラアント独特の足音が聞こえてきた。

新しい卵を持ってきたようだ。

奥の方の卵の影に隠れてやり過ごす。

目の前までくる敵の気配。

自分の呼吸音すら五月蠅く聞こえるほどの静寂な巢内。

ばれるかばれないかの瀬戸際。

この緊張感。実にエクスタシーである。

いや、そこまでではないけどね。

ちなみに臭いでばれることはない。

僕の体臭は昨日使った石鹸、ミントフローラルの香りがするから。

彼らも“こんな良い臭いのする生物が敵であるはずも餌であるはずも無い！”と思って、そのままなんら気にせずどこかへ行く事だろう。

・・・こほん。

スキル「無味無臭」も使っているので、臭いでも僕を見つけることは不可能である。

無味無臭は自分の体臭と自分の使用するアイテム、装備の臭いも消すという優れ物。

毒薬系のアイテムの場合は味も無くすので違和感無く相手を忙殺できるというある意味、怖いスキルでもある。

滅多に使わないけどね。

「いったかな？

・・・よし。」

卵の影からぬっと出て、赤外線ゴーグルを付け直し、再度探検である。

マッピングを繰り返しつつ、蛹室、貯蔵庫、ゴミ収集所などを書き加えていく。

そして驚くことに非常口のような場所もあった。
逃げ道を作っておくとは大した奴らである。

「なかなか見つからないなあ。」

クイーンアントがなかなか見つからないのが困った物。

入り組んでいたり、行き止まりだったりする部屋も結構あるし、巢ゆえに真っ暗なだけあって気が滅入ってきた。

「むっ。」

やたらとキメラアントの出入りが激しい部屋を見つけた。
入っていったキメラアントは出てくると真っ白っぽい何かを持っている。

卵だろう。

「見つけた。」

ついばやく。

真っ暗な洞窟に侵入してから3時間。

ようやくである。

中をこっそり除いて見ると、女王という名に恥じない威圧を放つクイーンアントが居た。

頭、胸はキメラアントと同じような大きさだが、目が退化し、お腹だけがアンバランスに張り裂けそうなほどに大きい。

ゾウの二倍はある。

軽く見積もっても8トンはありそう。

観察していると10分ごとに小休止を挟んで絶えず産卵をしているみたい。

小休止の時には中でのカメラアンの数は数匹のみとなるみたいなので、それらを麻醉弾で眠らせた後、すばやく探索。

音でばれない様に気をつけながら女王の部屋もマッピングしていく。
これですばやく巣の全貌が明らかになった。

この部屋から繋がる道は全て卵部屋1～9へ繋がっているようだ。
最後にライトを取り付けた対比双眼鏡を取り出して、それで女王を見る。

レンズに大きさの比が書き込んであり、遠距離でも正確にもの大きさを測れる双眼鏡だ。

女王が大きすぎて、小さなライト一つじゃ細かい部分が見えないがこれだけ調べれば十分だろう。

ライトに反応してこちらを見てきた気がするが、どうせ物を見るための複眼は無い。

問題は無い。

と思いきや。

女王は突然、大きな声で“泣き”出した。

「キィィィィアアアアアアアッ！！」

女性の悲痛な叫びのようにも聞こえるその高音の叫びは良く通り、洞窟内を反響し、増幅され、回りの仲間自身への異常を知らせる。
ただの光一つでアウトかつ！？

そういえば昆虫には二種類の目があったことを思い出した。

物の形を見極めたり、動くものを認識するための複眼。

そして光の強弱のみを認識する単眼。

複眼はその名の通り目が何個も集まった昆虫の体組織で、単眼もまたその名の通り、一つの目。そして小さく目立たない物が多い。

ぱつと頭を見てみるとアリのようなその顔の中央には小さな小さな黒い粒のようなものが三つほど並んでいた。図体がデカイくせにちよつとした光で大騒ぎとは、困ったやつである。

いや、この暗闇の中で一生を過ごすからこそ光の強弱を感じる事が万が一の時のための武器なのだろう。今のうちに。

カシカシカシッ!!

ここ目掛けてキメラアント達がやってくる。くそう。

早く逃げなくては。

幸い、やることは全て終えた。

あとは無事逃げ帰るのみ。

「つとわっ!？」

横合いからの爪による斬撃を間一髪でかわす。

どうやらステータスの高いキングアントからやってきたようだ。

僕は赤外線スコープがあるからともかく、相手もこの暗闇の中では昆虫で言う鼻と耳の役割を持つ触覚しか使えない。

すなわち。

少し残酷なようだが、ハンドガンで触覚を打ち抜けばそれだけで良いのだ。

あとは混乱して味方にも攻撃するはず。

ごめんね、と呟きつつ。

打ち抜いていく。

おろおろとしながら立ち止まるもの。

よたよたとこけるもの。

中には奇声を上げながらあたりをぶつかりまわってるものもいる。こうして見ると人間にしか見えないので、余計に良心が痛む。

しょうもない偽善とは分かっているものの、やっぱりこの手段は取り囲まれたときだけにしよう。

戦わざるを得ない場合は、できるだけ殺していく。

社会性を持つアリである以上、アリの社会——もとい、洞窟での生活が出来なくなった個体はただあぶれて衰弱して、何もできずに死んでいくのみ。

それは少々を越して残酷すぎるだろう。

さきほどまで触覚を打ち抜いた個体を出来るだけ撃ち殺しつつ、出口に向かう。

「ぶはあっ!!」

ようやく出られたあっ!!」

一度外に出ればもう安心。地図を見ながら逃げる必要も無いしね。

少し服が泥や砂で煤けた以外は特に問題は無い。

帰り道で軽く50ほどキメラアントを狩りながらのんびりと街へと帰る。

今回みたいなモンスターの生態に深く関わるようなクエストは今まで無かった。

どらぶれには無かったのである。

しかしこの世界にはこれを含めて色々あるようでこれから先が少し楽しみでないこともない。

割と楽しかったなと充足感を得た良いクエストだった。

数日後。

この「クイーンアートの発見・調査」が凄い反響があることに僕は予想の端もつかなかった。

8わ いがいな しりあす

「あの？」

「・・・。」

「やっぱり無理か。」

依頼屋に戻り次第、報告をしてお金を貰おうとしたのだが、一応、男性職員に話しかけてもリアクションが無い。全くもって迷惑な。

「・・・横暴な上司のもと頑張ってください。」

「・・・ありがとうございます。」

僕のねぎらいに対して、男性職員はそれこそ涙を流す勢いでお礼を言った。

そこまでなのか。

大人しくレトさんのいるカウンターに向かう。

「レトさん。」

「・・・。」

「なぜ無視をする。」

「・・・。」

「おい、レト。」

「・・・。」

「くそばばーがはあっ!？」

こ、拳が見えない、だどっ!？

ちよっとした冗談で殺しにくるとはっ!？

レトさんの拳が僕の鳩尾にめり込んだ。

というか、いくら防御力が少ないとは言え一撃で半分以上のHPが削られたんだがつ！？
どんだけえっ！？

「痛いよう・・・ごふっ。」

思わず情けない声を出してしまうほどに痛い。
とにかく回復スプレーEXを取り出して、自分に吹きかける。
使う機会が味方からの攻撃を受けたときのほうが多いというのはどういうことだろうか。

「・・・えと・・・レト・・・お姉ちゃん。」

「はい、なんですか？」

満面の笑みで今までのことを無かったことにできるオンナノヒトはやっぱり怖い。

「依頼の報告にきました。」

「早かったのね。」

偉いわぁ。」

「子ども扱いしないで下さい。」

「ごめんなさい。」

じゃあ、クエストカードとマップデータをお願い。

ついでにフレンド登録もしておきましょうか。

手を出して。」

「え“？”

「早く。」

「いや、あの。」

ここで、彼女の容姿を述べておくなら非常に艶やかな美人さんで

も言っておこう。

切れ長の目に金髪のポニーテール。

顔の輪郭は軽く丸みも帯びており、服によっては可愛い系と言っても良い。

胸は結構な大きさに腰がくびれて、お尻もほどほどに大きい。

すなわちとても“女らしい”のである。

そんな人と手を？

つなぐのか？

フレンド登録は念じながら握手で登録されることになる。

それはこの世界でも変わらないらしい。

冷や汗がだらだら流れる。

脂汗で手が湿る。

彼女ほどの女性と手をつなぐともなれば一気にストレスゲージが振り切る可能性も無きにしもあらずである。

が、あれだ。

この人の性格的にこのイベントを避けることはできまい。

それはこの二日で分かっている。

仮に今日をかわしてもこれから先、ことあるごとにフレンド登録を望んできそうである。

ならばとっとと済ませてしまおうのが吉。

今この時でさえ、彼女と握手をすることを考えるだけで胃がキリキリとして鳥肌が立っている。

これ以上、彼女を意識する前に済ませてしまわないと危険である。

「あら？

緊張してるの？

すぐ済むから大丈夫よ？」

「ええ、はやく済ませましょう。」

・・・吐血しかねん。」

主にストレスによる胃潰瘍で。

「はいどうぞ。」

「僕から・・・ですか。」

まあいいですけど。」

なにやら面白そうに笑って手を差し出すレトさん。

大丈夫。

逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ。
うしー！！

「そおいつー！！」

「えいつー！！」

「っなんでやねーがはあっ！？」

握手をした途端、抱きついてきたレトさん。

柔らかい。良い匂い。背丈の都合上、胸の感触が顔に。

一気にストレスゲージを振り切り、ツツコミもろくに出来ずに吐血する僕。

僕の吐血で汚れるレトさんだが、全く気にしないレトさん。

顔から胸にかけて血を垂らしつつ、僕に擦り寄る彼女。

客観的に見ればかなりシュールな光景である。

「ああ、この抱き心地。

やっぱり妖精族の子は良いッ！！

これだけ可愛い男の娘なら、なおさら・・・嗚呼、しああせ。」

良く分からんが、ぬいぐるみ感覚なのだろうか？

妖精族マニア？

確かに他に白髪で赤目の妖精族らしき人はあまりみない。（この世界の妖精族の特徴は髪と目の色らしい）

「もちもちで気持ちいい肌に、良い具合の体温。

腕ですっぽり囲める程度の手ごろな大きさ。

嗚呼、気持ちいい。イっちゃうかも。」

色々斬新な変態チックなことを喋っているが、とにかくいい加減離して欲しい。

そしてもちもちではなくヌルヌルだろう。

血で僕の顔も彼女の顔もヌツチャヌツチャである。

気持ち悪い。

周りの職員もその光景を見て、戦々恐々といった顔を見せて逃げていく。

助けて欲しかった。

こうなってはシャレにならないのでCQCでも何でも使って逃げ出したいのだが、がちりホールドされていて何も出来ない。

詰んだな。うん。

僕の意識は静かにブラックアウトした。

☆ ☆ ☆

「あう・・・ここは。

ひいっ!？」

目を開けるとレトさんの顔がまん前にあった。
ついビビって後ずさりした僕に罪はあるまい。

「あら？」

どうして逃げるの？」

「胸に手を当てて考えてください。」

「・・・うーん、分からないな。」

「・・・マジですか。」

というか、この人寝てる僕に何をしようとしたんだろうか？
あれ？

ふ、服が無いっ！？

「ちょ、ちよっとっ！？」

ふ、服を返してください！！！」

「私は知らないわよ。」

脱がして・・・その辺に捨てたっけ？」

「ツツコミませんよ？」

「ボケてないのよ？」

「ボケであって欲しかった。」

なぜ脱がしたのっ！？

シーツをかき寄せて体を隠す。

さっきから猛禽類が獲物を見るような目でこちらを見てくる。
お、おそろしいよお。

周りを見渡すと服が散らばっている。

僕のパンツまで無造作に放られていた。
というか、彼女も服が無い！？

ペレッタ90TWOを取り出して――いあ、むしろRPG―7を取り出して・・・

「落ち着きなさい。」

「あづっ!？」

「とりあえず今回は諦めるから、本題に入りましょうか。」

「・・・チョップは酷い。」

「そんな涙目で上目遣いだと――あは。だめだめ。

落ち着け。落ち着け、私。」

「ひいっ!？」

本当に諦めてくれたのだろうか？

なにせよ本題？

何のことだ？

「依頼の報奨金は私から貴方のイベントリに直接送っておくから安心してね？」

それとささやかなプレゼントも。これは個人的なもの。」

「いや、要らないんだけ――いや、ありがとうございます。」

要らないと言おうとしたらすっごい眼力で睨まれた。

黙っておこう。

「そ、それで本題ってのは何ですか？」

「声が震えて今にも泣きそうだけど・・・その、ごめんなさい。」

「い、いいから早く言ってください。」

もう早く帰って寝たい。

「ええとね。」

このマップデータなんだけど・・・」

「何かまずかったですか？」

全部問題ないと思うんだけどな？

ちなみにどらぶれのマップは“世界樹のラビリンス”という旧世代ゲーム機にあったソフトのデザインとシステムをそのまま使ってるらしい。

皆が使ってるのとはちょっと違うということか？

「いや、何も問題が無かったんだけど、この場合は問題が無さ過ぎたことが問題でね？」

「・・・はあ。」

良く分からん。

「嘘じゃないのよね？」

「つく意味がありません。」

「そう、よね。」

うん。話はそれだけよ。

じゃあ続きをしましょうか。」

「ひ、ひいやあああああああっ！！」

「じよ、冗談よ・・・ごめんなさい。」

もういやだあ、はやくおうちかえるうっ！！

そのままシーツを巻いたあられもない姿で彼女が部屋の鍵を開けるのも待たずに僕は窓を打ち破って逃げるのだった。

女性恐怖症が悪化したような気がしないでもない。

街の人に見られまくったのは言うまでもないことである。

「あの・・・斬新なファッション？ですね。」

「うるさい。黙れ、ほっといてくれ。」

帰ってくると僕の今の姿を見て苦笑いしながらそんなことを言うてくるフィネア。

ファッションなわけがないだろうに。

というか、誰も来ないと分かってるくせに店番なんてしても無意味だと思ふのだが。

「ああ・・・そういえばいろいろ買うの忘れてた。」

トイレットペーパーとか調味料とか晩御飯の食材とかも。

机も依頼の帰りに買ってくるつもりだったのに。

レトさんのせいで何もかも買えてない。

そうと決まれば、お金の確認も――あら？

100万リーフ？

こんなに持ってたっけ？

キメラアント分の報酬は50匹程度だから12万ちよつとがせいぜいだろうし、クイーンアントも出来高制とは言え、どんなに精査に調査しても50万程度だと思ふんだけどな？

個人的なプレゼントとやらだろうか？

いや。でも、あの人はお金をそのままなんていう捻りの無いことはしそうに無い。

そもそもイベントりのカテゴリ“こすちゅーむ”に見覚えの無いアイテムが一つ追加されてる。

恐らくはこれがプレゼントだろう。見ることにすらするつもりは無いが。

多い分のお金は単に、僕の予想以上のお金が入るだけってことなのだろう。多分。

まあ明日聞けば良いか。それに多いに越したことは無いし。

今はそれよりも買い物である。

とりあえず服を着替えて、もう一度出かけてくることにしよう。

「それと、なんで未だにボロ布なのさ。

アンタの服だつて言つたでしょ？」

「え、でも・・・その、私が着るのはもったいないなと思って・・・

」

「・・・はあ。いいから着る！

いいね。」

「は、はい。」

戸惑つてる感じだが、どことなく嬉しそうな顔を見ると、やはり女の子だと実感させてくれる。

「んしょ・・・んしょ・・・」

「こ、ここで脱ぐなバカっ！！」

「ひい、ひいあ・・・そ、そういえばそうでした！！響君は男の子でしたね！！」

あいも変わらずアホの娘である。

「何か失礼なこと考えてませんか？」

「考えてないよ。

それじゃ、行つてきます。」

「い、行つてらっしゃい。」

少し戸惑いながら、はにかんで“行つてらっしゃい”を言うその顔は可愛かった。と位は言つてあげても良い。

買い物にて。

まずいくのは食材屋。

果物や野菜、穀物、お肉類をイベントりに次々と入れていく。

今更だけどイベントリって凄く便利である。

時の経過も無いしね。

その後、雑貨屋へ向かい、ランプやトイレットペーパーなどの生活必需品を購入。

バスマ・ジックリンというお風呂用洗剤に石鹼の予備、洗濯用の洗剤も購入。

キッチン用品なども購入していく。

お風呂用というよりは雨水をためておく壺を洗うための物らしいけどね。

店主は渋いオジサマ。沢山購入したので2割ほどまけてもらった。正直助かった。

あとは家具屋で食卓である机、部屋に置く机やフィネアのベッド、ソファを買い、服屋では適当にフィネアの服を数着購入。

イベントリにも限界があるので、食材を入れておくための冷蔵庫も購入して今必要なのはこのくらいだろうか？

結果、残ったのは8万リーフほど。

新生活の始めなのでお金がかかることは覚悟していたが、ここまで簡単にお金が飛んでいくのは少し悲しい。

ある程度は貯蓄しておきたいというのに。

彼女の分もあるからだが・・・あれだろう。

自分だけ贅沢な生活をしてるのに同じ屋根で暮らしてる同居人だけに貧乏な生活をそのままに。

姿を見続けるといえるのは、少し居心地が悪い。

仕方ない出費といえる。

正直なことを言えば、大した手間じゃないというのが大きんだけど

ね。

「ただいまあ。」

「お、おけいりなさい。」

「おけいり？」

「か、噛んだだけです！」

その・・・久しぶりなので。」

久しぶり・・・ね。

深くはツツコまないでおこう。

「さっそくでなんだけど、部屋には入れないの？」

「な、なんでですかあっ!!！」

「その勢いが何でっ!？」

凄まじい過剰反応で言い返してくるフィネア。

なんで!？」

幾らなんでも過剰でしょ!？」

「いや、ベッドを買ってきたから・・・設置しようと思って。そこまでイヤなの？」

「・・・別にそういうわけでは・・・イヤと言うより、その。

でも・・・とにかく見られたくないんです。」

「ふうん。」

なんか妙だけど、まあいいや。今、出すからイベントリに収納できる?」

「ええ、大丈夫です。」

私のイベントリは常に空っぽですから。」

「そういう余計な貧乏アピールはいらん。」

冷蔵庫はリビングで、食べ物も入れて、と。

「あ、これもね。」

服もイベントリから取り出した。

「なんですか？

これ？」

「まあ、分かるとは思っとらんよ。

アンタの服ね。

適当に可愛い？のを数着選んできた。

3着が普段着で二着がパジャマ。とりあえずね。」

「・・・あ、えと。」

今までの貧乏生活が生活だけに目の前の光景が信じられないよう
だ。

ぶっちゃけ、キメラアント狩ってれば誰でも金持ちになれないか？
と思ったのだが、それは僕の実力の高さがあゆえに言えることか
もしれない。

もともとこの店にも執着があるみたいだし、冒険者にはなれない理
由もあるのだろう。

「・・・ど、どうしてここまでしてくれるんですか？」

「？」

てっきり遠慮の言葉を述べてくるのかな？と思っていたのだが、予
想に反してなにやら真面目な雰囲気聞いてきた。

というか今更な疑問。

なんでといわれても気まぐれとノリと・・・くらいか？

正直成り行きでしかないのだが。
むしろ聞かれても困る。

強いて言えば見てられなかったから？
大した手間が必要なかった。
この二つに尽きる。

「別に特にコレといった理由は無いかな。」

「・・・そうですか。」

とにかく、ここまでしてもらうわけにはいきません。
布団もありますし、ベッドもなんて私には贅沢すぎます。」

「それは必要ないってこと？」

余計なお節介だったのか。なら、正直すまんかった。」

お節介というのも自覚はしていた。

自分勝手な親切の押し売りだというのももちろんだ。
まあ要らないというのなら、いずれ必要になるときもある。
イベントリの肥やしとなってもらおう。

一応言っておくが、がっかりなんてしてないからな！
本当だぞ！！

「そ、そんな悲しい顔をしないでください・・・別に要らないとい
うわけじゃなくて、そこまでしてもらう理由が無いのにこれ以上の
恩は受けられないです。」

ただでさえ土地代も払ってもらっているのに。」
「そんなの気にしなくてもいいのに。」

いや、助けられる側としては気にするか。

「それに・・・いえ。なんでもありません。」

なんかすっごい暗い雰囲気になってきたんだけど？
もういやだなあ！！

もつと気軽に受け取ってもらえれば良いのに。

「土地代を払った後で今更遠慮されてもね。」

「そ、それは・・・この店を失いたくなかったから・・・体を差し出そうと思ってたんです。」

「・・・なんでそこまで？今はいない親のため？」

「・・・」

とにかく体を求めているなら体で返そうと思っていたのに、今の私には何も貴方に渡せる物が無い。

となれば、これ以上恩を受けても私には何も出来ません。」

「キヤラ変わってない？」

「茶化さないでくださいっ！！」

いつになく真面目な内容。

何時になくといってもたかだか二日の付き合いだけど。

あやふやにしようと思ったのに冗談が通じないとは。

「もらえるものは貰っておけばいいじゃないか・・・まったく。」

じゃあ、こうしよう。いつかお店が復興したらで良いや。その時にお金を返してもらえればいいよ。」

これならば問題ないと思う。

「ダメです。保障がありません。」

むしろ今の状況を考えれば返せないことの方がありえそうです。」

ご、ごもつとも。

いつものアホの娘じゃないよ？

どうしちゃったの、この子。

復興させるつもりでもそれが成功するとは限らないし、むしろ逆に一生分の恩を背負ってしまいそうだ。

面倒な娘だと思っていたが、こういう面でも面倒だとは。

というかこうまで受け取らないという断固とした態度を見ると、むしろ受け取らせたくないのが人情では無いだろうか？

僕は押ししてはいけないボタンがあれば押したくなるし、押すなどいわれたら遠慮なく押すタイプの人間である。

はいてはいけないと注意書きがあるタイツがあれば、とりあえずはいてみようと思うのは致し方ないことだろう？

「受け取ってくれないと捨てるだけなんけども。」

「・・・っ。」

反応した。

しめしめ。

「土地代に関しては勝手な親切の押し売りだから、こっちからすれば恩義に感じてこうして同居生活をしてくれてるだけでも設け物だと思ってるんだよ？

そもそも“あんたが勝手に助けたんでしょ？なんでそんなことをしなくちゃいけないの”くらいのことを言われるの覚悟で助けたんだし。」

これは本当。

女性恐怖症も手伝ってそうなる可能性もあるのでは？と少しは考えていた。

そうなっていたとしても勝手な人助けによる自己満足なので別に構

わないのだ。

僕からすれば彼女に関わったのは苛められてるみたいな構図で困っていたのを、なんかイラついたのでその状況を壊せばなんだった良かったのである。

正直なところね。

家に住まわせろうんぬんも、土地代を払ったのも全てはついで。

思いついたままに行った挙句にこうなった。

でなければ、多少お金がかさんでも気楽に過ごせる1人暮らしを前提に、一軒家を購入したはずだ。

根っこからして違うのである。

「ぶっちゃけて言うとな今の状況って全部、ついで。成り行きなんだよ。恩義に感じてもらっても構わないし、貰わなくても構わない。もらえるならそこにつけ込み、もらえないならもらえないで適当にやっつく。その程度なの。」

だから、気にする必要は無いよ。」

「・・・貴方が分からないです。」

「二日で人の成りを分かってたまるもんですかっての。それで、これだけ言っても分からないなら部屋に押し入っても無理やり置いて行くけどどうする？」

「・・・お、お礼は言いませんよ？」

貴方がそういったんですから、感謝もしません。

恩義にも思いません・・・何の得もないです。

それでもいいなら勝手にすればいいじゃないですか。」

「じゃあ勝手にさせてもらいましょう。」

はい、どうぞ。」

なんとか論破できて良かった。

少なくとも服は捨てるしかなかったし。

取り出した服を差し出した。

「あ、ありがとうございます。大切にしますね。」

そういう彼女の笑顔は野に咲く可憐なタンポポのようだったと言っておこう。

「お礼は言わないんじゃないの？」

「い、今のはちょっと間違えただけです！！
は、はかりましたねっ！？」

「なんでっ！？」

少しずつ彼女に対する違和感を大きくしながら、今日という日は終わった。

8わ いがいな しりあす（後書き）

とまどいの章はフィネアがテーマ。
ヒロインではないんですけどね。
早くヒロインを出したい。

9 わ しょうばい の きほん と ひみつ

あれから3日が経った。

ようやく落ち着けるようになってきたので、そろそろ本腰を入れて取り込もうと思う。

「お店を復興するぞ会議……どんどんばふばふう！」

「なんですか？」

いきなり？」

リビングにて会議を始める。

「なんですか、じゃない!!」

貴様はこのまま貧乏で良いのか？ そう思っているのか？

いや、思っていないっ！？ 反語表現。」

「そ、それはそうですね……は、反語表現？

わざわざ口で言う必要があります？」

「とりあえず僕はこのお店の復興を考えたいと思っています。」

「スルーですか。まあいいですけど。お店の経営は……響君の力を借りるほどでは……」

「あの有様で？」

「うぐ。……あれです。」

ちょっと表現を間違えました。

あれです、あれ。

響君の力を借りるのは申し訳ないといえますか？」

「ふん、プライドだけは一丁前だな。」

「ひ、酷いっ!？」

「というか、3日前も言っただろう？」

単なる気まぐれ。というか、僕がお店を経営してみたいからやって

るだけで、むしろこの店が底辺にあって赤字経営まっしぐら。昨今の高校生でももう少しまともな経営をするであろうぐらいのゴミ溜めのような悪店。それを良店までに復興する。その過程を考えるだけで燃えてこないか!?

いや、燃えまい。反語表現。」

「尚のこと酷い!?!?そして、そこも反語表現ですか!?!?」

「底辺から最高へ。やりがいのある遊びーーじゃなかった。仕事だろう?」

一度でいいからやってみたかったんだ。」

「凄まじく酷いっ!?!?」

「僕が適当にやって、万が一不利益を得てもそこは底辺。これ以上悪くなりようが無い。」

すなわち、気軽に自由に大胆にいけるということでもある!?!?」

「酷さの黄金箱や。」

「何言ってるの? キモいよ?」

「しくしく。」

なにやら泣き出したフィネア。

つまらんギャグを繰り出すからである。

あれか? グルメリポーターのキミマロだかヒコマロだかアヤノコウジだかの物マネ?

いや、この世界にはいないだろうから、天然なのか?

むしろ恐ろしいな。

「小粋なギャグはここまでにして。」

真面目に話すでしょう。」

「・・・小粋?

小粋なギャグってこういうのを言うんですね。初めて知りました。」
「・・・。」

軽いボケがそのまま受け取られてしまった。
どうでもいいか。

「まずお店を経営するうえで一番大切なことがある。
それは何でしょう？」

「・・・ええと？お色気担当の店員さんでしょうか？」

「ボケはいらん。」

「え？」

これってボケになるんですか？」

「・・・。」

ま、まあそれも計算の内。
わかるとは思っていない。

「まず大切なこと。

それは“需要”。

利益よりも知名度よりも安や高さ、品揃えなんかよりも一番に大切なことになる。」

「需要ですか？」

「そのとおり。」

需要という言葉の意味は分かるよね？」

「分かりません。」

「・・・うん、まあこれも予想通りだ。お店を経営する人間としては知っていて欲しかったけれども。」

需要。

それすなわち顧客が「なにになにが欲しいよう」という欲求のことを需要という。

「たとえばだ。」

石鹼を沢山持つてる人に石鹼を売ろうとして上手くいくと思う？」

「・・・ええと、そんなに必要ないんじゃない？」

「その通り。」

必要が無い。だから買わない。

だけど、石鹼の無い人にとっては何？」

「必要ない？」

「なんでやねん。」

必要でしょ？」

「え、でも、私は20年は使ってたかっーあうっ！」

「たわけ。カメムシな価値観を基準にするでない。」

「ま、またカメムシって言ったあっ！？」

結構傷つくんですよ！？」

つい手が出てしまうほどにアホの娘である。

「ちゃんと用意した石鹼で洗ってるよね？体。」

「もちろんです！！」

しつかり10倍に薄めて・・・」

「・・・アンタは面倒くさいな、本当に。」

「なんでですかあっ！？」

「普通の一般家庭の話をしてるの。」

貧乏アピールは要らない・・・というか普通に石鹼使っていいから。てか、使え。

でなきゃ、僕の手で無理やり洗うからな。」

「あ、アピールしてるわけでは・・・それに、え、えっちですっ！！
そういつて大義名分を得た後に、私の体をまさぐる気ですね！？」

「・・・そういう魔技があるんだよ魔技が。頼まれたって触るか、

阿呆！！

というか、触れんわ。」

「・・・ヘタレです。」

「やかましい。」

今更であるがこの世界では魔法のことを魔^{マジ}技というらしい。特に何も変わらないんだけど、魔法は昔の呼び方だとか。変な話である。

「ちなみにどんな魔技なんですか？」

「洗濯機代わりの魔技を使うんだよ。」

風呂釜にアンタと石鹸を突っ込んで使う。目が回るだろうが要我慢だ。」

魔技書が売っていて、それを読んで覚えた魔法である。いや、魔技である。

どらごにあには生活に関わる魔法もあるんだな、と実感した次第だ。どらぶれじゃ必要が無かったしね。

「人の洗い方じゃないですよね？」

「そうかも。」

「ま、前々から言おうと思ってたんですけど、響君はちゃんと私を女の子として見てくれますかっ!？」

「もちろん。」

でなければ触れるし。」

「・・・なんか納得がいきません。」

「話を戻すよ。ええと・・・どこまで話したっけか？」

・・・ええと、そうそう。

石鹸を持たない人間からとって見れば“石鹸が欲しい”という欲が産まれる。

この欲のことを需要。というわけ。

理解した？」

「はい・・・なんとか。」

「・・・ツツコミたいが、とりあえずスルーしておこうで、だ。」

その需要を――すなわちお客さんが何を欲しがっているのか？それを調べて、その調べた結果に従い供給側、すなわちお店が商品を入荷するわけだ。この需要を無視しちゃうとお店側で入荷した商品が売れないまま店の赤字となる。」

「え、あの、え、ええと？」

「・・・とりあえず話しちゃうぞ。」

ここは掘り出し物屋。

すなわちここに来る人が何を求めて来るのか？分かる？」

「・・・ええと・・・可愛い店員さん？」

「ふざけてんの？」

「ま、真面目に答えてますうつ!!！」

「尚悪いわ。」

正解は“思わぬレアなアイテム”。それを求めてるわけ。」

「・・・はあああ。なるほど。」

考えも付きませんでした。」

「・・・本当に28歳なんだよね？」

上にサバ読んでる？」

「そんなわけないでしょうっ!？」

本当に失礼です、失礼なことしか言ってますんよ!!！響君は!!！」

「それは言いすぎ。なによりアンタが悪い。」

とにかく、ここに来る人はレア物を求めてくるわけだ。

一点、二点しか無いもの。もしくは滅多に手に入らないもの。

それ以外のものを買うなら他のお店に行く。」

「そ、それで？」

「少しは自分で考えて欲しいけど・・・それで、そのレアモノ。それを獲得し、売ってくれる冒険者を探す。」

これが第一。いわば供給ラインの確保。

フィネアの両親はもともと冒険者だと言うから元々は、父親が現地調達。母親が店番でもしてたのかな？

そして第二に交渉術。珍しい物だから相手もちろん高値で売ろうとしてくる。

それをどれだけ安く手に入れられるか。

あまり安く買い叩いても他のお店に持っていかれてしまう。どこまで値下げられるかの見極めが重要になる。印象も悪くなるしね。資金も必要だ。

買い取る際は冒険者側がソレをレアだと自覚して売る場合、高値で買い取らないといけない。それを一括で払えなきゃダメ。冒険者に借金する店員なんて聞いたことがないでしょ？」

「ふええええ、難しそうです。」

「・・・それが出来ない時点で、もうこの店は終わったも同然だけど、その辺は追々考えるところとして。」

さらに第三に必要な物がある。

それが真贋しんがんと偽者を見極める能力。

何よりもこれが大事ともいえる。

冒険者側がこれはレアだ。と言って売ってきた物が本当にレアであるかは不明だ。

実際は偽者であるかもしれないし、こっちを担ぎ出してお金を巻き上げただけなのかもしれない。

それに・・・さっきの需要の話に戻るが、例えば世界に一つしか無いとしても“それ”に需要が無ければガラクタも同然だ。

“神様の杖”という明らかなレアアイテムがあったとしても、それが名前の通り神様にしか使えない。となると途端に価値は落ちる。すなわちここが掘り出し物屋としてやっていくには、色々足りない物がありすぎる。

それは分かるね？」

「・・・ふええええええ？」

頭から煙でも上げる勢いで難しい顔をするフィネア。
よくもまあこの店が残った物である。
奇跡に近いな。

「でも、ウチにも結構、れあ？
れあ物が沢山ありますよ？」

ウチの家宝だって言って売ってくる人が沢山いて・・・家宝ばかり
が並んでるはずですよ！！」

「・・・まさに担がれたんだな。」
「へ？」

「そうそう家宝を持つ家があつてたまるかつて話。いや、あるかも
しれないけどこんなお店かも分からない場所に売りにくるようなや
つはまず、いないと考えていい。」

レアっぽいただのガラクタを売ってあんたからお金を巻き上げた。
そんなところ？

そもそも冒険者になるような人間の家に家宝があるかつての。
気づいてよ。」

「・・・じゃあ？」

「もちろん、この3日間で確認はした。
全部ただのガラクタ。」

宝石っぽいのは粗悪なガラス玉だし。
装備品も質の低い鉄が殆ど。

中にはただの泥の塊や犬の糞らしきものなんかもあるよ。」

「で、でも、でもでもっ！！」

お客さんが言ってたんです！！

宝石っぽいのは恋人の形見だって！！

持っていると辛いから是非とも買い取ってもらいたいって！！恋人に
やるものをただのーー」

恋人の形見を売るやつがいるかつての。多分。

「大きな剣は家に代々続く“刀”とかいうすっごい斬れる剣だって。防具は妖精族の隠しスキルすら弾き返すってっ!!」

刀の形をした物すらなかった。

そして妖精族の隠しスキル「ふえありい・ぶれいかあ」はあんなチャチな鉄の塊、影すら残さない。

最強種族と言われている竜族。その中でもトップクラスの攻撃力・防御力を持つ、アームドドラゴンですら一撃で殺しきるのだから。

「泥の塊に見えるのは土石と呼ばれる魔力がふんだんに込められた土で、欠片一つで作物の実りが良くなるって言ってたし、犬の……う、うんちみたいのは古代に絶滅したモンスターの化石だって……だから、店のショーウィンドウに……大切にに入れて……ぐず……うぐ……あう……うう……」

もちろん魔力の欠片も無いし、犬の糞はこの角度から見てもカピカピのただの糞にしか見えない。

「……これから。これから頑張っていこう。ね？」

頑張ったよ、フィネアは頑張った。」

貴重な物だと信じてショーウィンドウにただの乾燥した動物の糞を飾って手入れしてる彼女の姿が思い浮かび、その不憫な姿に僕も泣きそうになったのは無理も無い。

居住スペースである二回こそ汚かったが、一回にある商品にあたる物は埃一つ被ってないところ見るとたとえ不器用でも、掃除が苦手でも商品の管理だけは頑張っていたんだな。という健気な部分もまた泣きそうな気持ちに拍車をかけた。

泣きじゃくるフィネアを抱きとめ、慰めつつ頭を撫でながら僕は考
えるのだった。

僕って女性恐怖症ジャン？と。

かといってこの空気で「女性恐怖症だったことをノリで忘れてたの
で、やっぱり離れてください」とは言えない。

それは格好悪すぎる。

鳥肌も胃の痛みも今だけは我慢するしかあるまい。

今度からはノリで行動はやめようと誓おう。

後々トイレに駆け込んだのはいうまでも無い。

その日、フィネアは部屋に籠って出てこなかった。

☆ ☆ ☆

「フィネア、起きてるか？」

次の日。

もう一度声をかけてみるがフィネアからの返事はない。

昨日から水も飲んでないはずだが、一体どうしたのか？

もしかしたら脱水症状で死んでいたり？

いやいや、怖い想像はやめよう。

大丈夫。

きっと大丈夫だ。

夜の間に水くらいは飲んでるはず。そう思いたい。

とりあえず僕は今日も依頼屋に行くだけ。

どんな商売をするにせよ資本金は必要だ。

そのための資金稼ぎに今日も出るのである。

「朝ごはんは置いてくからな。」

そのまま支度をして家を出る。

というか、なんで僕がここまで気に欠けなきゃいけないんだ。

会って数日のガキンチョに入れ込みすぎだろう。

僕も頭を冷やしたほうが良いかも知れない。

彼女の悲劇ぶりに当てられているのかも。人生というのは概ねそのようなことの繰り返しである。彼女が悪いとは言わないがこの程度でつぶれる様ならそもそも社会では生きられない。

つぶれたらつぶれたで、彼女を放ってここを出ればいい・・・のは無理だろうな。気が引けすぎる。全く、なんであんなのかかわってしまったのか。パラメータ的には運がカンストしてるというのにまるで効力を感じない。運と言っても色々な運があるしなあ。そういう運かね。悪運とかさ。

とにかく関わってしまった以上、力になってやりたいというのはお人よしか暇人か、はたまた偽善者か。

なんにせよ僕としては不本意ながら友人程度の関係ではあるつもりであり、助けてやろうと思ってしまうことは仕方がないことである。そうである。きつとそう。

と、回りくどい言い方で誤魔化してみたものの。

端的に言うなれば至極普通に不安。

一人っ子である僕にとっては初めて出来た妹みたいな気持ちもあるから？

とにかく真面目な話、本当に脱水症状で倒れてたりしてませんよね？ただそれが不安である。がゆえに家に戻る僕。

とにかく一声だけでも聞いてから行くべきだろう。今のままじゃ気にかかってかかってしょうがない。

この精神状態は命がけの仕事をする上では向かない。ナンセンスで悪手だ。

その精神状態を解決するために――すなわち、自分のために彼女を元氣付けようとしているのであって、彼女を心配してるとか、妹思いなお兄ちゃん的な気持ちを抱いているというわけでは決して無い。ということは言っておかねばなるまい。

彼女の部屋の前までくると、やはり朝食は置きっぱなし。

部屋をノックしても返事が無い。

本当に大丈夫なのか凄く不安になってきた。

というかね。

いつもなら僕よりも早く起きてお店前の掃除をしてるところなんですよ。

普通なら。

自分の部屋はすごく汚いくせして周りには氣遣えるとか良く分からない子である。

いや、その分真面目にお店をしようとしてるのだろう。

不器用なりに頑張った結果が「騙された」。そこにある。

もしかしたらもっと複雑な思いもあるかもしれない。所詮、浮気されるような価値なし男には複雑な女心は理解できないことかもしれないがどうにかしてやりたい。そこんところは本気の気持ちである。

「開けるよ？」

返事を待つ。

返事は来ない。

ドアノブに手をかけると、がちやりという音を発ててドアノブが回る。

いつもなら部屋を出るたびに鍵を閉めるくらいの彼女の部屋なのに。ますます嫌な想像が頭をよぎる。

「お邪魔します？」

マヌケな挨拶だけど、仕方ないじゃないかっ!!
だ、だってな!!

多少知ってるとはいえ、女の子の部屋だぞ!?
緊張するのは当たり前で、仕方がないことだ!!
大事なことから二回ね。

「こ、これは？」

部屋には“何も無かった。”

いや、正確には中央にただぽつんと二つの人形が置いてある。
そしてその隣でうつろな目をして何事かを呟くフィニア。
声が小さくて何を喋っているかわからない。

ベッドは結局使わなかったのだろうか?と少し思ったけどそれは置いといて、人形を見ると人形の口の周りにご飯粒や汁物の汁で汚れているように見える。

それどころか体全体にわたってある細かい傷や荒で、かなりの年季が入ったものだということを分からせる。

「フィニア？」

部屋に入った瞬間、ひんやりとした空気に包まれ2、3℃は下がったような錯覚を受ける。

良く耳を凝らして聞いてみると。

「私はダメ・・・私はダメ・・・私はダメ・・・」

「フィネア？」

「お母さんがいないとダメなの。」

お父さんがいないとダメなの。

ねえ、だからお父さんとお母さんも一緒に店番して。

お願い。」

1人芝居の練習をしていた。

なんだ。それだけのことか。

きっと演劇をしてご飯を食べていこうと路線変更をしたのだろう。
うん。

確かにそっちの方がまだ可能性がある。

よっ！未来の人気女優！！

———って無いわっ！！

僕は動転すると1人ノリツツコミで気を落ち着ける癖でもあるのだ
ろうか？と頭の片隅で考えつつ、フィネアに近寄る。

どうやらフィネアは人形を父親、母親だと思っているらしい。

「私ね。」

とっても助かってるの。

響君って言って、凄く優しい人。

一見、女の子みたいなんだけど男の子なんだって！
え？

聞いたって。うん。

そうだよね、話したよね！？

同じこと言ってごめんなさい。」

「おーい、フィネアさん？」

「ち、違うよっ！

やだなあ、お父さんツたら。

彼氏なんかじゃないよ。新しい家族？

あっちがどう思ってるかは分からないけど、私としては友達？
ううん。弟みたいな感じかな？」

「僕が弟っ!？」

逆だろっ!？それは聞き捨てならんぞっ!？」

まさかの新事実発覚である。

ちなみにであるが人形は呪いの人形とか、ファンタジーな世界にありがちな意志を持つ人形とか、ローゼンメイカとか言う良く分からない得体の知れないエネルギー体で動く薔薇人形ローゼンメイデンなどではない。某決戦兵器人形ロボットの内燃機関たるS2器官並みに良く分からない。

すなわち独り言である。

「フィネアッ!」

「でねーー」

「フィネアッ!!」

「は、はひいっ!？」

耳元で怒鳴ってやったぜ。

鼓膜が割れたら正直すまんかった。

「響君？」

どうしたの？」

「どうしたのじゃない。

夜はともかく、今日の朝ご飯までも。

ちゃんと食べないと倒れる。

最悪、水だけでも飲んで。」

「二食抜いたくらいじゃ死なないよ?」

「・・・また来た、貧乏アピール。正直、要りません。」

「だからアピールしてるわけじゃ・・・って・・・え？」
「ん？」

「こ、ここ・・・わ、私の部屋・・・」
「そうだね？」

何を今更。

「見られたくないものなんてなさそうだし、大丈夫でしょ？
なにを嫌がってたのやら。」

心配の結果なので許して欲しいけども。

まあ、人形相手に独り言はドン引きしたがその程度。

このポヤポヤ娘を前にすれば、それもまた一つの個性と言わしめる
ほどのポヤポヤ具合である。

・・・あら？

もしかしてこれが見られたくないことだったりしたのかな？

冷や汗がさーっと流れる。

案の定、人形を背で隠してフィネアは見るも可哀想なほどに狼狽し
て慌てふためく。

「こ、これはちがくて・・・」

「何が違うんだよ？」

「その、これはたまたま人形遊びをしてただけで・・・」

「そう？」

「別に人形をお父さんだとか、お母さんとして見てるわけじゃない
のっ！！」

見てる、と？

「だから・・・出ていかー！ーえぐ・・・うわあああああ
ああああああああんっ！！」

ええええええええええええっ！？

なんで泣いたあっ！？

ワケが分からないよっ！？

「ふえええええええんっ！！ででいっぢやいやだよおおおう
ううううううっ！！」

お願いだからきらいにならないでえっ！！

私を捨てないでっ！！

どこかへいっぢやいやだああっ！！」

「ええと、わかったっ！！」

分かったからっ！！

全部分かったからっ！！

とりあえず泣き止んでっ！？

お願いっ！！」

泣きじゃくりながら僕に抱きついてくる・・・いや、この力は抱き
つきとかじゃない。

サバオリを極めて来ながら僕に泣きつくフィネア。

おふうっ！

今、バキっていったぜ。

背骨がバキって。

バキバキって！！

とても大事なことから三回言いました。

「ごはっ！

・・・ストレスと背骨へのダブルブッキング。

効くねえ・・・がはあ。」

いつの間にか紫のオーラを纏い始めたフィネア。

また、魔の衝動ッスか。マジ勘弁してくださいッス。

死ぬッス死ぬッス。

まあ逆に言えば覚醒スキルが発動するほど必死だと言うことであり、僕を強く求めているということでもある。

色々とワケが分からないことばかりだが、それは・・・とりあえず、気絶した後で聞こう・・・じゃない・・・か。

ゴフウッ。

か、回復スプレーEXを・・・と、取り出さなくては・・・ガクリ。

これが勝手に女の子の部屋に入ってしまった罰なのかも知れない。

そんなことを思いながら僕は気絶した。

10わ フィネアの きもち

私の家は貧乏だ。

物心が付いたときにはすでに貧乏だった。

戦争？

なにそれ？

ある日、両親が戦争に行くと言った。

お父さんはちよこちよこ家に帰ってこないときがあったし、いつものお仕事だと思っていた。

でも今回だけは違った。お母さんも一緒に出て行ったのは初めてだった。

2人して私を心配そうに見て、何度も何度も約束した。

知らない人が来ても扉を開けない。

怖くなったらついこの前に買ったお人形のウララとクララと一緒にいるように。

トイレはちゃんとお尻を拭いて。

洗濯は洗濯機で。

干すときは二階のベランダで。

お店は掃除しなくてもいいから、自分の部屋だけはちゃんと毎日掃除をしてお片づけをすること。

ご飯はもともと作りおきしてるのがあるけど、もし足りなかったら、もしすぐに自分達が帰れなかったら外で食べてくるようにと。

いつも家族で行っていたレストランのおじさんのお店でご飯を貰いなさいと言われた。

お金は多めに残しておくけど、おやつは買ってはダメ。どうしても欲しいときだけ300リーフまで。

他にもいろいろな約束事をした。

そして両親が出て行って一年。

たまに手紙が来てはいたけれど、寂しかったけれど、一緒にいたかったけれど。

手紙を見るだけで頑張れた。

くじけそうになるたびにお父さんとお母さんが一緒に選んで買ってくれたお人形をーーウララとクララを抱きしめて。

手紙を何度も読み返して。

ただただひたすら耐えた。

おじさんが良くしてくれたし、この頃からブヒブヒという変な人が私に話しかけてくるようになった。

豚さん？と言ったら顔を真っ赤にして怒っていた。

なんだったんだろう？

父さんの友人と言うことだったが、うさんくさくて信用できなかった。

それからは見なくなり、いつの間にか記憶のかなたへ消えていく。

おじさんとも仲良くなっていき、さらに一年が過ぎた頃。

戦争の終結という話を聞いた。

詳しいことはよく分からない。

でも、おじさんはこれでお父さんとお母さんが帰ってくるという。

私は喜んだ。

大いに喜んだ。

久しぶりに会える。

お父さん、お母さんに会える。

今まで会えてなかった分、狂喜乱舞という言葉が相応しいほどに取

り乱して喜んだ。

さらに数日が経った。

お父さんとお母さんはまだか？

と聞いてもおじさんは呻くばかり。

何かを悩んでいるようである。

「これを言うべきかは迷った。が、どうせじきに分かることだ。言うておく。

フィネアちゃん。

お父さんとお母さん・・・アルゴとプレセアは――」

「あ、もうこんな時間。

おじさん、今日は私、帰るね。」

「・・・ああ。

分かった。

明日も来るんだろう。」

「うん。」

「・・・そうか。

じゃあな。気をつけて帰るんだぞ。」

「分かってるよ。

お父さんとお母さんの約束だもん。」

「ああ・・・約束・・・だ。」

おじさんの目は少し潤んでいた。

心なしか声も震えていた。

どうしてか分からなかった。あの時は。

家に帰ると黒塗りの馬車が家に止まっていた。

周りには大きな箱？と数人の黒服の人。

誰だろうか？

もしかして、お父さんとお母さんが？
私はスキップをしながら駆け寄った。

「ねえねえ、おじさんたち誰？」

「ん？」

あん？

どこのクソガキだ？

俺はおじさんって歳じゃ・・・っ!？」

黒服の中でも柄の悪そうなすきんへっど？のおじさんが私を見て驚いた顔をする。

「ピーター。もしかして・・・」

「ああ。この顔・・・」

・・・おい、クソガアーじゃなくて、お嬢ちゃんはこの家の子か？

フィネアちゃん、だよな？」

「うん、そうだよ？」

おじさんたちはだあれ？

どうして私の名前を知ってるの？」

「・・・そうか。」

ピーターと呼ばれた男の人は凄く泣きそうな顔で言った。

「アルゴさんとプレセアさんが・・・あ、えと。

お嬢ちゃんのお父さんとお母さんが戦死した。

戦死・・・ってもわからねえか。」

「ピーター・・・もう少し言い方が・・・」

「取り繕ったってしょうがねえだろ。」

こういうのはハッキリ言ったほうが良い。

嬢ちゃん。いや、言葉よりも見せたほうが早いな。」

「ピーターっ!!」

「黙れっ!!」

・・・こっちの方がいいに決まってる。

もう会えねえんだから・・・見納めるくらいのことはいらないと・・・後悔するかもしれない。

例え、物言わぬ骸でも・・・な。棺を開けてくれ。」

「・・・分かった。」

なにやら黒服のおじさん達が動き始めた。

そして箱を目の前に持ってくる。

「お父さんと・・・お母さんの・・・墓だよ。これは。」

誰かが言った。

墓？

お墓？

死んだ人が入るところ？

どうしてお父さんとお母さんが入ってるのだろう？

「どうだ。見えるか？」

「うん、大丈夫。」

ありがとう、おじさん。」

「だから俺はおじさんじゃねえ・・・まあいいか。」

中には青白い顔をしたお父さんとお母さんが眠っていた。
お昼ね？

「お父さん？

お母さん？」

おきて。」

頬を軽くはたく。

起きない。

そして、酷く冷たい。

「寒いのか？」

毛布もってこようか？」

返事は無い。

当然だ。死んでいるのだから。

「お父さん？」

寝坊はダメだってお母さんにいつも言われてるのに……しょうがないな。」

まずはお父さんから家へいれよう。

担いで持っていくことにする。

凄く重いけど大丈夫。

頑張って運んだら起きてからきつと誉めてくれる。

よく運んでくれたなあって。

運ぼうとして背負うとするがうまくいかない。

私は歳のわりには身長が低くて辛いけど、頑張る。

久しぶりのお父さんだもの。

大きくなって立派になったところを見てもらわないと。

もって行こうとするとだらりと垂れた腕と足が、だらりと落ち込んだ頭が。

いよいよ普通でないことを幼い私にも気づかせた。どうしたんだろう？

病気かな？

「お、お母さん！？

お父さんが、お父さんが大変なのっ！

おきて、ねえ、起きてよっ！！」

慌ててお母さんを起こそうとするがお母さんも同じ状態であることに気づく私。

反応は無い。

「お、おじさんっ！！

お父さんとお母さんがっ！！」

私は慌てて黒服の人たちに助けを求めた。

おじさんたちは泣きながら俯くだけ。

泣いてる場合じゃないのに。

「・・・フィネアちゃん。

お父さんとお母さんは・・・死んじゃったんだ。」

「何言ってるのっ！？

それよりも早く・・・お父さん達をっ！？」

「聞いてくれ。

嘘じゃない。信じられないかもしれない。でも事実だ。本当だ。現実だ。俺たちの小隊長で・・・そして俺たちにとっては何よりも恩義のある・・・大切な人たちだった。

プレセアさんとの恋が実ってようやく・・・幸せになれるって時に・・・アカシア帝国の野郎・・・許せねえ。」

「死ぬって・・・？」

「薄々は気づいてるだろう？

・・・もう会えない。喋れない。二度と目を覚ますことはないって

ことさ。」

「・・・うそ。」

「嘘じゃない。」

「嘘だもん!!」

嘘に決まってるっ!!

お父さんもお母さんも怪しい格好してる人は悪者だって言ってたっ!!

危ない人だって言ってたっ!!

お前達は悪者だっ!!

もういいっ!

お前達に助けてもらわなくてもいいっ!

あっちいけっ!

私が連れて行くからっ!!」

「おい・・・よせ。」

「うるさいっ!!」

私はお父さんとお母さんを抱きかかえる。

小さな私にとっては大変だ。

でも、早く病院に行かないとずっと大変なことになるかもしれない。

早く、早く。早く早く早くっ!!

「待っててね。今、連れて行くから。

死んでなんか無い。

死んでるわけが無い。」

そうだ、お父さんとお母さんが死んでるはずが無い。

「わだしが・・・助けるからね。」

今まで待っていた。

良い子にして。

洗濯も掃除も。

全てかんばって。

おやつも我慢して。

お父さんとお母さんと一緒に過ごすことを夢見て。

「いま・・・たすけるから・・・だから・・・しなないでよう・・・
お父さん・・・お母さん・・・
しんじゃ・・・だめだから・・・ぐず。」

ウララとクララに新しく作って上げた服もある。

お裁縫は苦手だったけどなんとか頑張って作った。

お母さんに見せびらかすんだ。

お母さんはいいなあと指をくわえて見るしかない。

ふふふ、二年前のアイスの恨みだから、見せてあげるだけなんだから。

謝ればお母さんの服も作ってあげるけどね。

「約束もったじゃん・・・お父さんとお母さんの約束・・・守ったのに・・・」

すぐ帰ってくるから。

もうすぐ帰ってくるから。

きつと帰るから。

そう聞いて。

手紙で約束して。

今まで破り続けて。でも、私はお父さんが言うところの“おとななれでい”だから、我慢して、頑張って約束を守ってたのに。

「なのに・・・いたっ。」

躓いてこける。

お父さんとお母さんが地面に投げ出される。
その体に力が入ることはない。

「どうして・・・しんじやってるの?」

もう会えない。

会えるために頑張ってきたのに。

会うために1人でも、寂しくても頑張ってきたのに。

お父さんとお母さんは死んでるという。

なんのために私は頑張ってきたのか。

このとき、私は壊れてしまったのだろう。

私は気づいたら腰のポーチに入れていたウララとクララを持って、
話しかけていた。

「お父さん、お母さん!
お帰り。」

周りの黒服たちは驚いていた。

当然だろう、いまだ泣きながら。

それでも人形をお父さんとお母さんと呼び。

なおかつ父親であった“肉の塊”を踏みつけながら――まるでそこには何も無いように、そして今までのことを無かったことのように振舞っているのだから。

☆ ☆ ☆

それ以来、私は変わった。

人形を父と母と呼んだために近所の人には気味悪がられ、近くにあった魔技学校では苛められる毎日。その親もまた私を好意的な視線で見えてはいなかった。

そのまま学校は中退。

いや、書類上は休学。ということになっているのだろうか？
分からない。

復学したとしても私がいたのは20年近く前。知っている人間はもう誰もいない。

家事は約束を守ってくれなかった父親と母親にあてつけるように、そっちが守らないなら私も守らない。と言うがごとくしなくなった。いや、何もしたくなかったというのが正しい。

その後、10年ほどが経って来ると精神の成熟とともに今の“異常”さにイヤでも気づくようになる。

その頃になるともはや人形を父と母と思い込み、そして“昔の”父と母を忘れ。

唯一いた数人の友達も皆々人形を両親とする私を気味悪がって影も残らなくなった。

そこで始めて“今”に目を向けることが出来るようになる。

昔の両親は顔も声も何もかも思い出せなくなった。

これでは最初からいないのと同じではないか。

そんなことを考え始めてからと言うもの。

ちよっとした思いを抱くようになる。

このお店を残すことで両親が生きていた証になるのではない始めた。

そして今は見るも無残になった店内をかつての賑わいある店として

再興すれば両親の顔も思い出せる。そんな気もした。

本当の両親に会うために。

本当の両親を思い出すために。

小さな頃の幸せだったときのこと。

それを掘り起こすために。

私の商売は始まった。

最初は掃除をすることにした。

幸い、お金は国からの保証金。

産みの親の功労によって残された一人娘の私には目もくらむほどの莫大な財産が手に入った。

それを元手に頑張ろうと思った。

しかし。現実はそう甘くなかった。

どこから聞きつけたのか。

それとも掃除をして店に見える体を作れたのが良かったのか。

沢山の冒険者が来るようになった。

なにか繁盛したような気がして。

お宝だと売ってくる物を片っ端から買い、それに言われたままの値段そのままに買い取った金額に少し利益を乗せて、もう一度売り出した。

ご機嫌な状態で一年が過ぎた。

買い取る物で溢れ、店は溢れていく。

売れるものは一つたりともない。

いや、最初の頃はちよこちよこ買ってくれる冒険者達がいた。

ところがお宝だと売り出す人が来てからとう物、そうした冒険者達の客足が次第に遠のいていった。

きつと物で沢山で見えにくいんじゃないか？と、素人ながらにこれ

はというものをショーウィンドウに飾ってみた。

これでそこからでも見えるはずで、買ってくれる人が出てきてくれるかもしれない。

そんなある日のこと。

いつものように売りに来た人がいて、買い取ろうとしたが、このままだと日々の生活費も危ないことに気づく。

そこで私は少しの値引きをした。といっても一割ほどだ。

そうすると男は怒り狂い、やれ恋人の結婚指輪だ、やれ持っている辛いだのと語りだす。

しかし私には生活費の分を含めてもこれしか出せないと言うとそれでもいいから売ってくれと言いつつ出す。

さすがに困る私。

でも、拳句には恋人がどうのと泣きながらに語る男の涙にほだされた私は買い取ってしまった。

その夜。

ご飯はどうしようかと迷ったときに“昔の”お母さんに食べられる草と言う物を教えてもらった。

それを食べよう。

そうしよう。

そう、思いついた。

その雑草を探すべく街の公園へ行くと、件の男がいてその隣には女。話してる内容はよく聞こえない。

「あそこ、バカな店員がやってるって言う金稼ぎの名所だろ!?

全く、いまや搾り取られまくって、はした金しか残っちゃいやしねえ。

話がちげえつつーの! どうせなら体も一緒に売りやがれて話だ! !
まあ、安モンのガラス玉にしちゃ良い値だったけどよ。」

「まあまあ、いいじゃないの。」

それより、このお金でどこかで遊びましょーよ!」

「・・・ふん、それもそうだな。」

「ん？」

大丈夫。大丈夫だよ。

お父さん。

私は何も聞いてない、見てない。

うん、そう。

あれは宝石。綺麗な宝石なの。」

ガラス玉？

なんだろうね。それは。

「さ、草を取りに行こうか。」

うん、そう。顔も思い出せない昔のお母さんが・・・勝手に死んで
言った人が言ってた草。

ここに生えてるのを見かけたことがあるんだ。」

草のせいか味は苦味しか感じなかった。

☆ ☆ ☆

そんな日々が過ぎ、とある日のこと。

店に1人の女の子と見まごうほどの可愛い女の子がやってきた。
と思ったら男の子だという。

白い髪と紅い目からすると妖精族だということが分かる外見だ。
この辺で見かけるのは珍しい。

何よりも久しぶりのお客さんだ。

一年ぶり・・・いや2年ぶり以上かもしれない。

ここは失敗できない。

カモにするみたいで申し訳ないけど、精一杯アピールして何か買ってもらって・・・それで久しぶりにお肉を買おう。

美味しいお肉、お肉、お肉！

その念が溢れたのか。

彼女、いや、彼は一歩後ずさる。

後々聞くと女性恐怖症だとか。

見た目といい、その病氣といい、変な子だと思った。

あまり買おうとはしてなかったので、前々から考えていた作戦を決行しようと思う。

昔のお母さんが言っていた下着を売る行為である。

すごく恥ずかしいけど、いまや土地代の借金でこの店がつぶれる寸前。

娼館へ行くことも考え始めた私にとってはそれで首が繋がるなら安い物だ。

だが、彼はお金を持って無いという。

嘘を言っているだけだろうか？

いっそのことブラジャーもあげること決めよう。

ブラジャーもパンツも一枚しかないのを大切に着ていたものなので無くなったら常に下着無しで動けなくちゃいけないが、それもまた仕方が無い。

死ぬほど恥ずかしいけど我慢する。

それでも要らないと言う。

男の子はそういうのが好きだと聞いていたのは嘘だったのだろうか？
それとも男色？

はたまたやはり女の子？

女性恐怖症と言うのは性欲をも押しのけるほどの病気なのか？

結局、彼女、じゃなかった。

彼が無一文らしいことを知ると私は大いに落胆し、娼館への道を覚悟しただけでその日は終わった。

次の日。

私が土地代で困っていたところを彼に助けてもらった。
さらに次の日。

彼は私に色々な物を買って与えてくれた。

彼が分からない。

私が欲しいわけでもお金が欲しいわけでも無い。
なぜ私を助けてくれるのか。

不思議でたまらなかった。

そして気づかされたくないことに気づかされる。

今までの私の頑張りが無駄だと言うこと。

今まではただ騙されていたただけだと言うこと。

薄々は気づいていた。

気づいてはいたけれど。

目を背けていた。

いつかの日と同じように。

“今の”お父さんとお母さんがいるときのよう。

一人ぼっちという現実から逃げたくて、現実をゆがめて、自分に都合の良い様に思い込んで。

私はこればかりだ。

自己嫌悪に陥り、お父さんとお母さんと話していると。

響君が私の部屋にいた。

いつから？

見られていた？

何を？

人形を？

気持ち悪い私を？

今の私を？

い・・・いやだ。

もうひとりぼっちはいやだ。

置いていかれるのはイヤだ。

目をそむけた“フリ”をするのもイヤだ。

なにもかもイヤだ。

今の場所を失うのもイヤだ。

彼に軽蔑した目で、他の人が私を見るような目で見られるのがイヤだ。

イヤだ。

イヤだイヤだ。

嫌だ嫌だ嫌だ。

私を置いて、またどこかへ言ってしまう。

そんなのもういやだ。

一緒にいて。

お願い。

一緒にいてくれなきゃいやだ。

もう1人はいやなの。

もう1人は耐えられない。

だから一緒に、一緒にいて。

置いていかないで。

あなたにまで捨てられたら、見捨てられたら、お父さんとお母さんがいなくなったように。

目の前から消えられたら私はっ!?

すがりつくように。

気づいたら私は、彼にみつともなく擦り寄って逃がさない様に、逃げられないように彼を抱きしめていた。

1人になるくらいなら殺していつて。

そう願いながら。

10わ フィネアの きもち (後書き)

書きながら目が潤みました。

歳でしょうか？

まだ20なんですわW W

次回でとまどいの章は終わりかな？と思います。

11わ だいだんえん

さて。

僕はと言うと。

目を覚ましたら隣には美少女の寝顔が。

胸が。

体が。

太ももが。

僕に絡み付いていた。

すぐく安心しきった状態で寝ているフィニアである。

一般男性から見れば、けしからん状況なんだろうが僕からすれば地獄に等しい。

胃が。

肌が。

全身が早く離れるべきだという警告を告げている。

離れたくても離れられない。

それはなぜかと言うとがちりホールド。プラス寝ながらにして魔の波動を発動していると言う離れ業を目の前のターゲットが行っているからだ。

覚醒スキルを寝ながら発動ってどんだけっ!?

力がプラスされた状態なので貧弱な僕にはどうあがいても逃げ出せない。

これはまずい。主に胃が。

そして今寝ているのは彼女の部屋。

すなわち何も無い部屋。

さらに言えば床しかない。

そんなところで寝てる。

つまり、体の節々が痛い。

よくもまあぐっすり寝れる物だ。と感心もそこそこに。

こちらスネーク！

ミッションを開始する。

内容は何が何でもここを抜け出すことである。

起きて早々、ストレスⅡ胃潰瘍Ⅱ吐血Ⅱ再度就寝Ⅱもとい気絶という結果は避けたい。

ぐっすり寝ている目の前の少女（顔が近い、吐息が当たる、良い匂いがおのこと辛い）を本来ならばゆっくり寝かせてやりたいのだが、（おそらく昨晚は寝てないだろうし）そんなことに構ってられる余裕は無い。

作戦その1

とりあえずもがく。

相手が起きればいいだけなのだ。

簡単な事。

やたらともがいてればいずれ気づくだろう。

ふふふ、僕にかかれはこの程度のミッション、楽勝だ。

大佐！見ていてくれ！！

「・・・むにゃむにゃ」

寝言でむにゃむにゃとか言い出すヤツを生で見ても、少し感激したがそんなことを思っている場合ではない。

まだか！？

まだ起きんのかっ！？

かれこれ10分は動き続けている。

というか、緊張も手伝って熱くなってきた。

汗で蒸れてきたぞい。

なんかエロちつくな雰囲気が出てきた気がする。
とにかく、なかなか起きないので作戦変更。

作戦その2

騒ぎ立てる。

ふふふふ、あははははっ!!

全く、僕としたことが。

もっと簡単に行けば良かったのである。
シンプル

騒げば五月蠅くて目を覚ますじゃないか。

気が動転してこんな簡単なことにも気づかなかった。

無駄な労力を使うだけ無駄だったね。

・・・正直・・・すまないと思っている! (ジャック・イナバウア
ーのモノマネ風に)

「ふーじこちゃんっ!

倒してしまっても構わんのだろう?

だあれがミジンコウルトラどちびかつ!!

俺がダンドムだっ!!

綾波を・・・返せっ!!

俺は・・・悪くないっ!! ヴァン先生が悪いんだっ! ヴァン先生が

言ったからっ!!

ぷーだよっ! ぷーっ!!

ここならば・・・地上を焼き払う憂いも無いっ!!

慢心せずして何が王かつ!!

俺のこの手が真っ赤に燃えるっ!!

合意と見てよろしいですねっ!? ろぼとゝるっ! ファイトッ!!

メイのバカッ! もう知らないっ!!

目ガアアアアアアアッ! 目があああああああっ!!

全力全開っ！すたぁーらいとー！」

「うるさいですっ！！」

「あうっ！？」

いろんなアニメやゲームの名（迷）台詞を思い出して叫んでみたのだが・・・

ぶん殴られた。

理不尽すぎるよ！？

ちなみに僕の声はタマラン・ユカリンさんに似ているので・・・それで各セリフを思い返してみたい。

作戦その3

もう殴られたくないので叫ぶのは止めて、最終手段である“くすぐり”を使おうと思う。

これはただでさえ苦手な女性に僕から触れなければならないという苦行ゆえに取りたくない方法だったが、こうなっては手段を選んではいられない。

気絶よりかはマシであろう。

「えいさあっ！！」

「・・・ふぐっ・・・あふっ・・・あは、あははあはははははっ！！！」

よしっ！！

効いているっ！？

効いているぞっ！？

いまだっ！！

「そりゃさっ!!」

僕はその場ですぐに転がり、そのままの勢いで体を起こして立ち上がった。

ターゲットははまだ睡眠中。

あれだけやつても起きないとは。

恐ろしいことである。

なんにせよ、僕が気絶して結構な時間が経っているらしく、すでに夕方である。

「今日は・・・もういいか。
晩御飯を作ろう。」

依頼屋での稼ぎをやめて、今日はこのまま晩御飯の支度をすることにした。

何より今の状態のまま彼女を放っておくことなどできはしない。

このまま放って置いたら自殺しそうな勢いだったし。

彼女に折られた背骨はどうしたって？

すでに良い具合に治っている。

気絶する前になんとか回復スプレーが間に合ってよかった。

そして、治った後でまたサバオリで折られなくて良かった。

本当に良かった。

二度も殺されかけるとは思いもよらなんだ。

ドジッ娘だからか？

ドジや天然を今ほど恐ろしいと思ったことは無いな。

この家の裏庭にある「朱薔薇」というバラ科のハーブを隠し味として刻んで入れる。

たしかどらぶれではかなり貴重な素材アイテムだったのだが・・・民家に生え、なおかつこれが彼女の今までの主食だといふのだから驚きだ。

一時的にHPを倍にするというボス戦前には重宝したやたら便利な薬の材料だったはずんだけど・・・それゆえに滅多に落ちていなかったし、これを落とすモンスターも100狩って一個落とすか落とさないかくらい。裏庭にそんなハーブが一人が毎日食べてもなくなっていくくらいの量がある。ナナフシモドキかってツツコミたい。(ナナフシモドキという昆虫の主食はバラ科の植物。ミニバラや桜などもバラ科。)

これだけでどらぶれでは億単位のお金が稼げたのに。

土の質も良いのかすっごい繁茂具合で今にも塀を乗り越えそうだ。僕が色々なご飯をつくるせいで朱薔薇を食べる機会が減り、その分どんどん成長してトリミング(植物が育ちすぎた際に葉や茎を切り取って大きさを調整すること)が必要なほど。

これ売れないかなーと思いつつ。

でもここまで栽培が簡単だと値崩れも相当な物だろうな。

ままならない物である。

晩御飯の支度を終えて、朱薔薇を使ったバラ茶を飲んでゆっくり魔技書を読んでいるとフィネアの部屋からすっごい音がする。

何事？

見にいこうと立ち上がったところで、フィネアが飛び込んできて僕に体当たり。というか抱きついてきた。

またかっ!?

オマエはまたなんかっ!?

僕の女性恐怖症のことは全部無視ですかっ!?

ぐおっ!?

またもや胃が・・・というかトイレ行きたくなってきたっ!!

「いっちゃやだあああああっ!!」

「またかっ!!」

どこにも行かないから安心しておくれやす!!」

れやす?

我ながら珍妙な言葉遣いをしてしまったぜ! 京都弁? まあいいや。
なぜなら焦ってるからね。

また紫色のオーラが立ち上ってる。
そう。

また、魔の波動ッスよ。また背骨を折られるわけっ!?
すっごい痛いんだよッ!? アレ!!

脊髓ってのは神経の集中する箇所だね?

それはもう想像を絶するイタさが・・・とにかく。

マジ勘弁してくださいっ!!

「とにかく僕はどこにも行くつもりはないし、一緒にいるから。」

「・・・ずっと?」

「・・・うっ。」

今の“うっ”は下から涙目で覗き込む彼女が可愛すぎたための“うっ”である。

「今はとりあえずね。」

「今はじゃイヤっ!!」

ずっと一緒に居てくれなきゃイヤっ!!

じゃなきゃ私死ぬもんっ!!」

「なんでそんな話にっ!?」

というかこんなになつてました?

好感度を上げるようなことは特にしてないし・・・いや、そういうのとはちよつと違うな。

何かに縫^{すが}る目？

恋では無い。

それは分かる。

「・・・もう限界なの。お願いします。」

「・・・何が限界なのかは・・・分からないが・・・はあ。」

まあ、自分よりも10は下に見える女の子（実際は違うが）を放つて置けるほど冷血でもなく、とくに大きなデメリットも無い。となればだ。

断る理由も無いし、内心では妹が出来たみたいで嬉しいと言う思いも少しながらある。

が、彼女の深刻具合から安易な答えはむしろ悪い気もしてくる。とりあえず気絶する前にも言ったように、事情を聞きたい。

「事情をは・・・」

「やっぱり・・・私じゃイヤ？」

私みたいな気持ち悪い子じゃいや？

起きたら居なくなってたのも人形が親の私が気持ち悪かったかー！

「違うってば！」

ああもう、まだるっこしい。

「分かったよ。」

一緒に居てあげる。

家族になってあげる。

コレで良い？」

ノリで行動しないと言う誓いを立てたにも関わらず、またもやこんなことをしてる。

僕も意外とバカで彼女のことを言えないのかもしれない。

あれだ。

いっそのことここを本格的な拠点にしてしまえば良い。

どっか行くときは一緒に居たいって言うなら、つれていけばいいだけだし。

おし。

問題なし。

何よりもここまで不安そうな顔をされると、ね？

「ほ、ほんとに？

捨てない？

どこにもいかない？」

「捨てないよ。

どっか行くときはちゃんと言うし、ついてきたければ付いてくればいい。」

「きらいじゃない？」

「きらいならそもそも関わらないでしょ。」

「人形と話すよ？」

「今更過ぎる。」

「ほんとうにいいの？」

「アンタから言ってきたんだろうに。」

「・・・嬉しい。」

「・・・まあ僕も嬉しくないことも無い。」

なんだかんだで僕も寂しがりやさんであることは自覚している。

世の中に出れば浮気なんて珍しくは無い。悲しいことであるが。男も女もまちまちに浮気をする。

それでも大抵の人はそれで負った心の傷を癒し、ないしは傷つきながらでも人と寄り添うことを選ぶ。

僕もそんな人間と一緒にということだ。

女性恐怖症といいながらもどっぷりと“ここ”に漬かって、なおかつよりによって女性と家族となろうとしている。

人よりも大きな恐怖症という傷を負っても、やはり人が、自分を包み込んでくれるような“女と言う生物”が恋しいと言うことなのか。もしれない。

まあ、目の前の少女は妹、ないしは娘感覚だが。

結局のところオスにとってメスは欠かせない。ということなのだろう。

これまた、かもしれないという程度にしか思えないことであるが。

目の前の彼女は僕とは違うだろうが、何にせよ似てるような気はする。

似たもの同士傷を舐めあうのもまた一興。

それで後悔するもまた一興。

そう思った僕を誰が責められようか。

「よろしくお願いします。響！」

「こちらこそお願いします。」

にっこりと笑う彼女の笑顔をみたら、誰も責められまい。

「私も今日から尚一層頑張っていこうと思います!!
姉として!!」

「だから、アンタは姉に向いてないっ!!
妹だろうっ!!?」

「し、失敬な、です!!」

私のほうが年長者なんですから当然でしょう!」?

「ちんちくりんがホザきよるっ!!」

「ひ、酷いですっ!」?

し、身長はアレですけど!

胸やお尻は滅多なことでは負けてない自身があります!!」

「・・・むしろシュールじゃない?

アンバランスで。」

「んなっ!」?言うに事欠いてシュールとは!!

・・・そ、そこが良いって言う殿方もいるんです!!

お母さんも言っていました!!

“ロリ巨乳はステータスだっ!”と!!」

「まともや出たっ!!」

異常なお母さん!!」

「人の親を捕まえて異常は失礼すぎますよっ!」?

ねっ!お母さん!!」

「その人形持ってきたのっ!」?

そして、そっちのお母さんですかっ!」?

ということはパンツのくだりなんかも、まんまアンタの妄想だったのかっ!」?

「ち、違いますうっ!!」

お母さんは生きてますっ!!」

「死んでるかどうかは言ってなかったのに・・・生きてます、と?ほほう?それすなわち内心ではアンタも人形だと認めていると?というか顔を真っ赤にして言われてもねえ・・・」

「ぐっ・・・人の揚げ足ばかりとってたらろくな大人になれませんよっ!!」

「すでに大人だが。」

「・・・なるほど。確かにろくな大人じゃないですね。響は。」

「ゆ、誘導尋問っ!？」

まさかの高等テクニックだとっ!？」

「ゆうどうじんもん？」

なんですかっ!？」

それはっ!もっと具体的に教えてくださいっ!!

知らない言葉ですけど、この場に置いては誉められてる気がします
!!」

「・・・天然怖い。」

こうして僕達は家族になったのだった。

11わ だいだんえん（後書き）

ぷーだよ！ぷー！！はマイナーかな？

アルトネリコ2、アルトネリコ3に登場するココナのセリフです。

12わ がっこう・ふらぐ

あれからさらに一週間。資本金として2000万リーフを荒稼ぎした。

結構、頑張った。

カマキリみたいな姿をしたマッドキラーやファイヤーモールの討伐。インペリアル・マッドキラーに出くわして逃げ出すと言うハプニングもあったし、回復スプレーEXの原料になるラフレッシュアンという植物の蜜の採取など。色々頑張った。

よって、めでたくレベルが5になりました！

・・・相変わらずレベルがすぐ上がりづらい。この一週間でレベルが上のヤツのみを相手にしつつなおかつ500匹近くのモンスターを狩ったのにレベルが3しか上がらないと言うのはどういうことだろうか？

成長率が良くても効率が悪すぎると思わないでもない。

（この世界では成長率はいわば潜在能力、ないしは才能みたいな意味合いを持つらしく産まれ付き決まっている数値らしい。）

そんなこんなで資本金を稼いだ僕達はお店の復興に何が大切か？と考え、とりあえずは依頼中に手に入れたレアアイテムを店に収めることにした。

そして思わぬ物が思わぬ値段で売られていると言う意味での掘り出し物屋ということで、無駄に裏庭に生えてる朱薔薇しゅばらも売りつけることに。

安いと思っていたのだが、この世界でも高値で売れることには違いないらしく、むしろ“我が家”の裏庭の環境自体が異状だったらしい。

レトお姉ちゃんによると魔力が溢れてる場所なら大抵の場所に自生

しているらしいが（とはいえどこも奥深い森やモンスターの居る場所がほばらしい）、この家の周りの魔力濃度は異状とのこと。

どうやらフィネアの体から自然と流れ出る魔力が良い影響を与えてるみたいで嬉しい誤算である。

本来、どの種族にせよ意識的にでもしなければ魔力が体外に流れ出るということは無いらしい。しかも意識的に継続して魔力を垂れ流すと言うのは、どんなに熟練した魔技使いであっても難しく数分が限界。そう考えると色んな意味でとことんポヤってる娘である。

とにかくそうした品揃えからはじめ、次に僕がするのは店舗の大掃除。

すなわち、見た目を良くすることだった。

最初こそ掘り出し物屋をやめようと思ったのだが、あの後に家族になるならば。と、彼女の身の上話を聞いたあとではそれは気が引ける。

もちろん生活と情で言えば生活が大切だ。

厳しいようだが、情で人は生きていけない。

ゆえにそれだけならばたとえ嫌われようともそこを指摘するつもりだった。

しかし、それはフィネアも分かっているそうで、今度は僕と出来るだけ頑張ってみよう。とのこと。

今までは現実逃避ばかりして、お客から言われたままに買い取ったのもただ人と触れ合うことが嬉しかったから。

散財していることはどこかで分かっていたらしい。

それをきっちり自覚して今度は頑張るから、一生懸命それで頑張つて無理な場合はあきらめる。とのこと。

そこまで言われたら家族となった今。

断れるほどの強い理由はない。

もちろん“なんで僕まで手伝わなくてはいけないのか？”などと野

暮ったいことは言わない。

家族なんだから。

とはいえまた無駄に高値で買ってしまったと思うのは僕が女性恐怖症ゆえの不信感からか。

女性と言うだけでその人と成りを決め付け、信用できない自分の根性に少し不快感を感じつつ。

今すぐにはどうしようも無いと斬り捨て、考えるのは後にする。

ちなみに彼女には原因も伝えてた。

相手の心の傷を聞いたのに、僕が話さないのはずるい気がした。というささやかな男の子の意地つてもので。結果、いきなり抱きしめられ“私は裏切らないから・・・”と泣きながらに言われてもその言葉を心底信用できた。と言い切れない自分の心が少し憎いと感じたのは言うまでも無い。

そう、忘れてはいけない。

『僕の価値はとても低い。』

これを忘れてはいけないと自分の胸に再度刻み込む僕である。

閑話休題。

とにかく見た目からよくするために多少の内装の変更と高値で売りつけられたガラクタの大掃除をすることになった。

そして店員用のコスチューム。

このお店の店員さん限定のコスを着けたらどうか？となる。

そこでいつぞやのレトお姉ちゃんからのプレゼントが役に立った。

その服は二着あり、どちらも改造メイド服だったのである。

これを僕に着てほしかったのかな？と内心冷や汗ダラダラでこのコスチュームを使うことに。

結果、現在の店頭には朱薔薇の葉と茎が3つづつ1セットが20に、僕が今までの依頼を受けたときに手に入れた上質な素材アイテムが数十個、モンスターの素材を加工して部品化したものが数十。僕のイベントリに入っていた武器コレクションの中でも優先度の低い近接銃器など。柄の悪い人たち（もとい可愛いお嬢ちゃんいいことしようぜグヘヘ野郎ども）から正当防衛ということでボコった後に、戦利品として奪い取った装備の中でも良い物。そしてガラクタの中にほんの2、3個混じってた“本物”。

これが現在の商品となる。

モンスターの素材を加工した部品は他の素材屋で買うよりも少し安めでおかつ高品質。自分の装備の強化や鍛冶師の人がターゲットである。

僕のス킬に「魔物加工」があつて、モンスターの素材を加工して高値で売りさばけるようになるス킬だ。マスターしてあるのでたとえばカメラアートを加工すると「上質なカメラアートの爪」というのが出来上がる。とはいえカメラアートの爪なんてものは需要が無いので置いていない。

もちろん理想はフィニアが自分で交渉して冒険者から宝を買い取り、その宝をまた他の冒険者に売る。という循環を“1人で”出来ることであるが、甚だ無理と言うところだろう。

少なくとも今のところは。

そして小売店に物を卸す^{おろ}卸売業者との交渉技術、コネクションも欲しい。

なにも掘り出し物は冒険者から買い取ったりする必要は無い。

各国を渡り歩く業者（商人）と提携し、その人が手に入れた商品を売る。これにも数個の形があるがともかく、安定した供給を受けられると言う点では凄まじいメリットである。

が、それと同時にぼったくられる可能性も下手をすれば冒険者からお宝を買う以上になる。

あちらは交渉が本業のような人たちだ。

その人たちを相手にすれば今までの比に無い借金を負う可能性もそれなりにある。

一介の冒険者ごときに騙されるようなフィニア、そして所詮素人に過ぎない僕でも“本物”を相手にするのは無謀を通り越して蛮勇だ。ただの阿呆に過ぎない。

そう考えると将来的にはありでも長くて数十年、短くても5年くらいは商人から商品を卸してもらうというのは控えるべき。

商品は自力確保か冒険者からなんとか安値で買い叩くのが一番で保守的。

無難と言ったところである。

なんにせよ。

内装を整え、商品も整え、ひとまずの開店準備が出来た今。やることはひとつ！

「学校に行く。だな。」

明日が楽しみである。

☆ ☆ ☆

「学校に行くんですか？」

「そう。この掘り出し物屋“おたからや”はそれなりに準備が上手く言ってる。

あと少し品揃えが欲しいところだが、そこは言っても仕方が無い。」

「ふむふむ。」

「店先もキッチリ掃除して、なおかつ扉もちゃんと店だと分かるよ

うに装飾した。

ここまでは十分。」

「なるほど！」

「適当に受け答えしてない？」

・・・まあいいけどね。そこでだ。

いよいよお客さんを呼びこむ必要が出てくるわけであるが、周りの人たちに対する印象が悪い。

これはフィネアの新お母さん、もとい人形に話しかけるって言うのが近所の人に見られたりした結果・・・で間違いないんだよね？」

「・・・はい。ごめんなさい。」

「問題ないよ。そのために学校に行くんだから。」

というか、そもそもこの辺の近所の人掘り出し物屋を除く事は無いでしょう？普通に暮らしてる人が必要なものが売ってるわけでもないし。

せいぜい風評被害くらい？」

「？」

「とにかく気にしないでいいんだよ。」

新しい顧客を獲得するために学校で我が店を宣伝する！！

これが一番の目的だから。」

「宣伝ですかっ！？勉強するところなのに・・・」

「何言ってるの？」

フィネアには勉強してもらおうよ？」

「え？」

「他人事みたいに言ってるけど、フィネアには学校でスキル「鑑定眼」を身に付けてもらう。」

ぼったくられないようにね。

そのためにも2人で学校に行くのさ。

この掘り出し物屋は基本、冒険者用。

学校の冒険者用クラスに編入してそれとなく宣伝、紹介してウチを知ってもらう。」

才能豊かな子には今のうちにつばを付けて恩を売り、いらぬアイテムを売ってもらえるように供給ラインとして確保しておきたい。この辺は僕がやるからフィネアは鑑定眼。他にも店の経営に役に立ちそうなものを覚えてもらいたい。

あとは・・・護身術あたりも出来れば覚えて欲しいね。

貴重な物を置くことはその分、盗人に入られる可能性も上がるから。」

「・・・え？

いや、その・・・戦闘とか一度も経験が無いんですけれど・・・？」

「だから学びに行くんでしょ？」

「ほ、本当に私もいくんですかっ!？」

「おふこーす!！」

レトお姉ちゃんによると入学金とある程度の身分証明が出来れば誰でも入れるとのこと。

フィネアは元々入学していて、親が死んでお店を継ぎ休学して20年近く。

この世界の学校は卒業できるまで入籍しつづけたままなので問題ないだろう。

フィネアによると退学手続きはしてないらしいし。

そして僕は僕で冒険者としての身分があるので入学金があれば問題ないはず。

と、いうわけで。

「どらごにあ王国、どらごにあ王都の学校につきました!！」

「ぱっと移動できるもんだね。」

「響は何を言ってるんです？」

10分くらい歩いたので・・・ぱっと言うほどじゃないと思いますけど。」

「・・・まあ気にスナナ。」

「？」

と、とにかく！！

目の前の学校、どらごにつく学校（語呂悪い）の敷居をまたぎ、門番らしい人に話をする。

「あの、すいません。」

「あ、はい。」

「なんですか？」

「ここに入学したい物なんですけど・・・」

「そうですか。」

では身分証明書か、もしくは紹介状のようなものは無いでしょうか？

「はい、これがクエストカードとレトおねー！ー依頼屋の職員さんからの紹介状です。」

僕にはレトお姉ちゃんから紹介状がある。これでほぼ確実に入学できるだろうとのこと。事情を説明して宣伝にはどこが良いかと言う事で学校が良いと聞いたのもレトお姉ちゃんからである。

その代価としてお姉ちゃんと呼ぶことになったわけだが、実際結構助かったのでそれくらいなら・・・と渋々納得した。という余談がある。

フィネアは住民票を出した。

「・・・はい。確認が終わりました。」

通って大丈夫ですよ。

学園長に連絡したので、そちらに向かってください。
矢印を辿っていけばいいので。」

「矢印・・・ひいあっ!？」

空中に矢印が出てきた。

びっくりさせて・・・なんぞこれ？

これは・・・魔技？

これも魔技なのかな？

これを辿れってことか？

「あ、ありがとうございます。」

初めて見る物にちょっと戸惑いを覚えながら、矢印を辿っていく。
背後で笑いを堪えてるフィネアがむかつく。

「何か言いたいことでもあんの？」

「ぷぷっ・・・いえ、何も・・・ぷく・・・くく・・・ひいあっ！

？だって・・・ひいあ！・・・可愛らしくて良いと思いますよ？

男の子としてはどうかと思いますけど。」

「う、うるさいなっ！！

別にちよっと奇声をあげたくらいで笑うこたあないでしょっ！？

性格悪いぞ！！」

「いえ、やっぱり私が姉に相應しいということがこれでわかりました。」

「・・・それだけでなんでそうなるの？」

「何事にも動じない強靱な精神。」

年長たる存在に相應しいと思います！！」

「・・・と、いいつも足が微妙に震えて見えるのは気のせいかな？」

「んなっ！？」

こ、これは別に声をあげる余裕も無いほどびっくりしたというわけではないですよっ！？」

「すがすがしいほどの分かり易さだな。」

むしろわざとやってんのかと疑うくらいだわ。」

と、話している間に学園長室らしき場所に付く。
矢印が扉の前でマルの形に変化した。
分かり易い案内魔技である。

「えーっと。

ノックして・・・失礼します。」

「し、失礼します！！」

こっちの礼儀は分からないが、とりあえずノックは三回でいいだろう。

「待っていましたよ。

私はどらごにあ学校、学園長セルヴァンと申します。」

学園長室に入るとセルヴァンと名乗る、肩くらいまでの青い髪をした男性がいた。

言わずもがなイケメンである。

待っていたと言うのは門番さんがすっかり話を通してくれた。ということだろう。

「フィネアさんも久しぶりです。」

「あ、えと・・・覚えてるんですか？」

「もちろん。

卒業生も含め、私の生徒だった人の性格や顔は忘れようと思っても忘れられるものではありませんよ。

学園長である私にとって、生徒は実の子同然ですからね。」

「あ、ありがとうございます。」

なんだこの変態は？

卒業生含め覚えてるとか・・・本当に人間なの？

「なんだこの変態は？という顔で私を見ているお嬢さんのお名前をお伺いしたいのですが？」

「こ、心を読まないでください。」

「ふふ、失礼。」

顔に出ていたものですから。」

こ、こやつ・・・できるっ!？」

「僕は響といいます。この学校に入学したいのですが、大丈夫でしょうか？」

「問題ありませんよ。」

くるものは拒まず。

去る物は追わず。

努力する物には手を。

努力しない物には無関心を。

それがこの学校の基本方針です。身分証明書の類で調べるのは前科があるかどうかくらいですから。」

「・・・よろしく願います。」

「よろしく願います。」

油断ならない人物である。

「紹介状には冒険者用クラスに入りたいと言うことでしたが・・・冒険者クラスでは例え貴方がどんな力を持っていようとこの学校は試験があり、その試験に合格しなければ上のクラスには上がれません。」

一番下のクラスから頑張ってもらうわけですが・・・問題ありませんか？」

別にそれでも問題は無い。無いが・・・」

「今、その試験を受けることは出来ないんですか？」

「本来なら今すぐ力試し用の試験を受けてもらい、その結果に応じたクラスに入ってもらうのですが、入学用の試験を扱う者があいにくと他の国に出張ってまして・・・少なくとも一ヵ月後になります。それまで入学を待ってもらえば大丈夫です。」

ただ一度入学した以上は一番下のランクから頑張っていたできます。生徒に無用な勘繰りをされたくないのです。」

そりゃ一ヶ月も下のクラスでいる場合、後から試験を受けて一気に3とか4とかクラスが上がると周りの人間からしたら面白くないよね。

なんで弱いところにいたんだ！とか逆にクラスが上のやつからしたら得たいの知れないやつがくるってことであまり歓迎されないだろう。

入学を待つのは無し。準備が終えつつある今、一ヶ月もお店を遊ばせるのはもったいない。それにフィニアからしたら20年近く来てない久しぶりの学校は気まずい場所になるだろう。

そこに1人で行かせるのは少しかわいそうだ。

僕としてもこの世界の学校が気になるし、なによりも“隠された目的”もある。それを果たすためにはクラスメイトから邪険にされる可能性の出る後か試験は論外。

下から、というのが無難だろう。

丁度今の僕は弱いし。

何か面白いスキルが得られるかもしれない。

「下からでいいです。」

「分かりました。」

フィネアさんもそれでいいですか？

1人で・・・というのは心細いでしょう？」

「は、はいっ！」

ありがとうございます。」

ほほう、なかなか気がきくじゃないか、校長。

「いいえ、それほどでも。」

んなっ!?

また読まれたっ!?

「口に出していましたよ？」

「・・・うるさいな。」

ニヤニヤしながらそう言う校長。

べ、別に口に出るくらいいいだろおっ!?

何がそんなにおかしいっ!!

「ずいぶん大事にされているな・・・と思っただけです。
フィネアさん。良い家族を得ましたね。」

「ふえ？」

あ、あ・・・ありがろんっ!!

「ありがろん？」

「ち、違います！」

ちよつと舌が回らなかっただけです!!

ありがとうございますと言おうとしたんです!!

「ぷくく・・・いえいえ、ドウいたしまして。

というか、ご家族を誉めただけですけどね。

さ、お話は終わりました。

質問はありますか？」

「無いよ！」

「無いです。」

「敬語はやめんとんですか？」

「あんたに使いたくない。」

「良く言われます。」

良く言われるんかい！

現時点では特に質問も無かったのでそのまま帰ることになった。

苦手なタイプである。

13 わ かつしよくの しょうじょ

次の日。

入学手続きのために昨日いきなりというわけには行かなかったらしいが、今日は大丈夫である。

異世界の学校。

この言葉のニュアンス的なものだけですごく楽しみな気分になれる。

ちなみに学校特有の制服は無い。

あるにはあるが原則で着てくる必要は無いため、問題ないのだ。

ただ、その耐久性とデザインが良いということでお金に都合の付く人は大抵の人が着てくるらしい。

着ていくのが無難だろうか。

とりあえず今日のところは私服で行くことにする。

「弁当は持ったし、もって行くものも特になし。

大丈夫かな・・・フィネア、いくよお。」

「ちょ、ちよつとまってくださいっ!」

「なにやってんのさ。」

「響から貰った服が少し着方が複雑でして・・・」

「そんな服買ったっけ?」

「いえ、その20年ぶりのワンピースですからちよつと着方を・・・」

「ワンピースの着方でてこずってるのっ!?!」

さすがとしか言いようがないのだがっ!?!?

というか、さりげなくまたもや貧乏アピールである。もうお腹一杯ですよ?」

「この服は今日が初のお披露目です！
・・・えへへ、どうですか？」

くるくると回りながら玄関に出てくるフィネア。

白を基調とし、ところどころでアクセントに赤の線が入った簡素なワンピースである。

ゆえにシンプルに可愛いといえる。

「うん、可愛いよ。」

「はうあっ!？」

ひ、響が普通に誉めるなんてっ！
な、何を企んでるんですかあっ!？」

「・・・もう誉めないからな。」

「あうあっ!？」

失礼すぎる!!

人がたまに誉めればこれである。

そっちがその気なら二度と誉めないからなっ!!

「早く行くよ。」

「はいです!!

ちなみに腕組みませんかっ!？」

「なぜっ!？」

「そっちのがデートっぽいじゃないですか!!

昨今の兄弟・・・じゃなかった、姉弟はデートをするそうです!!
一度でいいからデートって言うのをやってみたかったです!!」

「本音が後半に集約してる。正直なのは結構だが、もう少し自重してもらいたい。」

そして、僕が女性恐怖症だということを早くも忘れてらっしゃる。

さらに言えば遊びに行くわけでもなし、学校に行くだけだよ？
10分ほどの距離にある場所の。」

「まあまあ。」

とにかく私は腕を組んでみたいんです！！」

「だから僕の恐怖症をつ！？」

寄ってくる前に瞬時に後ずさる。

「・・・ぶーぶー！」

「ぶーたれてもしません！」

全く、朝っぱらから疲れることをしてくれる。

「・・・せっかく、治すためにと思ったのに・・・」

「ん？なんか言った？」

「いいえ、なんでもないです！

はやく行きましょう。」

なにやら不機嫌になったフィネア。

ワケが分からない。

いや、分かりそうで分からないといったほうが正しいか。

☆ ☆ ☆

「おや、来ましたね。」

学園長室にまずは来る。

細かい説明を受けるためだ。

「おはよう。校長。」

「おはようございます、学園長。」

「おはようございます。」

やっぱりもう敬語は使ってくれないんですね。少々残念です。」

「いいから進めてくれ。」

「それもそうですね。」

ではまず・・・このパンフレットを渡します。フィネアさんも休学して大分経ちましたからね。

念のため渡しておきます。」

といって渡されるパンフレット。

そこには『どらごにつく学校の全て』と書いてあった。

「これを読め、と？」

「そのとおりです。」

ぶっちゃけて言うと言明が面倒なので。」

「仕事しろよ。」

「まあいいじゃないですか。」

疑問があれば後で聞きに来るなり、その辺の教師を捕まえるなりしてください。

今、ちょっと忙しいんですよ、丁度飼っているハンニバルの卵がハッチ（孵化）しそうなので。」

「そういう理由！？

完璧な私情じゃんっ！？

なおのこと仕事しろっ！！

ていうか・・・ハンニバルってあの？」

「アレ以外のハンニバルが思いつきませんよ？

見たいんですか？」

「いや・・・そうじゃなくて、それって確か第二種警戒モンスターじゃなかったっけ？

飼っていいの？」

ちなみにであるが、どらぶれではモンスター飼育というシステムもあった。

ソロプレイヤーにとっては心強い味方で、なおかつどんなザコモンスターでも最強種にせまるステータスまで育てることが可能というライトでもヘビーでもユーザーが楽しめる仕様である。ただ弱いモンスターほど鍛えづらくなっており、序盤に出てくるモンスターを最強種並みに・・・となると非常に辛い作業となる。

フレンドに序盤に出てくる雑魚の代名詞、キメラアントを最強クラスにまで育てたマニアが居たがあの人は今頃何を育てているのだろうか？

確かバグボールとか言うダンゴムシみたいなモンスターを育ててるのを最後に見た気がする。

とはいえ飼育できるモンスターには二種類いて、その中でも凶鑑に“警戒”と付いた物はボスモンスターであり、飼育不可となっていた。

その警戒が付くモンスター。すなわちボスモンスターハンニバルであるが、見た目はトカゲを二足歩行に、体の各所に出張った鱗もとい鎧で包まれたカッコいいモンスターである。

口から炎塊を吐き出したり、炎の剣を作り出すなど技もカッコいい物が多い。

この世界ではそんな制限無いんだろうが、それでもちょっとやそつとじゃ上手くいかないと思うんだがどうなんだろうか？

まあ出来てるんだから出来るんだろう。

僕もこの世界に来た以上、飼育モンスターが一匹は欲しい物である。どらぶれではむしろ邪魔になるから捕まえても育てなかったしね。そのハンニバルの卵がどんなのか？とか産まれた子供はどんな姿なのか？とか気になるところではあるが、そこは置いておく。

「それじゃ、失礼します。」

と言って部屋を退散する。

「響？」

ハンニバルって何？」

「でかいトカゲだよ。」

それよりもパンフレットを読まないと。

というか、フィニアは覚えてないの？」

「・・・き、記憶力にはちよつと自身が無くて。」

「・・・さいですか。」

学校の探検がてら適当に歩きつつパンフレットを読む。

ええと、なにになに？

ふむふむ、ほうほう。

へえへえ。なるほどなるほど。

うむ。なむ。

「大体は分かった。大学みたいだね。」

「大学？」

「あ、いや、なんでもない。」

とにかく何からやっていこうか。」

どうやら大学のように自分である程度好きな授業を選べるようである。

そしてその選んだ授業がある時間と教室に個人個人で集まるとのことのようなのだ。

とはいえそれは一番下のランクである“卵”のみでランクがいちど上がるまでそれまでに受けた授業や能力でクラス分けとなるらしい。

クエストカードと同じでカエルの成長で表現し、ランク数も八段階。手抜きだろうか？と思いつつ。

よし。

「ええと、鑑定眼だけでいいんでしょうか？」

「他には魔眼や護衛術。

んでもって、僕も一緒に授業を受けるから。」

「え、そうなんですか？」

「戦闘に必要なスキルはすでに習得してるし・・・今受けられるスキルで欲しいのは特に無いしね。」

僕も店に関連するスキルを会得した方が有意義だもん。

あとはちよいちよい興味の惹かれたスキルを受けるってところ？

あと裏庭で他のハーブも育てるのもいいかも。となるとスキル「農耕水栽培」も必要かな。」

「・・・色々大変そうです。」

「でも、やりがいはあるでしょう？」

「は、はい！」

ちなみに卒業はどんなスキルでもいいからマスターをして、なおかつ試験官による試験をクリアすることで可能とのこと。

月額1人5000リーフ。

安いなあ。

しかも貧乏な学生のために出世払い制度なんてのもある。

実に親切な学校である。

学びたい人間が学べる学校。

いい学校だ。

敷地内を歩いているとなにやらトラぶっている集団を発見した。

子供の喧嘩だろうか？

とはいえ15、6程度の歳ではありそうだが。

絡まれてるらしき女の子は褐色の肌に黒塗りされた漆黒の長髪。

少し釣り目気味だが、その顔は気の強さというより無愛想な感じを受ける。

そして驚いたのがその服装。

女性侍と言えるような格好をしている。少し胸の開いたワンピース型の服を基本に肩鎧、膝から下は脛鎧、手甲。そして刀を三本、腰に差している。

どこのロロノアゾロさんですか？とか思わないでもないけど、別にいっぺんに使うとかでは無いと思う。ここから見ても三本の刀には使い込みの差が出ており、太刀ほどの長さの刀を一番使っているようだ。

残り二つは折れたとき用の予備と思われる。

そしてさらには・・・気づきづらいが服の下におそらく銃も携行している。

なんというか――一目で邪道な戦い方――良く言えば珍しい戦闘スタイルなんだろうなと思わせる。

前衛よりの遠近両用スタイルってところだろうか？

僕は完全後衛、ないしは遊撃タイプだしね。

そしてその少女に絡んでいると思われる少年が2人。

ガキ大将的なやつと狡賢そうなヤツ。

この2人が彼女になにやら難癖つけて絡んでいるということみたいだ。

「あの・・・助けなくていいんですか？

困ってるみたいですけど。」

「必要ないでしょう。ここは学校だし・・・子供の喧嘩にいちいち

口を出すのもね。

喧嘩ってのは子供の頃には必要なことだよ？」

「響も十分子供に見えますけど？」

「ロリババアのアンタが言うな。」

「ろ、ろりばばあっ!!？」

また失礼なニックネームをつけて!!

響はいつもそうです!!

いい加減、そういう変な呼び方は止めてください!!

第一、前にも言ったとおり私は18歳相当の――」

「前にも言ったとおり、18の癖には貧相な背だこと・・・ぷぷ。」

「わ、笑いましたねええええええっ!!

もういいです!!

そこまで言うなら見せてあげようじゃないですか!!」

「何を？」

「私の大人な対応ですよ!!」

あの喧嘩を見事仲裁して見せます!!」

「いや、やめとけば？」

無理だろうし、面倒そうだよ？」

2人組みが絡んでいる原因は少女の、この世界では珍しい黒髪で褐色、侍的な格好と言う異様さに言いがかりをつけているようである。そして2人組みは貴族らしい。

鼻持ちならない偉そうな人と言うのは少なからず居る物だが、この世界でもそれは変わらないようでなんとなく和む。

見た目の違いでいちゃもんをつける。

その幼稚さに“これが若さか”と思ってしまう僕としてはほほえましい光景に過ぎない。

助けに行こうとするフィニアに僕も付いていく。

褐色の少女には本当に悪いとは思うけれど、ここで恩を売ってさっそくコネを作ろうと思う。

あわよくば仲良くなって掘り出し物屋の商品獲得に協力してもらおうという思惑である。

彼女の装備品や武器を見るにどらごにあでは珍しい。できれば刀を仕入れることの出来るラインを彼女が持っていてくれたらな・・・

と思っても見たり。
彼女のどらぶれでは東のジパング大陸のジパング領で見られた装備である。

この世界でも多分それは変わらない。

ゲームと違うのはあまりこの世界では交易が盛んでは無いということ。ゆえに外国のものは非常に珍しい。物好きな貴族に高く売れそうである。

まあ出来ればさわやかな青年が良かったとも思わないでもないが、この学校での僕の隠れた目的と言うのは男同士の熱い友情を育むことだったりする。

非常に残念である。

実は男の娘とかだったらいいな・・・とちょっと思ったが、フラグになってしまいそうなのでやめた。胸あるし、その展開は無いだろう。多分。

「ちょっと貴方達、やめーあれ？」

フィネアが声をかけようとした瞬間、男たちが倒れた。

男が少女を殴ろうとしたからである。酷い男だと思いつつ、絶対にこれと関わらないと心のブラックリストに顔を追加。

「・・・それにしても珍しい。CCCとは。」

そう、男が倒れたのは男が繰り出した拳を少女がCCCさながらの

動きで捻り投げたからである。

CQCのルーツは関節を理解し極める柔道と、円運動の相手の力を利用する中国拳法だと言われている。

すなわちCQCというのは“相手の力をまともに受けずに流しつつ、関節を極めて動けなくする”武術である。

少女は男の拳を半身になりながら避け、拳が伸びきったところを掴み、そのまま足を引っ掛けて投げた。

その際に力を込めて関節を外している。

ふむなかなかの技量。

とはいえマスターしている、というほどではないようだ。

せいぜい40レベルあたりかな？

（スキルは100レベルまであり、100に到達するとマスターとなる。）

CQCに加え、CQCEXもある僕から見ればまだまだヒョッコ同然だけど、40とはいえかなり上がりにくいCQCスキルをそこまでするとは驚嘆に値する。

この世界には普通の道場はあっても、スキル熟練度が10倍になる道場がないからおさらである。

僕は結構道場に頼ってたからな・・・面倒すぎて。本当に凄い。

「て、てめえっ!!」

何しやがる!!」

「・・・それは私のセリフ。

イキナリ殴りかかってくる人間のセリフじゃない。」

「い、いい度胸だ!!」

お、覚えてろよっ!!」って、腕が変な方向にっ!？」

今更ですか。

それだけ見事に腕の関節を外したということだ。

あれは多分称号の「破壊王」もあるな。

攻撃力と魔法攻撃力に補正が付いて、なおかつモンスターの部位破壊や人間の関節を壊し易く上手くなるという物騒な称号である。

回復アイテムを使わずに真正面から戦って、倒した敵が2万に達すると手に入る称号。

どらぶれでは珍しくなかったが、現実となったこの世界ではそれなりに価値を持つ。

少なくとも結構戦いなれをしているみたいである。

もちろん僕は持っていない。

基本背後から・・・が普通だったし。

少年たちはひいひい言いながら逃げて言った。

「えと・・・あの？

あれ？私要らない子？」

「そうなるね。」

「そこはフォローして欲しいです。」

しょぼんとするフィネア。そんなに人助けがしたかったのか？

「誰？貴方たち。」

褐色の少女は僕たいに今気づいたようである。

遅いな。

声が“水城奈菜^{みずぎなな}”さんっぽい感じ。ちなみに水城奈菜とは僕が死ぬ前に好きだった声優さんである。

「あ、私はフィネアです。こっちは私の妹の響。」

「弟だろ・・・男だし、いや、弟でも無いが。兄貴だな！うん。」
「まだ言ってるんですか？」

往生際の悪い。」

「それ、僕のセリフじゃないか？」

「別に誰のセリフとかないでしょ？」

台本でも読みながら暮らしてるんですか？」

「そういう話してないでしょ！？」

「この大根役者っ！！」

「なんでっ！？」

「あ、いえ、一回言ってみたかった言葉なんです。」

「・・・。」

「ついでに“この泥棒ネコっ！！”ってセリフも言ってみたいです。」

」

「・・・言えばいいじゃない。」

「この泥棒ネコっ！！」

「・・・。」

「どうですか？」

「どうもしないわっ！！」

というか、この空気をどうにかしてくれ。」

全くもって疲れる子である。

「愉快な人たち？」

「なぜ疑問系だ？」

もしかして君もボケかな？

ボケ担当かな？」

「ボケてない。」

普通に聞いた。

そして貴方は女？男？

男らしいけど信じられない。」

「男だよ。ちゃんと付いてる。なんなら見てみる？」

「いい、いい。遠慮する。」

頬を染めてそっぽを向く少女。

初心なようだ。

ちらちらとこちらを見ている。

具体的には股間のあたりを。しょ、正直な子・・・なんだな、うん。

「や、やっぱり見る。」

「まさかの前言撤回っ！？このド変態っ！！」

「へ、変態！？・・・えっと・・・今のはジョークなの。」

だから変態じゃない。」

「・・・あっさりとまたもや前言撤回したね・・・別にいいけど。」

ジョークにしておいてあげる。」

「ありがとう。貴方はいい人？」

「とくにいい人ではないな。」

悪い人だと思う。」

だって、彼女と話しているのはぶっちゃけ打算しかない。

純粹な友人になろうとは欠片も思っていないのだ。

そんな人間は間違はなく“いい人”では無いだろう。

「それにしても特徴的な肌色ですね？」

どこの国の方なんですか？」

「ヒノクニというところから来た。」

「ま、まさかのそのまんまっ！？」

「ひあっ！？」

ど、どうしたんですか？いきなり大声を出して？」

「あ、いや、なんでもないよ。」

大抵、小説などで目にする異世界にくる展開の場合、日本もしくは日の国のようなそれだと言う名前はそのまま使われなかったりするのだが・・・ここでは普通にヒノクニと言うらしい。とはいえ、大陸の形は全く違うみたいだけでも。驚いて即座につっこんでしまった。

「知ってるの？」

「あ、いや・・・多分・・・僕の知ってるヒノクニの住人は肌がもう少し白かったような？」

「・・・あなた物知り。」

「そいつはどうも。」

そうして話していくと、彼女はヒノクニのみに存在する特有の種族で上位親族と呼ばれるらしい。文字違いではない。

日本で言うところの魑魅魍魎、万物に宿る力、精霊、そういったものの力が体に宿った種族で褐色に黒髪というのが一番の特徴らしい。どらぶれでは物体に魔力を込めると他の種族がやるよりも遥かに強力になるっていう“物質との親和性”が一番の特徴だっけ？

また褐色に近い色で黒髪の人族もいるにはいるが、上位親族の場合には黒い目ではなく、赤黒い瞳と言うのもまた特徴である。

「刀を始めて見るけどカッコいいな。」

「どこで買ったんだ？」

軽く探りを入れてみる。もちろん初めてというのは嘘・・・のよう。で本当。ゲームでは見たことあるんだけどね。本物は今日が始めてでむしろ普通に一本くれないかと思うくらいだ。

とはいえ宝の持ち腐れになってしまいうから少し気が引ける。なにせよ店のヴァリエーションのためにも出所を出来れば聞きたい。

すると彼女は少し迷うそぶりを見せた後に、答えてくれた。

「・・・私が自分で打ったもの。」

他人の作ったものは信用できない。」

なるほど。

これはなかなか良い人材をイキナリ見つけられたようであり、さっそく交渉。と行きたいところだが、もう少し彼女の現状と性格を把握してからで問題ないだろう。

焦って変な印象を与えるのはあまり良くない。

もう少し仲良くなってから・・・いや、仲良くなるとダメだな。

利用するという行為が出来なくなってしまう。

知人までに抑えて、お互いに利用し利用されるという関係がベストだろう。

「それと、もう一つ。」

「何かな？」

彼女は僕を睨みながら言った。

「貴方から何を頼まれてもそれに答えるつもりは無い。」

「ど、どうして？」

な、んですとっ!？

まさか、たくらみがばれたっ!？

いや、ばれても別に心象が悪くなるだけで実際には問題ないはず。

用は「他よりも少し高く買い取るから何かレアなアイテムを手に入れたら売って欲しい」という相互利益を得る関係を築こうってことである。

さっきから打算的とは言ってるが、実際はそこまで悪いことではない・・・はずだ。

そんなことを考えてる僕に対して、目の前の彼女はこう言った。

「貴方が私を見る目は軽蔑した物を見る目。

初対面の人間を下に見てくるような人間と一緒にいるつもりは無い。

」

「っ!？」

「もっというと貴方は信用ならない。私を・・・信用してない目だから。

本来なら話もしたくない。

さっきの男たちよりも私は貴方が嫌いだ。」

「い、言うじゃないか・・・」

「そっちの子。

助けようとしてくれたことには感謝をする。

ありがとう。

貴方もこの人とは関係を考え直すべき。

・・・それじゃ。」

そういつて少女は翻って、去っていかうとする。

その背にフィニアが抗議の声を向ける。

「ちょ、ちょと、待ってくださいっ!!

響のことを何もしらー」

が、僕は彼女の肩をつかんで首を横に振った。

「な、なんでですかっ!？」

「・・・事実だよ。」

何を言えるのさ。」

何よりも彼女が恐ろしい。

僕の内面を――自分すら自覚してるかしてないのかという曖昧な部分を的確につけてきた。

そうだ、確かに僕は彼女を信用していなかった。軽蔑していた。

女性恐怖症の根源を改めて知った気分だった。

「・・・私は一緒に居ますからね・・・絶対。」

「・・・分かってるよ。」

分かってるといいつつも心のどこかでは“きつといつか・・・”という思いがある。

女性と言うだけでその人の成りを判断し、勝手に見下す。

フィネアのことは軽蔑はしていない。

しては居ないはずだ。

だが、信用してるか?と問われれば微妙なところだ。

まだ出会って一ヶ月も経ってない。

多少の不信感はあるって当然だろうとは思う。

だが、それならば何時から僕は彼女を信用できるのだろうか?と思うと。

自分を殴りたくなる気持ちになるのだった。

褐色の少女。

僕の根源をいきなり見抜くとはやるじゃないか。

まったく・・・困った物である。

本当にね。

出来ればずっと目を背けていたかったものだ。

13わ かっしょくの しょうじょ (後書き)

今回は主人公のトラウマに迫る話です。

ここまではギャグテイストであり深刻には思えてないでしょうが、意外と深い傷です。

14わ しけんまえにて

「響、さっきのことを気にしてるんですか？」

「ん？」

ああ・・・いや・・・まあ、気にしてると言えば気にしてる。」

褐色少女にオマエは初対面の人間を軽蔑する人間だみたいなことを言われたのだ。

それを気にしないことにできるほど僕は凶太い人間じゃない。

嫌われてること自体は人それぞれというのもあるし相性が悪いと言うことで問題ない。

あまり気にしてないが・・・下に見る人間か。

非常に嫌な人間だな。我ながら。

ありていに言えば傷ついてると言える。

もちろんどうにかしたいとは思っているが、やはり今すぐどうにかできるような物でもなく。

フィネアがいまだ多少成りとも人形に話しかけるように、やはりこうしたトラウマというのは一朝一夕では治らない。

とはいえ、フィネアの場合は大分改善していると思われるが・・・。

「・・・凶星ゆえに・・・余計につてところかな。」

いろいろな意味でグサリと来た。

自己嫌悪の嵐で心が荒んでいく。嗚呼、癒しが欲しい。

「気にすること無いですよ？」

いつか治せばいいんです。

私も協力しますし。」

「・・・あ、ありがとう。」

どうすれば治せるのか検討も付かないけど、その気持ちだけは素直にありがたい。
でも。

「僕はフィネアのこと信じてないよ？」

「私だって信じてません。」

家族ってだけで信じれるほうがおかしいのです。

信頼と言うのは長年の付き合いでじっくり積み重ねられていくものですよ？

何を当たり前のことを。」

・・・むう。

言われてみれば。

「それに軽蔑と言うのは響のトラウマに原因があります。

私が身を持って女性は信用に足る、と分かせたとき、もうそんなことは無くなるはずですよ。

要は時間さえあればどうにでもなる問題なのですから、そう気にする必要は無いのですよ？」

「・・・そう。かな？」

これだけを言うので精一杯だった。

なんなんだ、フィネアのくせに。

アホの娘のくせに。嬉しいこと言いやがって。

それ以上何かを言うと泣きそうで、泣き顔を見せたくなくて。

数十秒かけて心を落ち着けた後、言ってやった。

「フィネアのくせになまいきな。」

「ど、どうしてそういうことを言うんですかっ!？
まったく、人がせっかく慰めてあげようと思ったのに・・・」

「ふふ。ありがとう、フィネア。
自分でも不思議なくらいに気持ちが悪くなった。」

「・・・そ、それは重畳です。」

目を合わせてしっかりと感謝の意を示すとフィネアは照れてそっぽを向く。

本当に良い家族を持ったのかもしれない。

「それよりも、授業に行きましょう。

何から受けます?」

「今の時間で僕達のランクが受けられる授業となると・・・剣術、
槍術と・・・CQCなんかもあるのか。護身術はCQCにしておく
?」

「なんですか?それは?」

「ええと、僕が依頼屋でモンスターを倒して稼いで来たのは言った
よね?」

そういう戦闘時に使う体術の一種の名前だよ。

店員としては常に武器を持ち歩くのもどうかと思うし、素手で扱え
る術が一番だと思うんだ。

幸い、CQCは熟練度が上がりにくいとはいえ熟練度が低くてもそ
れなりに威力を発揮できるスキルだし。僕も教えられるしね。そん
でもって後は魔法。

攻撃と防御を覚えれば言うことは無い。

それは次の時間だから、置いておいて・・・どうする?結局のここ
ろ自由にやってみたいのをやるのが一番だよ。」

僕にはスキル『教練』もある。

人に教える場合、熟練度が三倍になるというスキルだ。

どらぶれではこれで、道場主ごっこをしてお金を稼いだりもした。それでも上がりにくさで言えばトップクラス。マスターするまで通い詰める人は誰一人いなくて少し悲しかった。この世界は現実ゆえにもう少し上がりやすいかもしれないけどね。個人の努力や才能で上下しそうだ。

「・・・そうですね。

私もCQ・・・C?とやらを覚えることにします。

何よりもお揃いってのが、仲良し家族な感じがして好きです!!」

「そういう動機はどうかとおもうが・・・まあやる気があるなら良いや。」

というわけで、CQC教室に行くことになったのだった。

☆ ☆ ☆

「せいやあっ!」

「どうりゃっ!!」

おおぅ、やってるやってる。

生徒は大半が14、15くらいの男女である。

あまり歳の離れた人はいないようだ。

うむふむ。

教師らしき人は眼帯をしたガタイのいい男性。茶髪でバンダナを巻いている。

・・・スネーク?

メタルなギアソリッドに登場する主人公っぽい人がそこにいた。

声もあの人の声だ。

生のこの声。すごい良い。

仮称スネークさんと呼ぼう。

スネークさんは全体のコートが見える場所で生徒同士の組み手を険しい顔で凝視している。

決して、女性徒の体操着が組み手中に、はだけるのを見逃さまいと凝視しているわけではない。と思う。

「なんだ？」

この授業を取るやつか？」

僕達に気づいたスネークさんがこちらを見て聞いてくる。

「は、はい。そうです。」

「僕は付き添い・・・かな。」

付き添いだけってのは大丈夫でしょうか？授業の見学だけになるのですけど・・・」

「・・・？見てるだけなのか？問題はないが・・・む？」

なかなか良い筋肉の付き方してるな。何かやっているのか？」

「ええと、まあ。」

一目で分かるのかな？

「・・・見学は構わん。ただ、邪魔だけはしてくれなよ。」

「そんなこと言われなくても分かってますよ。ガキじゃあるまいに。」

「クク、違いない。」

すまん。それとそっちの子の名前は？」

「フィニアです。」

「そうか、俺はスネーク。よろしく頼む。この授業を受け持つ講師

だ。

何か体術の経験は？」

名前もそのまんまかいな。

「な、何もないです。」

「ならばまずは基本からだな。」

この授業で学んだことを一体何に使う？」

「ご、護身に……」

フィネアが少し後ずさりながら答えた。

まあスネークさんの声といい、圧迫感と言い、渋めのいかつい男な姿といい、気おされるのはやむをえないと思うけれど。

「ふむ……それならば体力よりも技術重視だな。」

分かった、まずは組み手で基本的な型からやって行こう。

体格的に俺では無理だろうから、そうだな。

マノフィカっ！ちよつと来てくれ。」

スネークさんは褐色の少女を呼んだ。

……さっきの子だった。

少し気まずいので僕はそろりと離れて物陰から覗き見る形となる。

だって……ねえ？

僕としてもこれ以上関わりたくない。そういう思いが強い。

なのになぜよりによってあの子もいるのか。

CQCを使っていたからか、そうですか。かなしいです。当然ですよ。ね。はい。

特に会話が始まるということもなくスネークさんの指示の元、組み手が始まった。

「・・・さっきぶり。あの男はまだいるのね。せっかく忠告してあげたのに。」

「・・・人の家族を悪く言わないで。」

「そう。ごめんなさい。でもあれは本音。」

親切のつもり。」

「余計なお世話です。」

「それもそう。」

「・・・さあ構えて。」

「ええと・・・こうですか？」

「肘をもう少しー」

2人の美少女がくんずほぐれずで絡む姿は眼福眼福。

・・・なんてね。僕からすれば身の毛もよだつ恐ろしい光景だ。

なにか喋ってるようだが離れているので聞こえない。聴覚強化のスキルも覚えておきたいな。

「やはり上手いな。」

教えるのも上手いことから彼女――マノフィカと呼ばれた少女は
教練スキルも持ってるのかも。
見てる限りは問題が無い。

僕はイベントリから紅茶を出して、紅茶を啜りながらゆっくりと見
学するのだった。
が、怒られた。

周りの生徒の精神的な邪魔になると。
言われて見れば、確かにそうである。

一生懸命練習してるところにやたらのんびりしてるヤツがいたらいい気はしないよね。

のんびりしすぎちゃった！

こほん。

それはさておき。

そのまま鑑定眼やらなにやらを選びつつ。

一週間ほどが過ぎたとある日。

呼び出されました。

誰に？

褐色の少女、マノフィカとやらに絡んでいた2人組みの少年達に。

「あの・・・なにか？」

なにやら良い予感はないが、まあ元日本人としてはここは平和的に話で解決するべきだと思う。

「オマエ、あの褐色といっつも一緒に居るやつだろ！？」

「いや・・・僕が、というよりはツレが・・・なんだけど。」

その見た目と刀と言う見慣れない武器を扱う異様な姿ゆえに浮いていたマノフィカと、これまた個性的ゆえに浮いていたフィネアはとも気が合ったらしく、一緒にいることが多くなった。

のだが、もちろん僕としては居づらいことこの上ないので、基本的にあの2人が絡むときはさりげなく距離を取っていたりするのだが・・・なぜまた僕の方に来たのか不明である。

もちろんそんなことをして居ればいくらあの娘でも気づくわけで、

フィネアは気にせず話しかければいい、とは言ってくれるのだがそれはマノフィカとやらにとっても僕にとっても精神衛生上、良くないということ遠慮させてもらった。

それからというもののフィネアは僕達を引き合わせるようなことをするのだが、基本空周りである。

「それで、僕を呼び出したってことは何か僕にして欲しいことでも？」

「来週に試験があるのは知ってるよな？」

何かといえばそれかい。

それはもちろん。

僕も魔眼や鑑定眼のあたりは初見なので、試験に受かるためにも結構一生懸命授業を受けているわけだがそれが何だろうか？

ちなみにランクあげは期間ではなく技量によって行われるため、定期的に試験が行われる。

その試験を受ける受けないは自由で、受かるだけの技量を獲得したと思うのであれば試験を受ければ良いということだ。

ついでに言うておくと、僕は趣味がてら斧スキルの授業なんかも受けている。

小さな女の子が身の丈異常の巨大な斧を振るう。

そんな姿に燃えと萌えを感じる僕です。

まあ僕は男だが、見た目的には問題あるまい。

力のステータスが低くて少し伸び悩んでもいるんだけどね。

スキル補正込みで、何とか背負える位の斧を扱える程度。

萌えを感じるまでの道のりは遠い。

「その試験でよ、俺たち、あいつの妨害をしようと思ってんだよ！」

「はぁ・・・」

なんというか、誰でも考え付くような報復ですね。
報復するにせよ、もっと面白いことをすればいいのに。

「それで僕に手伝え、と？」

「ああ、オマエのツレに絡まれてうんざりしてるんだろっ！？
丁度いいじゃねえか。」

「・・・しょうもな。」

「あん？」

「あ、いえ、なんでもありません。」

つい口に出てしまったぜ！

マノフィカさんと不仲っぽい僕を仲間に引き込んで一緒に叩きのめ
そうとかそんな感じ？

「それで、具体的な計画は？」

「おっと、これ以上は教えられねえな。オマエも協力してくれるっ
てんなら別だけだよ。」

「さいですか。なら良いです。」

「んなっ！？」

「・・・ぶっちゃけどうでもいいので。それでは。」

あ、あと、二度と話しかけないで下さい。息が臭いです。」

別に僕としては彼女のことはどうでもいいのである。

むしろフィネアの友達になってもらってるようで感謝こそすれど、
恨みなど無い。

彼女曰く見下してはいるようだけど・・・はは、苦笑するしかないな。

彼女自身も僕が彼女に苦手意識を持ってるのを気づいているのか、
どうも意識的に僕を無視するような振る舞いを見せてくる。これを

気遣いと取るか、単純に僕を無視してると取るかは余地の残るところではあるが、とりあえずは助かってるのでよしとする。

それと目の前の男達は二度と話しかけてこないで欲しい。

僕の男友達候補はもつとさわやかで何か恨み言があっても『H A H A H A H A ッ！そんなの全然気にして無いサ！！』と白い前歯を煌かせながら笑える人が良い。

いや、我が想像ながら殴りたくなるウザさだけでも。そんなのがリアルにいたら殴ってしまいたいそうさ。

もちろん、マノフィカさんに何かをしてきたら僕も揃って反撃をすることになる。

「ちょ、お、おいっ！

くそっ！！

おい、捕まえろっ！！」

なんでやねん！

えらそうな少年のほうがそう言ったと思うと、もう1人の小さな方の少年が襲い掛かってくる。

ここで懲らしめるのは簡単だけでも・・・そうすると後々面倒になりそうだな。

かといって大人しくやられるのは癪に触るし、そもそも痛いのはイヤだ。

とりあえずわざと捕まって・・・

「へへ、つうかまえた！！」

少し嬉々として捕まえてくる小柄な少年。

どさくさ紛れにお尻のほうへ手を向けてきたので、そうされる前に

腕を捻り上げる。

男にお尻を撫で回される趣味など無い。

そういえば殆どの人は僕を女と見てるんだったな。

今更だが、男同士の熱い友情に無理が出てきたかもしれない。

見た目を気にしない男を友達にせねば、拳で語り合うことが出来ないではないか。

それは一大事である。

僕が男同士の友情でやりたいことナンバーワンが“夕日の見える浜辺で拳と拳で語り合う”なのだからして。

「いだだだだだっ!？」

は、離せよっ!」

「・・・離してください・・・でしょう?」

「あいだだだだだっ!？」

態度がなくなってなかったので少し強めに捻りあげた。
反省なさい。

「わ、悪かったっ!! あだだっ!？」

離せ、離して、離してください!!」

「おっけー。」

言われたとおり離して突き飛ばす。

突き飛ばせとまでは言われて無いが、サービスである。

僕はサービス精神旺盛なのだ。

「て、てめえっ!!」

お、覚えてろよおっ!!」

といって逃げ出していく二人を見ると、これまた小物臭がハンパな

いのであった。

結局何がしたかったのかな？

あ、妨害か。

試験の妨害となると、何をするつもりなのかちよつと気になるころではある。

というのは少し不謹慎だね。

要反省。

あの程度の人間がする妨害だったら大したことがないだろう、と見くびりつつ。

「響！

こんなところに居たんですかつ！

探しましたっ！！」

「ん？

ああ、フィネア！と・・・マノフィカさん。」

また二人揃っていた。

いい加減、勘弁してもらいたいがフィネアは純粹に好意からやっていることなので言いづらい。だけなので、思いきってハッキリ言ったのだが“恐怖症の治療にいいはずです！”と一緒に居させようとするから尚のこと言いづらい。というか言い返せない。

実際治そうとしているのは僕としても本望であり、いずれやらなければならぬ道。

だったら今からやっていても問題は無い。というか誰かにそうやって強引にでもしてもらわなければ、僕はずーっと逃げたまんな気がする。

むしろそれに巻き込まれて、気まずい今の変則的な三角関係に巻き込まれたマノフィカさんこそ不遇と言えよう。

尚のこと僕への好感度が下がっていきそうだ。

具体的には最近、“あなたはフィネアの家族として相応しくない”

と言われたりとか。

そして彼女は思ったことをそのまま言う性格らしく、それを普通に三人で居るときに言うのがまた凄い。

普通、こういうことは影でこっそり僕だけに呟くとかだろうに、まっすぐな少女である。

周りの評価を気にせずに自分を通す。大人になっていくのと同時になかなか出来なくなることだ。

そういうところは個人的にかなり好感が持てる・・・というか純粋に尊敬もの。

悪く言えばわがままで我慢が出来ないってことになるんだけどね。

とはいえ、やはりというか、予想通りというかフィニアは結構な剣幕で怒る。

マノフィカさん自身も家族のことを外野が勝手に言うのは無粋だとわかってるのかすごくシュンとするのだが、ちょいちょい似たようなことを僕に言うのは最早、性格というか宿命と言うか・・・そのたびにフィニアに怒られてシュンとするマノフィカさん。

そうなると見てるこっちが気の毒なくらいの落ち込みようで、そのあとすぐに寸劇“女の子同士の仲直り”が繰り広げられる。まあ、想像に任せます。

「・・・こんにちは。」

「今、夕方だけだね。」

「・・・渋々してあげてるだけなのにずうずうしい。
むしろ感謝するべき。」

「・・・それはどうも。」

大抵こんな感じである。

最初はどんな時でも無視だったので、進歩してるともいえるが。

僕としても女性と関わるのはコレくらい薄い関係が一番良い思ったりもしつつ。

いかな。こんな後ろ向きでは治る者も治らん。

15わ きんぐおーく

一週間後。

試験日がきた。

僕達も試験を受けることに。

試験に落ちたからと、デメリットがあるわけでもないので二週間ほどしか授業を受けてない僕達も受けてみるだけ受けることにしたのだ。

僕は斧術^{ふじゅつ}で。フィネアはCQCで。

学校ではスキルを三種類に分けており、その重要度によって分類される。

重要度順にメジャースキル、ノーマルスキル、マイナースキルとあり、メジャースキルに分類されるのは武器関連が多い。

そしてランク上げ試験に受かるためにはメジャースキルならば1つ。ノーマルならば2つ。マイナーならば3つのスキルの試験を受けねばならないので、今回は日も浅いので一つだけでいいメジャースキルの『斧術』と『CQC』を選んだのである。

「さて、準備は大丈夫？」

「は、はひ・・・だ、大丈夫なのれす！」

「・・・ふふ、緊張しすぎ。落ちて当然。受かれば儲け物って程度の試験なんだから。

緊張は必要ないよ。」

「わ、わかってますけど・・・。」

試験会場である体育館。

僕の隣で緊張するフィネアに軽く声をかけつつ、順番を待つ。

視線をめぐらせて、マノフィカさんを探す。

彼女も居れば緊張も解けるだろうと思ったからだ。

ついでにあの2人組みを探したのだが、ここには居ないようである。

結局、見つからずに試験が始まった。

僕もフィネアも試験を終え、そのままマノフィカさんの番になるのだが一向にこない。

一時飛ばされたようである。

これは・・・いよいよ、きな臭くなってきた。

ここまで直接的なことは彼女の技量的にも、あの2人には無理だろうと判断していたのだが・・・探したほうが良いかもしれない。

「フィネア、マノフィカさんを探そう。

フィネアは学園内を。僕は外を探してくる。」

「え？

あの？」

「もうちょつとしっかり懲らしめておけばよかった。
とにかく頼むよ!!」

そのまま僕は走り去る。

杞憂であってくれば良いのだが。

☆ ☆ ☆

どじった。

凄く普通にどじってしまった。

体が凄く痛い。

血がドバドバ流れ出て、目がくらむ。

私はもうダメかもしれない。

ことの発端は私に絡んできた、あの2人が私に謝りたいと言ってきたこと。

私としても反省しているならば、と応対したのが甘かった。

まさか召喚石なんて物を使ってくるなんて、予想外。

目の前には聳え立つ大きな体躯。

100年以上は生きた大樹とも見紛う様な太い太い腕と足。

腕の先にはその腕よりもさらに頑強そうで雄大な斧。

魔力を放っていることから、それは魔具だということがわかる。

全てを喰らうかのような大きな口に大きな醜い豚のような鼻。

ゴリラと豚を足して割ったかのような顔立ちに、全身を覆う筋肉の鎧。さらにそれを鋼のような堅さと柔軟性を持つ剛毛が全身を覆っている。

キングオーク。

第一種警戒モンスターである。

なんてものを呼び出してくれたのか。

彼等は私が気に食わないからとこんな者を呼んでくるなんて・・・

「・・・貴方達、この子がどういうものか分かっているの?」

「分かっているに決まってるだろっ!」

俺の父上が持つ召喚石でも最高のーーごべっ!」

キングオークの太い腕で弾き飛ばされ、数十メートル先に飛んでいく大柄な少年。

家の壁に激突してピクリとも動かない。

死んだかもしれないね。

というよりもここが人の少ない区画でよかった。この時間帯なら働きに出ている人が殆どだろう。

「ひい、ひいひいひいひいっ!？」

小柄な方はそのまま逃げていった。

これは・・・困る。

『ココハ・・・ニンゲンノ棲家カ？

ナゼ、コノヨウナ場所ニ？

スデニ契約ハ終了シタハズ。』

オークというのは基本的に温和なモンスターで人間との不可侵条約を結んでいる。

ところがだ。

召喚石と言うものはランダムでモンスターを呼ぶアイテムで使い捨てである。

その名の通り“適当に召喚するだけ”なのだ。

簡単に言えば一か八かの最終手段といったところ。

召喚石の等級により、呼び出すモンスターの強さがある程度変わるが・・・これは本当にまずいものだ。

そんなものをこんな街中で・・・使うなんてバカげてる。

これだけのモンスターが街で暴れたら!？いや、まずは説得を――

「あ、あの・・・」

『ニンゲントイウノハイズレモ愚カナモノダ。

少し殺シテイクカ。』

「ちょ、ちょっと待ってっ!！」

『・・・ナンダ、ニンゲンノ子ドモ。貴様が我ヲヨビダシタノカ?』

「いえ、違います。が、暴れるのはやめてくだー」

『断ル。盟約ヲ破ツタノハソチラダ。』

懲ラシメナケレバ、マタ繰リ返ス。

驕リヲ罪トシレ、ニンゲン。』

膨大な殺気がキングオークからあふれ出る。

が、私はそれを耐え切る。

震える足に渴を入れ、せめてこいつを街中に出さなくてはならない。
今回の件は私のせいでもある。

私がー私がなんとかしなくちゃ・・・

『邪魔ヲスルノナラバ、殺スマデ。』

「っ!？」

家ほどはあろうかという斧を振り回してくるキングオーク。

それをとっさに刀で受け止めるがあっさりと刀が砕け、私も弾き飛ばされる。

吹き飛ばされながら、態勢を立て直す。

そして小太刀を抜き、懐にしまっているデザートイーグルという拳銃も取り出す。

私の戦闘スタイルは全距離オールラウンダーの遊撃タイプ。

これを相手に近距離は悪手。

常に中距離く遠距離を保ち、出来れば刀の一撃を叩き込むのが良い。
刀に魔力を込めて、銃にも込めて、強度と攻撃力を跳ね上げる。

接近してくる敵にデザートイーグルを打ち込んで見るものの、剛毛に弾かれ飛ばされる。

この程度じゃダメ。

なら、もっと溜め込む。

チャージっ！

『グオオオオオオオッ！！』

「しっ！！」

見た目に寄らず高速で走り寄ってくるオークと、その斧をかわしながら私は魔力を込め続ける。

『チョコマカト小賢シイ！！』

「ふあっ！？」

キングオークは地面に斧を叩きつけて、巻き起こった砂嵐で私を叩くようだ。

が、この程度・・・

『種族ノ王タルモノヲ舐メルナヨ！！』

「ひぐあっ！？」

思い切り横っ腹に斧が叩きつけられる。とっさに魔力を込めていたデザートイーグルを撃って相殺しようとしたが、勢いは衰えない。小太刀で防御する。

この粉塵の中で私の位置を正確に捉えて攻撃を繰り返すなんて驚き。地味なようだが、かなりのテクニクが要ることだ。

私の魔力の半分が込められている小太刀が砕け散り、私の腰半ばまで斧が突き刺さったところで私は吹き飛ばされた。

地面に何度も叩きつけられ、一瞬、天と地が分からなくなる。痛い。

凄く痛い。

ドジッた。
油断していた。

慢心していた。

今までが今まででなだけにどんな時でも、自分ひとりで対応できると
思っていた。

でも・・・今の有様がこれだ。

泣きたい。

どうして、私ばかりこんな目に遭うの？

どうして、私ばかり傷つくの？

どうして？

どうして？

いや、だめだ。今考えちゃだめ。

そのことを考えるのは今じゃない。

今考えるのはただ目の前の敵を、倒して生き残ること。それのみ。

そう、私が傷ついたところで誰も気づいてくれない。

『私にはそんな“価値が無い”から』

だから、だからこそ私は自分の力で生き残る。

「うごいて・・・にげなきゃ・・・あぐああああああっ!？」

『逃ガスワケ無カロウ!!』

「痛い・・・痛いよお・・・」

ずるずると這って逃げる私。

両足が・・・私の足が・・・無い。

無いよ。痛い。

痛い。

血が血がつ!!

止まらない!!

死にたくない！！

まだ、まだやりたいことが沢山あるのに・・・やらなくちゃいけないことだってある、私が生きてきた理由だって・・・

『久方ブリノニンゲンノ肉。

味ワツテ食ベー！ーブガアっ！？』

「えっ！？」

横合いから頭に何かぶつかったようにキングオークは倒れる。

「・・・チッ！

さすがにキングオーククラスのスモンスターともなると対物狙撃アンリマテリアル銃でもちょこつと血が出るだけとは・・・」

私の目の前には私の大ッ嫌いな人が立っていた。

☆ ☆ ☆

「なにこれ？」

と呟いたのが最初だった。

町外れの郊外。

そこにはまあ、あまりお目にかかることのできない第一種警戒モンスターであるキングオークが突っ立っていた。

即刻教師陣を呼んで来ようと思ったのだが、襲われている女の子が居るみたいである。

良く目を凝らしてみるとマノフィカさんのようで、案の定って感じだ。

さて、ここでどうするか？

教師を呼ぶまでに殺されそうな勢いだ。

普通ならばここで助ける。が。

今回の人助けはリスクが大きい。

ハッキリ言おう。

キングオークとか、勝てません。

負けます。

今持ちうる弾薬全て使って撃退可能かどうかのレベル。

今のステータスじゃマジで死ぬ。

いや、もちろん助けてやりたいというのはあるよ？

でも、今回は文字通り色んな意味でレベルが違う。

彼女が家族や恋人ならばともかく、命をかけてまで助けるほどの間柄ではない。

そんな相手をいちいち命を懸けてまで助けるほどの熱血はこの胸に無いのだ。

よって、ここは無難に教師陣を呼ぶのが普通。

普通。

なのだが。

一個だけ普通でなかったことがあった。

こんなときのための持ってた良かった「聴覚強化」。

授業で最近会得したスキルなのだが・・・聞こえてしまったわけなのである。

持ってた良かったとは思えなくなってしまうくらいの“面白い”セリフが。

「私にはそんな価値が無い」

うむ。

どこかで聞いたことのあるような言葉である。

どこかっていうか、目の前とか内側とか、そのものとか。

僕と同じような人間が同じように絶望して死のうとしてる。

まるで死んでこの世界に来る前の僕を目にしているようで、僕はいつのまにか対物狙撃銃を取り出して、弾を打ち込んでいたというわけである。

あれだね。

死亡フラグを自ら立てるとか、何よりも猛省するべきことがらである。

というかまたノリで行動しちゃったぜ、テヘ！

まあ、やっちゃったもんは仕方が無いので、すぐさま現場に駆けつける。

ついぼやいてしまったのは仕方が無いといえよう。

「はあ、我ながらバカな性格だわ・・・本当に。」

「あ、貴方・・・どうして・・・」

「何を驚いているんだか分かんが、とりあえずハイこれ。」

回復スプレーEXを取り出して吹きかける。と、途端に無かった両足が生えてくる。

正直グロいけど、女の子の体の一部に対してグロイというのはどうかと思ったので口を噤んでおく。

というか回復スプレー凄い。回復スプレーには人工たんぱく質とよばれる特別な高たんぱく成分が入っており、それが傷口に付着、細胞の遺伝子を取り込みながら人体を模倣し形成するのである。

そして一日経つと体と一体化し、馴染むのだ。

すごい便利アイテムである。

「私は貴方がきらいって言った。」

「言われたよ？それが？」

「なのはどうして助けるの？」

貴方は死ぬ。嫌いな相手を助けたために。ただ逃げれば良かったのに。偽善は人を救わない。」

「死にたくないって喚いてたやつが良く言う。」

「ふええっ！？

あ、あれはちがうっ！！

た、たまたま口が滑っただけで・・・」

「まあ死ぬつもりは無いしね。」

そのまま頭に手を置いて撫でてやる。

なんというか昔の自分を慰めてる感覚だ。

見た目も性格も全く違うのにな。

あれだけで目の前の少女を他人と思えなくなるとは。

「我ながら、単純だなあ・・・」

「・・・逃げて。今ならまだ間に合う。偽善で死ぬことは――」

「偽善？」

何を言ってるのかな？

“そんな”高尚なものじゃない。もっと薄汚くて、情けない理由だよ。」

「・・・何？」

「価値が無い人間同士の傷の舐めあい・・・ってところかね。」

「・・・っ。」

イベントリからペレッタ90TWOを二丁取り出す。

弾薬は普通のもの。

とにかく弾をぶち込んでいけば撃退できるでしょ。

『ナカナカ良イ不意打ちダッタ。』

次ハキサマダナ？

殺シテヤロウ！！』

「上等だっ！！

ブタゴリラっ！！」

まずは二丁拳銃でぶち込みまくる。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

発砲音と空葉莢が飛び散る金属音が当たりに鳴り響く。

ちなみにであるが、銃器の攻撃力は銃弾と銃自体を合わせたものになり、はじき出されるダメージは距離によって変わり、近いほど威力が上がる。

使用者の攻撃力は加算されないため、使い勝手が悪いように思えるかもしれないが、逆に言えば使用者の攻撃力は無視できるということである。安定したダメージを出せるのとボーナスポイントを攻撃に振らずに高火力を実現できる。そのために僕は銃器を選んでいるのだ。

（とはいえ、あくまでもレベルが低く、MPが少ない間の魔法攻撃の変わりである。）

そしてそんな僕にとって銃は全て攻撃力のみを特化させた改造をしているため、ハンドガンという銃器の中でも最も威力が低いとされる種類の銃でも、中級モンスター相手でも通用するレベルの威力を持っているのだが・・・なにこれ？

キングオークの表面の剛毛すら弾き飛ばせないってどういうことよ？

そして、その巨体に似合わぬフットワークで距離を詰めるオーク。

このフットワークじゃ結構な敏捷を持ってても捉えられちゃうな。

だが、僕も負けじと踏ん張って距離を取りつつ銃をぶっ放していく。

本当に厄介なモンスターだ。このままだとジリ貧で追い詰められていくのがわかる。

『豆鉄砲が通用スルト思ウナ!!』

「思っていないわッ!! いや、思ってたけどっ!!」

「・・・どうして・・・私を・・・価値が・・・」

何かボヤキが聞こえたけど無視をして、リロードをする。

スキル『天空・だんそう』があつて良かった。

武器や防具を除いた装備アイテムは予めイベントリからインスタン
トイベントリという所に入れておかないと、いちいちメニューウイ
ンドウを開いてイベントリから取り出さなくてはいけないという制
約がある。

いわゆるショートカットなのだがこれがまた困ったことにこの世界
に来てからというものの、インスタントイベントリに入れられる数が
極端に減ってしまったのである。

現実ゆえにショートカットと言う便利な物が存在しないのかと思ひ
つつ。

結局のところこの世界ではインスタン^{あらいぐま}トイベントリとはそのとき
“実際に手で持っている物”を表示されるようなのだ。

つまり、実質ショートカット機能は存在しない。

マガジンが必要とする銃器の場合、これは致命的である。最初のう
ちにイベントリから出してポケットなどに入れておかないとダメな
のだ。

と、説明したところで冒頭に戻るのだが、そんな僕を助けてくれる
のが『天空・だんそう』である。

このスキルは虚空にマガジンを出現させてくれるという優れもので、

装備している銃の口径に合わせた銃弾をオートで選択してくれると
言う便利機能付き。

本当、こういうギリギリの戦いの時はマジで助かる。

「どりゃさっ!!」

『グラァッ!!』

堅い、本当に堅い。

卑怯なほどに堅いよ!? このキングオーク!!

ダメージ蓄積されてるのかね?

ゲームじゃないし、そんなわけないか。

もったいないけど魔法弾も使う?

いや、ここで倒さなくても時間を稼げば助けがくるだろうし・・・
そもそも無駄だと思う。

となれば爆発系のもっと威力の強いものが必要だが、狙撃銃やロケットランチャーなんかを出してる隙は無い。たとえ出せたとしても
重い武器はナンセンス。ギリギリ付いていけるレベルなのに、自分で動きを制限するなんてありえない。

『ディバインエッジ!!』

「やばっ!?!」

キングオークの持つ斧から魔力が溢れ、ビームが当たり一面にランダムに降り注ぐ。

すばしっこい僕に当てるために広範囲攻撃に切り替えたのか。
だが、こんなのは所詮!!

「ほっ!

やっ!!とっ!!」

——シューティングゲームに過ぎん!!

敵の弾幕をかわしつつ、懐に潜り込み、グレネードを投げつける。

「こいつは・・・どうだっ!!」

ばっかーん!と轟音と爆炎がキングオークを包む。

『グオオオオオオオッ!!』

構わず突っ込んでくるとはっ!?

僕も突っ込んでそのまま相手の股下をくぐりぬける、ついでにグレネードを出しておいた残り全てを投下!!

満遍なくあたりにばら撒き、銃で起爆。そのまま連鎖して起爆していくグレネード。

連続して起こる爆音。

『ガアアアアアアッ!!』

びくともしないキングオーク。

これ、ムリゲーじゃない?

予想以上に堅いのは魔具が原因なのだろうか?

眼球すら弾かれるってどうよっ!?

こうなったら最後の手段。

ペレッタをしまつて、リボルバー回転式拳銃を一丁取り出した。

リボルバーの名前はM500。

世界最強の拳銃を目指して造られたといわれるモンスター銃で、デザインは普通の回転式拳銃。

ところがその大きさと重さと市販品として売られている中では一番威力があるとされる口径構造ゆえに凄まじい威力を持つモンスターガンとされている。

威力は世界最強クラスのハンドガンであるデザートイーグルを超えとも言われ、人間の頭にヘッドショットを決めた日には頭が粉々に吹き飛ぶほどの打撃力を持ちかねない銃器である。

貫通や、点の衝撃では無い。もはや“打撃”なのだ。

さらに言うところには強化されているため、通常時の15倍近くの威力を持つ。

正直、これの一発一発が必殺技ですか？と言える位のハンパ無い代物であるが、とにかくこれならばなんとかなるはず。

ただ、これを使うとあまりにも大変なことになるからできれば止めておきたいのだが、正直時間稼ぎも限界に近い。

いつコイツの攻撃を受けてもオカシクは無いくらいの拮抗具合なのだからして。

はぁ、と大きなため息を付きつつ。

『ブルアアアアアッ!!』

「ふっ！」

振りかぶってくる斧をかわし、距離をつめ、銃口を敵の心臓と思わしき場所に向ける。

髪の毛に斧が掠ったのは、相手が徐々にこちらの動きに慣れてる証拠。怖い。が。これで僕の勝ちだ!!

「見せてやろうっ!!」

世界最強の威力をっ!!」

引き金を引く。と同時に視界がぐるんと周り、体中に痛みを覚える。おおよそ銃が発した音とは思えない爆音をあたりに鳴り響かせて、M500はあらぬ方向へ飛んでいき、僕の腕と思わしきものも視界の端に捉えた。

もちろんこれは僕が予想外の反撃に遭った。わけではない。

『ガハアッ!？』

キ、キサマアアアアアアッ!！』

「あぐっ! あだっ!?!? ぐえっ!?!?」

僕は地面に叩きつけられながら、どっかの家壁にぶつかってようやく止まる。

そして自らの血にうずまりながらも、何とか立ち上がろうとする。

「くそう・・・やっぱり反動が強すぎる。」

そう、『反動』。

その威力の大きさをゆえに銃の反動がハンパないのである。

具体的に言うと僕の右腕が丸々肩まで千切れ飛び、体もちろんかなりの距離を転げ飛ばされることになる。

後で銃の回収が面倒なのもネックだったりしたり。

「あ、あれを受けてまだ生きてるの？

な、なんなのこのキチガイ的な生物は・・・」

キングオークはというと横っ腹と右腕が半ばから綺麗に吹き飛んでいるにもかかわらず、普通に動いていた。

腕一本犠牲にしたというのに、殺せなかったと言うことだ。

めちやくちや痛いのを我慢したって言うのに。

というか、心臓からずれすぎ。

ハンドガンスキルがあってこれなのだから、スキルが無かったら多分かすりもしなかっただろうなどと苦笑しつつ。おなじみ回復スプレーEXで腕を生やす。

「さて・・・どうしようか。」

M500はどっかへ行ってしまった。

次の手を考えないといけない。

現在進行形で再生し始めてるキングオークを見ると、頭を潰さないと勝てないだろうと思いつつ。

「ひいあっ!？」

ばがーんっ!と僕の横に大きな斧が落ちてきた。

キングオークの右腕が付いている。

一緒に飛ばされていたようだ。

「ん?この斧?」

スキル『適応』と『身体強化』、『攻撃力強化』が付いている魔斧のようである。

鑑定眼がさっそく役にたってラッキー。

斧によじ登って取っ手部分に触れると僕に『適応』し、斧が縮んでいく。

僕より2周りほど大きな斧が出来上がる。が、もう少し小さくなれなかったのかな?と思わずには居られない。どうもこれが限界のようだ。

「これ・・・使えるな。」

確実に殺せる手を思いついた僕であった。

16 わ きんぐおーく2 (前書き)

今回は挿絵有。ペン入れ済み。ペン入れた挿絵は始めてかも知れない。ちよつとプロっぽい気もしないこともないような？ww今回の話に出てくる武器の対物狙撃銃XM500の形は、持っている方はネギま33巻の表紙の龍宮というキャラが持っている銃を見てもらえれば。あれとほぼ同じ外観。実際は取って部分がちよつと違いますがどね。メタルギア4をお持ちの人はアキバの使っていたM82 A1を想像してもらえれば。

あとはググってww

16わ きんぐおーく2

さて、勝てる策とは単純明快。

斧を持って身体強化。

身体強化した状態で対物狙撃銃の二丁拳銃——いや狙撃銃をやろうってわけである。アンチマテリアルライフル

これならば対物狙撃銃が二丁持った状態でも、なんとかスピードを落とさずに済む。

丁度距離も離れているし、メニューウィンドウを開いてイベントリから狙撃銃を取り出す。

唇が乾き、舌なめずりをしながらライフルを構える。我ながらちょっと興奮してたりも。

アンチマテリアルライフル
対物狙撃銃の二丁撃ちなんて凡そ無茶なことだからだ。

当たり前のことだが、銃は威力が高いほど反動は大きい。

なおかつ今持っているのは見た目こそ現実と変わらないが、威力自体は改造されて段違いのライフル。

反動は2〜3倍以上、威力は軽く五倍を越す。

そんな銃を二丁撃ちをしたところで、さすがにスキル補正があってもろくに狙えないだろう。そもそも全身を使って反動を吸収する構造なのだからして。

ちなみに銃名はXM500。装弾数は10。重さは10キロを超す。セミオート式。

（セミオートというのは一発撃つと次弾が装填される構造のことを言う。フルオートは引き金を引き続けてる間は弾がある限り勝手に連射してくれる構造のこと。対物狙撃銃の場合はフルオートの銃は恐らく存在しない。反動が大きいため、弾がぶれて当たらないからである。）

「魔法がある世界だからこそ出来るってもんだよね。」

身体強化はレアスキル。

普通に身に付けることは出来ず、たまに手に入るレアドロップについているか付いていないか、という程度。
なかなか良い拾い物をした。

『グガアアアアアッ!!』

ニンゲンッ!!』

ドコダッ!!ドコヘイツタアアアアアアッ!!』

すでに腕が生えて吹き飛んだ横っ腹も復元しているキングオークは怒り狂って辺りの家をただひたすら、壊しまわっている。

あ、あれは、その・・・あれほどのモンスターの八つ当たりとか迷惑極まりないよね。

せっかく引いた注意をマノフィカさんに向けられるわけにも行かず。僕はすぐに走りいく。

「どりゃさっ!!』

屋根に飛び移り、歩きながら二丁の対物狙撃銃アンチマテリアルライフルを撃ち続けて接近する。

弾が無くなったら、片方を空中に投げ、虚空に出現したマガジンをすぐさま付け替える。

そして落ちてきたのを受け取る。

それを繰り返しつつ、接近しながら相手の頭を狙い撃ちつづける。

斧を手放したゆえに防御力が落ちたためか面白いくらいに相手の体の肉が飛び散り、血が噴出す。

改造した対物狙撃銃は先ほどの回転式拳銃に近い威力を出す、銃自体の重量でかなり反動を制限できる。素の威力でも装甲車や壁を貫通して標的を打ち抜くレベルの銃だから、コレくらいの威力は当然とも言える。

本来なら地面に固定しなければ肩が脱臼しかけて筋肉が断裂するくらい、の反動があるのだが、斧のおかげでなんとか制動し、ある程度照準をつけることが出来ている。

重ねて言うが、本当に良い拾い物をした。

さっきは距離があってこいつの威力を発揮できなかったからね。存分に味わってもらおう。

余談だが、XM500の射程距離は1000メートル。1キロだが改造しているので5キロまで届くと言う超怖い代物となっている。威力も軽く五倍以上。壁の一つや二つは簡単に貫通します。

人体に当たれば吹き飛びます。色々。

というか、今更だけどうしてこんなに直接的なバトルスタイルをとっているのだろうか？

本来、僕は暗殺者タイプだと言うのに。

『グガアアアアアアアアアアッ!!』

「おっとっ!!」

目の前に迫る拳を避けて、飛び乗る。そのまま腕を走り登って行き、頭に照準をつけてバン！連射する。

『グギヤアアアアッ!?!』

「全然倒れないね!?!」

結構有利になったと思ったのだが、再生力が凄まじい。

ハガレンのホームクルスですか？と聞きたくなるほどの再生スピードである。

これでも豆鉄砲ってことになるのかね？

「さて、ここまでやっておいてなんだけど・・・いや、まあ黙ってやられるわけにも行かないし仕方ないんだけどさ？

降伏する気は無いの？」

『王ノ誇リニカケテ、一度始マッタ戦イカラ撤退スルコトハナイツ
！！』

「おわつと！？」

・・・いや、こっちが悪いのに殺すって言うのはどうかと思うし・・・その、本当に帰る気ないの？

それに撤退って言うより・・・こちらが見逃してもらって形になると思うんだけどね。」

『貴様が、ドウ思オウト違イハ無イ！！一度対峙シタ敵ニ背ヲ向ケルナラバ死ヌコトヲ選ブ！！我ノ矜持ダツ！！』

「そうかいっ！！

どっせいやっ！！」

『ゴガアッ！？』

話してる最中にも変わらず拳と弾薬が舞い上がり、血と薬莢が飛び散る。

地面を踏み締める音がリズムを刻み、岩が砕けることでアクセントと化す。

死闘という名の協奏曲が奏でられる。

>i29021—2238<

『ガアアアアアッ！！』

「——あらっ!?!うおいつ!?!つて、あぐっ!?!」

その場でスピンしながらがむしゃらに腕を振り回すキングオーク。その際に飛び散った瓦礫の一つを踏んで、こける僕。そこに丁度迫るキングオークの拳。それが僕にぶち当たる。

ここでこけるってどういうこと!?!?

とっさに防御に使った対物狙撃銃が砕け散り、僕の体にそのまま拳がめり込んで吹き飛ばされた。
地面となんとか体当たりして止まる僕。

「づあ……——ったいなあっ!?!」

肋骨が折れて肺に突き刺さっているようだ。対物狙撃銃の破片も体に……具体的に言うとうつのあたりに運悪く突き刺さっている。いやはや人間を野球ボールのようにかつとばすってこれまたいかに!?!?

『油断シタナ!?!コレデ……終ワリダアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?!』

「や、ばっ!?!?」

立ち上がろうとしたとき、追い討ちの拳が向かってくる。肝心なときに転んで死ぬなんてっ!?!? そんな死に方いやだあああああっ!?!!

「……ううう……あれ?

——なんともない?」

条件反射的に堅く瞑った目を開けて見ると目の前にはうっすらと白い障壁^{バリデ}がキングオークの拳を防いでいた。

「ふおおおお、大丈夫かね？」

目の前にはおじいさん。学校の紋章をローブにつけていることから教師らしいことが分かる。

「そう見えます？ごふっ。」

吐血する僕。潰れかけた胃や肺から血が逆流してくる。

量が凄い。そして痛みを感じず、熱感しか感じないのがまた怖い。どうなってるのか傷口を見たくないわコレ。

「元氣な嬢ちゃんじゃの。」

お坊ちゃんだけだな。

「それよりも・・・ゴプッ。キングオークは良いのですか？」

血反吐を吐きつつも疑問を口にする。今のうちに攻撃しないの？と言いたい。初級防御呪文の魔法でキングオークの攻撃を受けたことからこの人がかなりの魔技使いであることは分かる。分かるがさすがによそ見できるほどの強度ではない。

ほら、パリンと音を発てて簡単に破れてしまった。とっとと追い討ちをかけないから。とてもじゃないが目の前のお爺さんにあのキングオークのスピードに追いつけるほどの敏捷性は求めれそうにない。

「問題あるまい。ほれ。」

キングオークがもう一度攻撃をしかけようとするが、その腕が斬り飛ばされた。

「え？」

見ると青年らしき人が両刃のポピュラーな西洋剣でもって腕を切り取っていた。

つかジャンプ力凄いな。

「じいさん！こいつはすげえっ！！ヒサビサの大物だぜ！！今の一撃で剣がポッキリいっちゃった。」

「もう少し落ち着かんか。まあキングオークともなると分からんでもないがのう。」

「ああん？分かってるよ。生徒の前だからもっと落ち着けて言うんだろう？」

・・・えと、俺は剣術の教師をやってるルークってんだ。嬢ちゃんの名前は？」

「響です。」

「おう、響か！いい名前だな！！」

「ど、どうも。」

なんだろうか？この馴れ馴れしい教師は。

別に不快というほどではないけどね。

というかキングオークの腕を一太刀でぶった切るとは・・・どらぶれではカンストプレイヤーでも難しいはずなのに。

というか、重ねて言うけど追い討ちは良いの？

しかも剣が折れてるし。

ほら、じゅりゅりと生々しい音を発てて腕が再生したキングオー

ク。

「問題ねえよ。ほれ。」

迫り来る拳。

が、それが目の前で吹き飛ぶ。

拳が可哀想だな・・・とか関係ないけど思った。

「狙撃？」

「良く分かったな？」

そうだよ、スネークが居るからな。」

「・・・へえ・・・ごはっ。」

「つか、お前さん死にかけなのに普通にしすぎだろ？さっきから吐血してるのスルー？」

「ワシが治してやろうかの。」

「ああ、お願いします。」

体が淡い光に包まれると治って行くのと同時に破片が体から出される。

「ええと・・・」

とりあえずキングオークは放っておいてマノフィカさんを探す。

戦闘に巻き込まれたりとかしてないよね？

幸い、すぐに見つけられた。

「あ、いた。マノフィカさん。大丈夫？」

一応声をかける。回復スプレーEXの成分が体に馴染むまで丸一日。それまでは立ち続けるのはおろか、歩きづらいうけどこれは我

慢してもらうしかない。

さすがに足を丸々日本ともなると4つも使ったのである。

「・・・大丈夫。」

「よかった。助けたかいがあったものだよ。」

「どうして・・・助けたの。今のは下手をすれば貴方は死んでいた。」

「さっきも言ったじゃないか。単なる同情？ 憐憫かな？ 同じ価値・・
・ってのはいいか。とにかく同属嫌悪？ いや、嫌悪して無いから同
族意識？ ってもものだろうか？

特別僕は善人じゃないってのは言っておくよ。」

そして同情、憐憫。向けられるほうとしては嬉しくない感情かもね。
分かりながらも、あえてこう言おう。事実ソレしかないし。

「立てる・・・わけないよね？」

「・・・うるさい。」

帰るためにも背負ってあげるかと思ったけど、嫌いな男に対して甘
えることを許すような娘には見えない。とはいえここで何もしない
のもどうかと思うので女性恐怖症を我慢しつつも手を差し伸べると
振り払われた。

傷つきました。

こっちの勝手な都合だから別にお礼をもらえろとは思っちゃいなか
ったけどさ。

手が赤くなるくらいの強さで手を叩き払われるのはどうかと思う。

そして彼女の頬がほんのりと赤いのは・・・なぜ？

さっき頭をなでたことで時間差“撫でてポツと赤くなる”。略して
時差ナデポが発動したのか？ と前向きに考えてみたものの。状況的

にそれは難しいので、おそらく自分の今の不甲斐なさに赤面してる
とか、嫌いな相手に頼らざるを得ない状況が恥ずかしいとかそんな
ところ？

より傷つくわ、うん。

そこまで僕を嫌ってたとは、予想以上である。

「あ、貴方なんか頼るつもりは無い。」

「そ、そうですか。」

「・・・そ、そう！」

なんとかポーカーフフェイスを維持できたと思うが、僕は基本的にナ
イーブなのである。

嫌うなら嫌うでもう少し気を遣った嫌い方をして欲しい。

気を遣った嫌い方ってなんだろうと言って思うけど。

ま、あれだよな？彼女はどうか知らないが僕は女性から見れば見
事な価値なしである。

そんなニンゲンが好かれるはずもなく。

嫌うだけの価値はあるということでは良しとしようではないか。

な、泣いてなんか無いんだからね！？

「ふおふおふお、青春じゃのう。どれ、そっちの嬢ちゃんの足もき
つちり馴染ませよう。」

「あ、ありがとうございます。」

お礼・・・か。別にいらないよ？

いらないけど。いらないけどさあ。こうして助けられて素直にお爺
さんにお礼を言ってるマノフィカさんを見てるとなんか納得がい
かないと思うのは仕方ないと思う。

重ねて言うけど僕の勝手で助けたから彼女が礼を言う必要はないん

だけだね。

もっと言えば礼を言うかどうかは彼女次第。

彼女がお礼を言いたいと思っただろうし、言いたくないと思っただけなら言わない。

すなわち、目の前の光景は僕に助けられたのを心底から不快に感じているということの証明に他ならない。

うん、なんかむしろこっちが悪い気がしてきた。

むしろ謝っておこうか。

こっちが。

「その、マノフィカさん。」

「何？」

相変わらず少し頬を染めたまま、睨んでくる彼女。振り向きざまにガン付けですか。

なるほど。

とつとと話せ！こちらら暇じゃねえんだよ！！お礼かつ！？お礼を言って欲しいんかつ！？

と言わんばかりの目力で睨んでくる。

いえいえ、そんなまさか。一応助けになるし僕のエゴを通してでも大して彼女の迷惑にはならないだろうと思っていた僕を許してください。

「ご、ごめんなさい。」

「え？」

「あの・・・心底迷惑だったみたいだから。」

自分の勝手に人に迷惑をかけたら謝る。これ常識。

たとえば助けだろうが、相手が必要なればただの有難迷惑と化す。

「あ、えと・・・それは・・・」

少し慌てたように手をバタバタする彼女。

ふむふむ。これは恐らく“私の本心がこんなに簡単に透けてるなんて!?”という動揺のあらわれだろう。

これを見て確信した。

やはり不快だったのだと。

今度からは見捨てる努力もせねばなるまい。

「・・・それじゃ。」

「ふおふおふお、面白いことになったの。」

まあそれはともかく今は疲れておるだろうし後日、事情を聞かせてもらうからの?」

「あ、はい。というかキングオークを忘れてました。・・・いつの間にか居なくなってるんですけど?」

「ワシが送り返した。」

「す、すごいですね。」

「じいさんが出張ると俺らの仕事が少なくていけねえ。つまんねえぜ。」

「遊びじゃないんじゃないぞ?」

「わーってるって。」

送還魔法なんて存在してなかったと思うんだけど、この世界ではあるのかな?

ま、いいや。

とりあえずなんか疲れたし、今日はとっとと帰って寝よう。

「ま、待って!」

「ん、何?」

マノフィカさんが僕を呼び止める。

彼女から話しかけてくるとは珍しい。というか初めてのことだ。
文句を言い足りないとか？

「その・・・貴方からは軽蔑の眼差しが消えていた。」

「・・・はあ？」

「えと・・・だから・・・その・・・それだけ。だから。」

「・・・うん？」

そのまま走り去っていくマノフィカさん。というか、おじいさんの魔法ハンパ無い。

んと？

何を言いたかったの？

軽蔑の眼差し？

女性を軽蔑しなくなってるってこと？

いや、それは無い。

そんな簡単に治るものではない。ゆえに、多分彼女を近しく感じた
というのが理由だろう。

自分に似た何かを感じた。大抵の人は自分を嫌うなどということは
無いしね。

とはいえ、少しトラウマを克服したような錯覚もあってちょっと嬉しい。
しい。

ちょっとテンションが上がった僕だった。

16 わ きんぐおーく2 (後書き)

例え肉体強化をしていてもアンチマテリアルライフルの二丁撃ちなんてのは到底不可能なことですけど（主人公の体格的に。普通に体がフツ飛ぶ。）、あまり細かくはツツコまないでくださいww
足りない部分はスキル『すないぱー』でその辺は不思議とカバーできてるという一応の設定です。

17 わ はじめて の ちょうにんらい (前書き)

久しぶりの更新。今月はあれだった。色々鬱な出来事が多かった月でした。

17 わ はじめて の ちょうにんらい

キングオークという本来ならありえないであろうボスマンスターと戦うことになって半月程が過ぎた。

もちろん学園にはワケを聞かれ、原因である貴族の息子には退学処分。

召喚石は戦争時に使うためのあくまでも敵国に対する、ないしは国民ひいては国を守るための兵器であり、その召喚石を所持していたとして親も厳しく処罰されたそう。

召喚石は戦争が終わり次第、例外なく国に収めなければいけないものなのに、それを掠め取っていたということである。キングオークが落とした魔斧はあのまま僕が貰った。

そして、あれ以来マノフィカさんの僕に対する態度が軟化した。フィネアは大層喜んだ。

のだが、それでもぎこちないのは変わりなかった。

彼女の心境的に“今まで第一印象で嫌っていたやつが実は良いやつだった。ところが、今までの態度なだけに今更愛想良くするのほ些か以上に気まずい。”と言った所だろう。

僕としてはその辺は全く気にしてはいないが、下手に馴れ合われても女性恐怖症の身としては困ってしまうのでむしろ好都合。

僕から歩み寄ったりはしないため、なおのこと距離感は離れていくわけだがそれもやむなし。

そんな予後話とはかくとして、現在は依頼屋に来ていた。

「レトお姉ちゃん。もう無いの？」

「ごめんなさいね。」

もうすっかりお姉ちゃんをつけるのが定着してしまったことに少し我ながら呆れを感じつつ。というか、そうしないとシカトされる。なおかつちよつとここの依頼屋で僕は有名になっていた。

言わずもがな、その容姿と小ささでちよこちよこと殺伐とした依頼屋を受けにくる小さな女の子として。

皆が皆自分の娘や孫をみるかのように優しくしてくる冒険者どもにはちよつと鬱陶しい面もあるが、純粋な善意であるためどうにもつつけんどんにはできない。

ちなみに誰が何を受けたとかそういう情報は普通は知られないので、町人依頼専門の子供としてやたらと微笑ましく見守られているのが僕の現状である。

別にいいんだけどさ。

斧を背負って持ってきただけで、「おい？だ、大丈夫か？重くないか？」と心配そうに聞いてくる見た目50のいかついオッサン——オジサマや、「それは・・・魔斧か？——危険はなさそうだが気をつけて扱うんだぞ。何かあれば俺に言え」と行ってくる優男風のお兄さん。

「あら、大丈夫？魔斧・・・かしら？実力を勘違いして魔物を殺しにいたりとかしたらだめだからね」と一見、考えなしであろう子供が蛮勇を起こさないようにと念を押してくるお姉さんと。

気の良い人たちが多いようで嬉恥ずかしいというものである。

いや、普通に扱えますからね？

とまあ閑話休題。

ここにきた理由は生活費を稼ぐため。

プレオープン

お店はすでに開店しているが、人が少ないのはどうしようもない。ただでさえ少ないのに、来てくれた人が買っていつてくれる人はさ

らに少ない。客の持ってきた物を買取ったりともあるので食っていくには全然足りない。すなわち貧乏な僕にとって、いまや依頼屋に来て依頼を受けるのは僕の本業と化している。

もちろん学園に入ったのは宣伝が目的であり、宣伝はするつもりなのだがいまだ僕たちの知り合いはマノフィカさん1人。

あれ？どうしてこんなことに。

とにかく試験に合格。クラスを上げて、一箇所に留まれるまではお預けである。

とまそれはマタの機会に考えるとして。

「討伐系はもう全部終わってるのよ。」

「・・・ううう・・・不便な。」

ゲームでは尽きずに何度も出来た依頼クエストもここは現実。

そうそう都合よくモンスターの討伐依頼があるはずも無く。幸か不幸かキメラアントの繁殖期も終えてしまった。

あるのは未開の地やダンジョンを探索しろとか、商人の護衛や盗賊の捕獲、または駆除などなど。

一日、二日では終わりそうには無いものばかりである。

遠出や探索に日数がかかる未開の地やダンジョンは不可。

現実である今。下手をすれば一週間どころではない。

行きと帰りの日数も合わせれば最低でも一ヶ月はまずかかるだろうし、長ければ半年。下手をすれば一年以上かかるかもしれない。

そんなのは勘弁被る。

商人の護衛なんかも多少は日を取られてしまうけれどベターな依頼ということの良いかもしれない。が、現実はそう甘くない。

不意打ちに対応できる手段を持っていないのだ。

不意打ちが運悪く商人を一撃で殺したらと思えば・・・

要は無理。というほどではないが、3割ほどで失敗するかもという

程度。

3割は結構でかい。

盗賊の討伐だ駆除なんてのは言わずもがな。

中身は普通の日本人。ゲームならばともかく現実で人殺しなんて出来るはずも無く。

いや、いずれする必要も出てくるかもしれないけど、今ここで自ら望んで行きたいとは思えない。

まあ僕のことだから目の前でフィネアが殺されそうになったりとか自分が殺されそうになるくらいに追い込まれたらなどの状況に陥れば、勢いとノリと怒りで殺せるだろう。

殺せるだろうがそのまま殺されるかもしれない。そんな博打を打ちたくは無い。

あまり深く考えずに、僕が受けなくてもほかの誰かがやってくれるだろう精神でスルーしておく。

そういう殺伐としたのは苦手です。

ほかには違法奴隷商人の捕縛、殺害や違法魔技師の捕縛、殺害。脱走した違法貴族の搜索などなど。

違法が多いなっ！と思った。

そして捕縛と殺害では捕縛のほうが報酬が美味しいようである。

他のを見てみるが、対人依頼がこれでもかってほど多いのはゲームじゃないからか。

そら良く良く考えてみれば僕以外にもモンスターを狩っている輩は多々居るわけで。

そんな人達がこぞって周辺のモンスターを狩っていればもちろん結果的にモンスターが少なくなり、“モンスターを倒してくれ”という旨の依頼が少なくなるのは当然のことである。

どこからともなく出現するわけではなく、モンスターも生きて繁殖

して増えていくのだから当然のことか。

ふむ。こうなってしまうては実際に町人依頼というのを受けてみようか。

若干儲けが悪いのだがそこはしかたない。

「町人依頼は何があります？」

「んと・・・今のランクで受けれるというところくらいかしらね？」

むむむ。少ない。

「ちょっと少なすぎないですか？」

町人依頼とはその名の通り、街の人からの依頼。街から出ずにすんだり、命の危険がほぼ無いというメリットがある。

そのためこうした依頼を専門にしている人もいるとかかんとか。基本的に若い子が多いらしく、僕がそうだと思われたのも無理は無い。日本で言うところの学生のアルバイトみたいなものだろうか？

命の危険が無い分、普通の依頼屋の依頼よりは格段に報酬が落ちるのだが、それでも一日に1回〜3回受けておけば質素に過ごす分には問題ない程度にはお金が溜まる。

それが10にも満たないというのはどういうことか。

依頼屋の依頼、もといクエストは僕のランク、オタマジヤクシでも20以上はあったというのに。

「そういえば響ちゃんは初めてだったのよね？」

町人依頼はクエストカードのランクじゃなくて、その裏に書いてある・・・貢献度というのがあるのよ。

そのポイント基準で受けられる依頼が増えていくの。」

「へえ。それはやっぱり・・・」

「ふふ。そうよ。察しの通り、町人からの苦情をさけるためにある

一定以上の依頼をこなした人・・・すなわち、信頼できる人じゃないと受けさせられないというわけ。

普通のクエストを失敗する分にはその冒険者が死ぬか怪我をするか・・・すなわち自己責任の範疇で済むのだけど、これは町人からの依頼だからね。

失敗されると依頼を受けた人間はもちろん、依頼屋の評判まで悪くなる。

だから一定の基準が必要なのよ。」

「その基準がこの貢献度？」

「そのとおり。ふふふ。可愛くて察しの良い子にはナデナデしてあげましょう。」

「遠慮します。」

「照れない照れない。」

撫でてくる手を払いのけつつ、町人依頼の用紙を見比べていく。

部屋の模様替えを手伝って欲しい。

庭の雑草掃除。

老夫婦の変わりに買い物。

お店の店番。

新作服のテストモデル。

貴族の荷物もち。

などなど。

普通の依頼屋のクエストに比べると日本の手伝いレベルの簡単かつ平和的な依頼が全てのものである。

貢献度が上がるほど、難しい依頼も出てくるのだらうけどこれは大分楽そうだ。

とはいえ、その分もらえるお金は格段に落ちるのだが。

「ふむふむ・・・じゃあ、これにします。」

「あら、これにするの？」

とりあえず選んだのは庭の雑草掃除である。

たまには童心に返って土いじりをするのもいいだろうと思ったのである。

いや。土いじりとはちよつと違うけれども。

貴族の荷物もちも貴族が依頼者だけに報酬はいいとは思ったのだが、それはやめておいた。

この世界の貴族は基本的にちゃんと真面目な人が多いわけだが、それでも不正をする輩や悪代官に値する者は当然のことという。

たかだか荷物もちを面倒がる人間となるとなんとなく人柄のイメージがつくので自重した次第である。

「これにするのね？」

ベラッセンさんのお宅は・・・知らないわよね？」

「ええ。もちろん。」

知らない人の家を知っていたら変態だろう。

「地図を描くから待っていて。」

「はい、わかりました。」

そのまま地図を描いてもらうのを待ち、描いてもらってからベラッセンさんのお宅を訪問する。

呼び鈴（この世界では風鈴のようなものが玄関に垂らしてある。それが呼び鈴）を揺らしてベラッセンさんと呼ぶ。

「すみません。」

「はいはい、今出ますよ。」

出てきたのは少々豊かな――ありてい言えば中年らしい中年の体型のおばさんが出てきた。

ふむ、これくらいなら・・・恐怖症は大丈夫みたい。

「響と申します。雑草掃除の町人依頼を受けて来ました。ベラッセンさんのお宅で間違いないですか？」

「あらあら？可愛いお嬢さんが来たのね。はい、間違いありませんよ。えーつと響さん？」

さっそくお願いしても構いませんか？」

「はい。」

可愛いお嬢さんか。男としてはちよつと複雑である。

「あらあら？お嬢さん、分かってるのねえ。」

「はあ？何がでしょうか？」

2人で雑草を抜いてると、唐突に話しかけてきたベラッセンさん。無言で黙々と作業し続けるというのはおばさんと呼べる年の人にとっては辛かったのかもしれない。

すぐ終わる程度ならともかく、日本と違って人口密度が少なく土地も広いどらぶれでは一軒当たりの敷地がかなり広い。庭も相応に広くて一時間はかかりそうである。

「雑草の根元をもってシツカリ根まで抜いているでしょう？」

根っこが残っているとまたすぐに再生してくるから困り者なのよね。」

「そうなんですか？」

「あら？知らなかったの？」

「ええ、まあ。単純に根っこが残っていると邪魔かな、と思ひまして。」

根っこだけ残しておけばそのまま肥料になるかなあと思ったが、それならば後から混ぜ込んでも構わないわけだし。下手に肥料として残すと後からまた雑草が生える原因になりかねないし、家庭菜園をやる場合はそうした根っこが、埋めた植物の根の成長を阻害するかもと思っただけである。

「その調子でお願いね。」

「はい。」

言われずともお金をもらえる以上、手抜きをするつもりは無い。再度沈黙が続き、しばらくひたすら抜いていると。

「そういえば貴方は彼氏とかいるの？」

「ぶふっ！」

つい噴出した。

黙ってられないのはおばさんという生き物の性か。

そして俗に言う恋バナを唐突にいきなりするのは女という生き物の性か。

彼氏なんて居てたまるかって話である。

男なのだからして。

「い、いえ、いません。」

僕は男だ！と叫ぼうとも思ったが、止めといた。信じられないだろうし。

最近買った鏡で自分の姿を見てそう思ったね。

僕の容姿はもう男の欠片も無い。

絶望しました。

僕が男ということをすぐに忘れるフィネアの気持ちも分かるもので

ある。

男性ホルモンにもっと頑張れよっ！熱くなれよっ！と叫んでやりたい。が、そもそもこの姿は自分で設定したものであり、男性ホルモンのせいにするのは少々どころか多大な筋違いであろう。

男性ホルモンだって涙目に違いない。

今更なのだが、仮に死んでこの世界になんらかの原因で来たとしてもだ。

なぜゲームそのままのアバターなのだろうか。

実に不思議かつ、不条理である。

「もったいないわねえ。そんなに可愛いのに。貴方の周りの男の子は女の子を見る目が無いのね。」

「ははは。」

空笑いをするしかない。

見る目が合ってたまるかって話だ。

そもそも男の知り合い自体、学園長やスネークさんとかルークとかいうバカっぽいやつとか、年上しか居ないのだからして。

彼らが僕に欲情したら二重の意味で変態だろう。

BとLの関係で尚且つ見た目14頃の娘に・・・ロリコンである。

男だと言っても「それでも構わん、好きになってしまったこの気持ちは誰にも止められんっ！！」とか言い出したらどうしよう。

と鳥肌の立つおぞましい想像をして身震いをする。

うん、やめよう。

こんな危惧は無意味だろうから。

さすがにそんなことにはならないはずだ。

「じゃあ、好きな子はいないのかしら？」

「い、いませんっ！！」

勘弁してつかあさい。

その後もそうした話を交えて、肉体的というよりは精神的に疲れた一日だった。

18わ こいのめ

今日も今日とて学園に通い、町人依頼をこなし、たまに普通のクエストが出たときにはそれを受けなどと過ごしつつ。
そんな感じの日々が一週間ほど過ぎた頃。

あいも変わらず僕とマノフィカさんはギクシャクしていた。

「おはよう。」

「ひ、ひうつ!?・・・お、おはよう。」

「なんかごめんなさい。」

「あなたが謝ることじゃない。ボーっとしてた私が悪い。こちらこそごめんなさい。」

「いや、こっちがー」

「違う。悪いのは私――」

と、何か変なループに入るようになって来たりもした。

最近、特にこの一週間ばーっとなることが多くなったマノフィカさん。それと同時に僕に対する威嚇的な言動は完全に身を潜め、平和になった。と思いきや。

気軽に声をかけようものなら、驚いて身を跳ね上げる。

その姿は小動物のようで可愛いのだが、こちらとしては申し訳ない気分で一杯になる。

そうなるこちらは謝る。

ところが相手も氣遣い謝る。

そんな必要は無いとさらに謝る。

それこそ必要ないとまたまた謝る。

というデフレスパイラルならぬ謝りスパイラルである。

・・・こほん。語呂が悪いし、デフレスパイラルに当てはめた意味

は特に無いのだが。

「あの・・・」

何か言いたそうに僕に声をかけてくるマノフィカさん。

「何？」

それに答える僕。答えや声の強さが少々愛想にかけるのは恐怖症ゆえ仕方ないことである。

ましてや普通の女性よりもちょっとした因縁がある相手。緊張はひとしおだ。

「いや・・・その・・・なんでもない。」

「そ、そう・・・」

そんな僕にマノフィカさんがシュンとなり、そして僕もシュンとなる。

なんだろうか、この気まずい関係は。

これならば前の方がマシだったとも言える。

もちろんフィネアが

「そ、そんなことじゃだめです!! 私が一肌脱ぎましょう!!」

と言ってまたもや色んな画策をするが、もちろん空回り。

そらそうである。

そもそも人間関係は彼女だって僕にあうまで20年はろくに人と話したことがないのだ。

そんな彼女が人間関係の問題を解決しようとしたところで良い解決策が思い浮かぶはずもなく、動けるはずもなく。

それからまたしばらく経ったある日のこと。

「ひ、昼休み。に、庭に来て欲しい。」

「庭？」

「フ、フレス庭園のテラスに。」

「あ、うん。まあ良いけど。」

背筋をぴんと伸ばし、握りこぶしを作りながら彼女はそんなことを言ってきた。

一体、何の話だろうか？

これが男ならば、と何度思ったことか。

男ならば一発喧嘩した後は謝るなんてことはせず、次の日に軽く話しかければそれで意外と何とかなるものである。

それでもわだかまりが残るなら、殴り合えば良い。

相手を罵倒して、殴って、蹴って。

泣かして、泣かされて、倒し、倒されて。

でもって次の日にはすっかりけろっとしている。

ところがどっこい、彼女は女性。

殴り合ってどうのという性格でもない。

となればであるが、僕にはこのギクシャク感をどうすれば解消できるのか？

何度考えたことか。結果、分からないという結論に至った。

だって、分からないんだもん。

というか、そもそも彼女は仲直りを望んでいるのだろうか？

単純に僕が嫌いだから、という理由でむしろ当たり障り無い反応を見せるようになったのではないのだろうか？

反発するよりも適当に話を合わせて、流す。

そういう風に。

そっちの可能性の方が遥かに高い気もする。

それだけの面倒ごとをしてでも、彼女はフィネアと一緒にいたい。

そう思われてるフィネアたるや何とうらやましいことか。

それくらいの男友達を僕も作れたら良いな。と熱烈に希望しつつ。

それとも庭に呼んで、一回、じっくりゆっくり話をしようってことなのだろうか？

正直、帰りたい。

すっばかして帰りたいものである。

が、そういうわけにも行かないだろう。

少なくとも彼女の方から歩み寄ろうと言う意思がある。

僕だって今の状況が良いというわけではない以上、望むところ。望むところではあるのだが。

如何せん、話し合いならばフィネアによってすでに試された後であり、正直今すぐどうという効果は見込めない。

かといってこのままであり続けるわけにも行かない。

「はあ。」

ついとため息が漏れるがそれもまた、仕方がない。

せめて、彼女がこれ以上僕をきらうことのないように祈りつつ。庭に向かうとしよう。

☆ ☆ ☆

学園の庭は広大である。

フレス庭園と言うのだが、正直広すぎて中々見つけづらい。かれこれ10分は探索してる気がする。

景観を良くするためであろう。

木々がところどころに埋められているゆえの見晴らしの悪さもある。さらに5分ほどかけて漸く、見つけることが出来た。

うなだれている気がするけどどうしたのかな？

「・・・やっぱり来てくれないの？」

とぼやきつつ、ため息をついている。

なにが『やっぱり』なのか。

いまいち分らないが、それはともかく。

「ごめんね。すっごく待たせちゃったみたいで。」

「ひぁひゃいっ!？」

うむ。

良い悲鳴だ。

じゃなくて。

またもや驚かせてしまったみたい。

今度から声をかける前に声をかけるようにしよう。

・・・って、何言ってるんだ？僕は。

「いえ、待ってなかったから・・・」

「すっごい背中から待ってた感じを感じたけど。」

本当にごめんね。」

敢えて言い訳はすまい。

男たるもの。言い訳などかっこ悪い。

「ううん、別に。」

具体的な位置を言ってなかった私が悪い。」

「そう言って貰えると助かるよ。」

それで・・・あの。今日はなんの用事で呼び出したの？」

向かいの椅子に座りながら話をする。

「えと・・・その・・・あの・・・」

顔を赤らめて、両手を膝の上に乗せてもじもじとするマノフィカさん。

何？この可愛いの。

というか、キャラが違わない？

単純に照れてるだけ？

恥ずかしがってるだけ？

「えと・・・何？」

「ひうつ！」

あ、そのっ!!」

少し無愛想だったろうか？

流れが良く読めずに、つつい声がぶっきらぼうになってしまった。それを聞いて僕が怒っていると思ったのだろうか？

びくりとして口をパクパクさせる。

しかし、焦れば焦るほど言葉が出てこないようなマノフィカさん。

そして俯く。

ちよつと涙目である。

えと・・・僕が苛めてるみたいな構図になってない？これ？

とりあえず、のんびりと落ち着くのを待ってみますか。

特別早くに聞き出さないとダメというわけでもない。

・・・。
・・・。

・
・
・
・
・
・
・
・

「・・・。」

ふむ。

まだだろうか？

20分ほど待ってみたのだが。

一向に「あの、えと・・・それで・・・なので・・・」と何事かをボソボソと言い、こちらをチラツと見て、すぐに「うー」と唸って、
「もう、うん。」

「えと・・・何か・・・喋ったんだよね？僕に、話しかけたんだよね？」

「う、うん。」

「それで返事を待ってたり・・・するのかな？」

「う、うん。」

「や、やっぱり私から・・・はその・・・だよな？」

うむ。

後半になると全く聞こえなくなった。

本人を目の前にしてでも悪口をはっきりと言うあのサバサバ感はどこにいったのだろうか？

ちなみにサバとは魚のサバではないことを一応言っておこう。

「悪いんだけど・・・さっきから接続詞の部分しか聞こえないんだよ。」

もう少し大きな声で言っただけかな。」

「ひうっ！」

そ、そうなのっ!？」

「うん、まあ。」

「もっと早く言っただけ良かった。」

「なんかごめんなさい。」

「その・・・キングオークとの戦いとき。」

「うん。」

「私は、貴方に助けてもらった。」

「ええと・・・まあ、助けたね。」

今更そんな話を掘り返して、何が言いたいのだろうか？
あれから半月以上は経ってるのに。

「そのお礼。」

だから、あの・・・お弁当・・・なんだけど。」

「ええと・・・お弁当を作ってきたからお礼としてあげるってこと？」

「そ、そうなる。」

終始俯いてボソボソ喋るから聞き取りづらいことこの上ないのだが、
なんとか意思疎通が出来た。

ええと？

お礼？今更？

すっごい今更感が強くて、なんか貰うには悪い気しなかったりする。

「そ、そう？

でも、別に良いよ？

僕のこと嫌いなんでしょ？

恩を感じたからって、わざわざ嫌いな相手にまで恩を返そうとするのは律儀で結構。

でも、僕としては勝手なこととして・・・むしろ申し訳ない感じがあったし。」

きっと彼女の家訓に受けた恩は親の仇だとしても返せ。

みたいな物があるのだろう。

でなければわざわざ僕にこうして恩を返す理由が無い。

というか、今更すぎですよ？

きつと半月以上かけて家訓と僕への嫌悪感がぶつかり合って、葛藤の元ようやく恩を返すという選択肢をとったのだろう。
そこまで嫌なら別にどうとでも。

「そ、それは違うっ！！」

「うわっ！？」

というと、身を乗り出してくるマノフィカさん。顔がすごい近い。

どうでも良いけど、甘い匂いがする。

くんかくんか。

いやごめんなさい。冗談です。

そして、すごい泣きそうになってる。

「わ、私は・・・こんな私を命を懸けて守ってくれる人なんて今までいなかった・・・だからすごく嬉しかった。い、今は嫌じゃないっ！」

「そ、そう？」

すっごい迫力でまくし立てるマノフィカさん。

そういや、去り際にそんなこと言ってましたもんね。

それよりも顔が近い、息を吹きかけるな、気持ちが良いんだよ！

じゃなかった！

ドキドキするんだよっ！！

でもなかった。

緊張で頭がおかしくなってるみたいである。とにかく離れてもらえないかな。

微妙に恐怖症も発動してるし。

鳥肌が。

「その・・・今まで礼をいえなかったのは・・・その・・・今までが今まででなだけにイキナリ手の平を返すのも恥ずかしくて・・・それで・・・でも、フィニアからそんなことを気にする人じゃないって聞いたから・・・思い切って・・・その。」

「そ、そういうこと？」

別に気にしなくても良かったのに。」

別に僕が優しいとかじゃなくて。

そもそも半月も経ってたら誰だって気にしなくなるだろう。

「命の恩人にお弁当なんて安いものだとは思うけど・・・ごめんなさい。」

お金に余裕が無い私にとってはコレが精一杯で・・・その。望むなら体でも・・・その、自分で言うのもなんだけど・・・肉つきは良いほうだから・・・」

なんだろうか？

売春が流行ってるの？この世界。

というか望まないよ!!

倫理的にどうのという前に、そんな行為をすれば今の僕にはとてもじゃないが耐えられまい。

ストレスで胃がブレイク!

意識もマッハで闇の底に沈むだろう。

難儀な体質になってしまったものである。

「いや、そんなもん要らないよ、安心して。」

「・・・やっぱり女の子?」

「違うっての。」

色々あって、僕はで男でありながら女の子不振という・・・精神的な病を抱えているのだよ。」

「・・・ホモせくしゃる?」

「それも違います。」

とにかく、お弁当?

せっかくだし、貰うよ。」

「そ、そう。」

そういうと彼女はライブ러리からお弁当箱をとりだした。

そして僕に渡す。

ピンクの風呂敷に包まれ、それを解くと猫を模った弁当箱が出てくる。

い、意外と少女趣味なのかな?

彼女の方を見ると彼女の方はハムスターを模ったものである。

ふと『とつとこハム太郎』を思い出した。

別に理由は無い。

というか、ハムスターって年老いると同時に癌になりやすくなって痛々しくなるということから個人的には見てる分には良くて、飼いたくないベスト3に入る生き物である。

などと余談はこれくらいに。

弁当箱は二段式になっており、下がご飯。上がおかずとなっているようである。

おかずはから揚げ、ハンバーグ、ウィンナーのベーコン巻き、ダイコンのサラダ、ホウレンソウのバター和えに、うさたんリンゴもといウサギを模ったリンゴが一切れ。リンゴの下に敷いてある紙製の器にはリンゴの果汁以上の水分が溜まってるが、これはリンゴの酸化を緩和するための塩水だろう。

細かいところでちょっとした手間が見て取れるところが高ポイントである。

もちろんこの世界に冷凍食品などという便利なものは無く。全てが朝起きた後の手作りであろうことがうかがえる。

なんていうか、男性のハートを驚づかみにするような弁当といえるかもしれない。

「ど、どう？」

「くす。まだ食べてないよ。」

「そ、そう。」

よっぽど気になってるのか、まだ食べてもいないのに感想を聞いてくる。

彼女は緊張してるのだろうか？

まあ自分の作った料理を誰かに食べてもらうのは緊張するよね。

などと弁当を見ながら何事かを考える、というのはそれくらいにしておき。

とりあえずから揚げから食べていこうかな？

「あむ。むぐむぐ。ほほう。これは！

隠し味になにかを使っているな！

隠し味だけに全く分からないけど!」

え、なんで全く分からないのに隠し味に何かを使ってるかがわかるのって？

気分で言ってみただけです。

べ、別に良いじゃん!

言ってみたかったんだから。

「・・・気づかれるなんて思わなかった。
ちよつとびっくり。」

彼女はあいも変わらず顔を少し朱に染めたまま。

そんなことを言った。

あれ？

まじで？

適当に言ったただけだよ？

僕に分かるのは単にこれが美味しいものであるということだけである。

「その・・・どう？」

味は・・・美味しい？」

「もちろん。ほら、自分でも食べてみなよ。」

といって、箸で持ってからあげを差し出す。

彼女の弁当箱にも入ってるんでは、というツツコミは無しで。

このときの僕はなんだかんだで始めての手作り弁当ということで緊張していたのである。

前世の・・・その。マキは弁当が作れないタイプだったので。
基本僕が食事を作っていた。

「・・・ふえっ!？」

「・・・どうしたの？」

つい息が漏れたって感じの悲鳴をあげるマノフィカさん。

「べ、別に・・・」

「ほら、あーんって。」

「えう、あう・・・」

「何？」

ワシのメシが食えないんかっ!？」

飲んだくれ親父のようなことを叫びつつ。

いささか強引に口から揚げを突っ込んだ。

「ひむぐっ!？」

「どう？」

美味しいでしょ？」

よくよく考えてみると、味見くらいしてたよね？
口に合うか不安ってことを言いたかったのかな？
まあ、いいや。と思いつつ。

「・・・美味しい。その・・・いつもよりもずっと美味しく感じる。」

「・・・自画自賛？」

なんか良く分からないけど、ぽーっとなってるマノフィカさん。
そんな感じでお弁当を食べ進めていく。時々雑談も交えながら。
食べ終わると、弁当箱を洗って返そうとしたのだが、別に大丈夫と

言われたのでそのまま返した。

「ごちそうさまでした。

美味しかったよ。それじゃあね？」

「う、うん。お粗末さまでした。ま、またね。」

終始俯き加減だった彼女と別れの挨拶を済ませる。

『またね』と言われた。

なんだか良く分からないがすごく仲良く慣れたようでよかったのかもしれない。

いや、その。

願わくば彼女が男であれば尚のこと良かったのだが。

19 わ ちょうこう

私は彼に助けられてからというもの。
最初はただただ悔しかった。

自分があつという間にやられた相手。

キングオーク。

あれを相手に見事に立ち回る姿はカッコいいの一言に尽きる。

キングオークの一撃でも掠ればそれだけで腕の1、2本は持ってかれ、当たれば確実に致命傷。

そんな敵を相手に勇猛果敢に攻めていく、目の前の女の子のような姿をした彼。

響。

そういう名前だったはずだ。

始めは嫌いだった。

なぜなら彼は私を軽蔑するような目で見てきたからだ。

彼の目にはハッキリと私を見下す旨の視線を感じた。

まるで汚物を見るかのように。

それからしばらくして友人となったフィネアが言う。

『それは彼の過去に秘密がある』と。

彼は私という存在ではなく。

女性というものを嫌悪しているという。

ならばなぜ、フィネアと一緒に居られるんだ？と言うと。

「家族ですから。」

という答えが返ってきた。

私にとって少しまぶしく感じた答えだった。

上位親族。

私の種族は現在、絶滅の危機に瀕している。

20年前の戦争で能力の高かった私の種族は最前線に出され、その殆どが生きて帰ってこなかった。

そしてその事に関して族長が国に直談判をし、しかしそれは無常にも跳ね除けられた。

結果、一族の殆どが国を離脱。

しかし、戦闘能力の高い上位親族が他の国の味方をされると困ると判断した国はあろうことか私たちを殺しにかかった。

結果。

色々と悶着はあれど私たちの種族はそのままこの国にいることとなったと聞いている。

しかしその頃には人数は100を切っており、今では本当に少ない種族として国に保護されるレベルとまでなってしまった。

そしてそれはその後生まれる私たちに多大な影響を与えることとなった。

極端な話。

女性の性奴隷化、いや「繁殖機化」と呼んだ方が正しい。そのまま字面の通りでは無いのだが、それに近いことが行われるようになったのだ。

子供を産む女性には意志を認められず、ただ変わりばんこに色々な男に子を孕まされるという文化がここ数年で出来たのである。

もちろんそこに無理やり、複数でなどという部分は無い。

無いには無いが、実際は変わりないともいえる。

もっと表現をマイルドにするならば。

夫が子供を産み落とすたびに変わるということである。

そんな里に嫌気が差した私は母に習った護身術と刀、銃を持って里を出た。

もちろん他の女の子達も一緒に逃げ出したのが、一部は連れ戻され、

一部ははぐれ。

一部は魔物の腹の中へ。

洗脳するように毎日毎日言い続ける男達。

私は認めたくなかった。

私の価値が。

私の生きてる意味が。

ただ子供を産みつづけるだけなんて。

だから里を出た。

違法奴隷商人に捕まりそうになったり、魔物に食べられそうになったりしながら苦勞してこの学校に来て。

苦勞して色々なことを覚えた。

それもどれも全て。

私の価値を上げるため。

そしていずれは出来る惚れた男性に振り向いてもらうためだ。体だけではなく、内面も合わせて好きになってもらうように。

気高く。

強く。

美しく。

可愛らしく。

そうあるつもりだった。

なのに、それを全て叩き壊された。

私には何も残ってない。

もう何の価値も無い。

死んでしまえば子供を作る。その価値すら見出せない、ただの肉塊と化す。

何が悪かったのだろうか？

私は死に際に考えた。

私は自分の価値を上げたかっただけ。

自分の生きる意味をもっと強いものにしたかっただけ。

私が誰かに迷惑をかけた？

迷惑をかけて誰かを泣かせた？

誰かの幸せを奪った？

何もしてない。

私は何もしてないのに。

殺されそうになってる私。

そんな私を助けた彼。

本当に分からなかった。

どうして私なんかを助けたのか。

もう死ぬ手前の。

なんの価値も無い私に。

必要とされない私に。

心の底から嬉しかった。

助けるⅡ私を必要としてくれている

そういうことだから。

でも、誰が？

そう助けてくれた人を見ると、信じられない人が居た。

誰よりも信じられない。

そう。

彼だった。

私を軽蔑していたはずの彼。

響だった。

☆ ☆ ☆

私は助けられた日。
考えた。

どうしたら良いんだろう。

彼と何を話してどんなことを言えばいいんだろう。と。

彼の瞳からは完全に軽蔑の色が消え、むしろ慈しむような色が見て取れた。

まあそんなことは良い。

なぜ軽蔑の色が消えたかどうでも良い。

ただ私は彼には礼を言っていない。

なぜ言わなかったのだろうか？

こんなにも助かったと。礼の気持ちを抱いているというのに。

なぜか礼を言い損ねた。

今までが今までだけに言いづらかった。というのはもちろんある。

あるにはあるが。

それだけではない。

というよりもそういった理由は少ししか無い気がする。

「ふむふむ。とりあえず、お礼はいつでも言いますよ？

別に響はどっかに逃げないんですし。」

「うん。分かってー」

そうか。

そういうことか。

フィネアに相談して分かった。

きっとお礼を言ったら、それで完結してしまう。

彼とのつながりがそれで切れてしまう。

そんな気持ちがあったからだ。

なんにせよ、どっかに逃げないと分かった以上。
出来るだけ早くに礼をするでしょう。

何が良いだろうか？

一種間ほど迷った末。

結局手作りのお弁当にすることにした。

母さんが男性はそういうものを一番喜ぶ。と言っていたし。

☆ ☆ ☆

上手くいった。

上手くいった。上手くいった。

喜んでくれた。

彼はニコニコとしてくれた。

なんだろうか。

彼が喜んでくれるとなぜかこっちも嬉しくなる。

何はともあれ。また作ろう。

明日も。明後日も。そのまた明日も明後日も。

目の前には彼の使った箸と弁当箱。

私は彼の”使った”箸をぺろぺろと舐めながらそんなことを思っていた。

20わ はじめての いえいらい

マノフィカさんと仲直りして、数日が経つ。

そろそろお店の宣伝を真面目にやろうと言うことで、計画を実行に移すときが来たようである。

計画？

そう疑問視する声もあるだろうが、実は着々とお店を繁盛させる作戦を決行していたのである。

その前準備が終わり、今日、漸く実行に移しても問題ないと思えたわけだ。

「レトお姉ちゃん。」

「あら？」

おはよう。響ちゃん。

今日は何の御用？

町人依頼？それとも冒険依頼？

はたまた私に会いにきてくれたとか？

それだったら私も嬉しいな・・・どれくらいかと言うと、今すぐ仕事を放り投げて抱きしめたいくらい。」

「遠慮しておきます。というか、普通に意識が飛ぶので止めてください。そもそも仕事しろ。」

「ふふふ、照れちゃって。」

「照れ要素は欠片もない、と断言はしておきます。無駄でしょうけど。」

「それでご用件は何かしら？」

「す、スルー・・・まあいいですけど。」

お店の広告？それをギルドに張らして欲しいです。」

「広告？」

「おたからや」が繁盛するためにはどうすれば良いか？

そう考えて今やっている作戦は学園に入り、有望そうな子にツバを付けて置く。

現状、これだけである。

もちろんこれだけでは即時的な利益には繋がらないので、他の作戦もある。

現在はお店が良い悪いの前にそもそも殆どの冒険者に知られていない。

数年。下手をすれば10年以上はまともに機能してなかった店なので、もちろん人は殆ど来ない。この街の人々にとって無いも同然のお店なのだ。

よそものがこの町に寄った際、観光がてらパツと見つけて、気まぐれに入る。

その程度である。

が、それではもちろんのこと生活など出来るはずも無く。

そういう段階であるからして、お客さんは当然のごとく非常に少ない。

良い顧客をゲットする。とか、良い物を仕入れる。とか言う前に。

まず知られないとダメだということ。

広告。

すなわちポスターを依頼屋に貼らせてもらえないだろうか？と今日は懇願しに来たのである。

さらに言えば、甚だ不本意ではあるのだが依頼屋でマスコットの立ち位置として可愛がられるようになった僕のお店と知れば。

気の良い、依頼屋でたむろってるこの人達はきつと来てくれるに違いない。

一度来てくれればこちらのもの。

そろえてるのは良質かつ安価という昨今の日本市場に求められる物ばかり。

そしてターゲットは冒険者で、冒険者の需要に合わせた品揃え。売れないわけが無い。

評価が良ければ口コミでさらなる繁盛も期待できるという広告一枚で良いこと尽くめなのである。

悪い場合も口コミで広がり、広告効果が出るどころかむしろマイナスになりかねないというデメリットはあるものの、それはまず無いと考えている。

そのためにきっちりとしたお店づくりをしてきたのだ。問題は無いはず。

「なるほどね・・・別に良いわよ？」

ただそうした宣伝をするには町の職員による視察が必要なんだけど。視察完了書はあるかしら？」

「はい、これです。」

「ふむ。確かに。」

ちなみにこの視察にはあの「ブヒ」が語尾でキャラ作りをしているという貴族さんが来た。

つい失笑してしまったのは良い思い出である。

「もう広告は仕上がってるの？」

「出来てます。」

「これね？」

二階の酒場に張っておくわ。」

「お願いします。」

「さて、それで用件は終わり？」

私とおしゃべりするってだけでも良いのよ?。」

おしゃべりと言いつつも手をワキワキさせながら迫ってくるレトお姉ちゃんから後ずさる。

ひい、怖い。

せ、せっかく来たんだし、冒険依頼でも町人依頼でも良いから受けておこうか。

「ええと、何か手ごろな依頼は無いですか？」

「んもう。いけず。」

「あの・・・」

「はいはい、お姉ちゃん寂しいなあ・・・ええと、これあたりが良んじゃないかしら？」

「これは商人の護衛？」

でも僕には護衛技術はもちろん、あまり遠出するのも・・・」

「いいからいいから。内容を良く読んでみて。」

「よ、読めないよ。」

「そ、そうだったわね。」

依頼書を差し出されるが、僕には商人の護衛っぽい。としか内容を理解できない。

フィネアから文字をチョコチョコ習ってはいるのだけでも、なかなか難しいのである。

『ほんやくか』の称号による翻訳は言葉のみ。いつそのこと文字まで翻訳できれば良いのに。

まあ言葉のみでも凄いことには変わりないけれど。などと他愛の無いことを考えつつ。

「内容はラクーン商会がここから西の街。アルトネリきかいじゅがい機械樹街に物を仕入れに行く際の商人の護衛。盗賊や、食材の匂いに惹かれた魔物の相手が主になると思うわ。」

「盗賊か・・・レトお姉ちゃん、僕はちょっと人殺しは・・・」

まだ早いかなと思わないでもない。

重ねて言うが、僕は平和な国、日本で育った生粋の日本人なのだからして。

逃げるな？

バカを言うな。

こ、これは戦略的撤退なんだからね！

・・・こほん。

冗談はともかくとしても、別に仕事を選ぶくらいは問題ない状況なのだ。

やむをえないのならばともかく。

わざわざ精神的に忌避したい仕事を選ぶほど追い詰められてるわけではない。

「安心して。」

私の響ちゃんにそんな辛い役目を負わせるはず無いじゃないの・・・
と言いたところなんだけど。

だからこそ、そういう甘さを今のうちに消しておきたいのよ。」

「別に甘いとか・・・」

「いざ、盗賊に襲われたりしたとき、その相手を殺せる？

殺さないようにと手加減できる相手なら良いけど、ギリギリ殺すか殺されるかの戦いやむをえないほどの相手だったら？

いえ、仮に殺さないでも、その相手が報復に来たら？

思いがけない反撃に遭ったら？

「・・・。何がしたいのさ。」

「この依頼は複数依頼。複数人に任されるものよ。」

“まだ” 貴方の手で殺せとは言わないけど、人の死に様を見ておきなさい。少しでも死に慣れて置いた方が貴方のためにもなるわ。」

「・・・別に今すぐ見る必要は・・・」

「あるわよ。」

むむう。

「残念なことに治安が良いといってもそれには限りがあるわ。

ここ依頼屋でも冒険者同士の小競合いで死人が出た事だってあるし、治安が一番良いといわれるこの街、『どらごにあ』でも強盗や殺人被害だって無いわけじゃない。

特に貴方の家は掘り出し物屋。

広告だって張って、宣伝するのでしょうか？

強盗に入られる可能性だって跳ね上がる。

強盗を殺さないように加減して、もしくは殺すことを恐れて実力を発揮できずに殺されるって言うのも珍しい話ではないのよ？

貴方が普通の人よりもステータスが高いということは分かっているけど。

その精神的な甘さは致命的な弱点にもなりえる。

ひいてはフィネアちゃんの危険を振り払うことにも繋がるの。自衛の手段として学園に通ってるようだけど、守りだけじゃ守れないものもある。

フィネアちゃんにそこまで求めるのは酷でしょう。というか、貴方はなんだかんだで優しいから、どうせなら自分でやるって言うでしょ？というかそのつもりでしょう？

これでも必要ないっていえる？」

「うぐ・・・」

「いざというときに後悔しないように、そうした部分は早めに対応しておくべきよ。」

確かに。確かに前々から考えていたことではある。だが、しかし。

いざとなると躊躇するのは人の性だろう。多分。

僕以外にもそれは大勢いるはずだ。

別に僕の道徳心が特別高いというわけじゃない。

人の命は尊いとか、地球よりも重いとか。

そんな子供のお遊戯みたいなことなんぞ、さらさら思っちゃ居ない。

単に一步を踏み込めないだけなのである。

例えるならば、納豆をかき混ぜてる最中に「あと何回、回そうか。

あと一回転、いや、いつそのこと10回くらい？」みたいな心理状態・・・と言っても分かりづらいだろう。

もっと簡単に身近なもので言えば、レンタルビデオ店でえっちなビデオを借りる際に18禁コーナーに始めて入るときの葛藤常態。

と言えど割と分かってもらえないのではないのだろうか？

いや、僕は借りたことないけどさ。

ほ、本当だぞ！！

本当なんだからな！！

だ、だって紳士だし！

そんな俗世にまみれたことはしないのである！！

閑話休題。

ともかく。

ごちゃごちゃ何かを考えるのはこれくらいにして。言っていることは至極正論。

ここで人死にに慣れるというのもまた一興であり、必要なことなんだろう。

断る理由は精神的に嫌だと言うだけであり、正直弱い。

店の評価を良くする事ばかり考えていたが、こうなってはラクーン商會に都合してもらうことも考えないといけないのかもしれない。

僕がいるときならばともかく、居ないときの防犯を考えないといけない。

警戒心が強く、ちょっとした足音でも感知するというフォアウルフでも飼おうか？

フォアウルフはそうした習性から人工的に飼育され防犯用にと大きなお店や貴族の屋敷では必ず一匹はいるとされるモンスターである。

「・・・受けます。」

「そう。」

「・・・帰ってきたらナデナデしてあげるから頑張ってね。」

「・・・余計、やる気が。」

「これが噂に聞く草食系男子か。」

「そ、草食系とは違うと思いますけど・・・」

単純に恐怖症なだけだし。

性欲なんかは変わらずあるんでむしろ辛かったりする。

だが、僕がそれを解消しようと思ったら軽く死ぬ覚悟をしなければならなので（比喻にあらず）中々に難しい問題である。うむ。

まあもともと強いほうではないから、問題ないと言えば問題ないんだけどね。

それよりも前世でもろくに満たされなかった・・・いや。

むしろより深くなった愛欲の方が深刻である。

恐怖症も相まってまず満たされることが無いというのが、それを加速させているのだからして。

またもや思考が脱線したね。

「響ちゃんて丁度、依頼受託人数を満たしたから二階の酒場で待つと良いわ。」

あ、それと出来るだけ銃器は使わないほうが良いわよ。」

「ん？」

どうして？」

「それ、普通は誰も使っていないのよ？」

「は？」

「古代具だもの。」

「へ？」

古代具。

どらぶれでは遺跡などで出てきたユニークアイテム。

もとい「すでに失われた技術によって作られた神器」という設定である。

もちろんどらぶれでは銃器と言うカテゴリの武器は簡単に手に入るの、だが。

「それだけで付けねられる理由になりかねないわよ？」

「・・・自重します。」

なるほど。

どうりで弾薬がどこにも売ってないわけか。

まだまだ沢山あるからいいけど。

もし切れたらどうしよう。

「・・・まあいいか。そのときに考えよう。」

それじゃ、二階で待ってれば良いの？」

「ええ、そうよ。」

説明役としてラクーン商会のスタッフさんが居ると思うから。」

「了解。」

壊れた対物狙撃銃も直せそうに無い。
アンチマテリアルライフ

どうりで鍛冶屋に行っても「知らんがな」の一点張りで目も向けられなかったわけか。

くそう。

鍛冶スキル（銃）を持っていれば。

ちなみに鍛冶スキルは武器ごとに分かれてる。
なぜかって？

当然じゃない。

普通に剣と斧じゃ作り方が違うでしょ。

☆ ☆ ☆

さっそく二階に上がってみたのだが。

それっぽい人は誰もいない。

それどころか、カウンター以外は誰も居ない。
なにこれ？

いじめ？

いじめいくないよ。

いじめは！

ていうか、レトお姉ちゃんに物申す！！

まだ朝早いから人がいないというのは良しとしても、
ラクーン商会のスタッフさんはいなくちゃダメだろう！！

「ん？ってわっ！？」

ふと後ろから誰かが斬りかかってきた。

が、ふふ。

暗殺タイプの僕に暗殺が通用するんでも？

暗殺をする以上、そのまた逆に暗殺される際の手際なんかは全て理
解してる僕にそのような手は食わん！！

いや、めっちゃくちや通用するんですけどね！！

だからこそこういうのはやめて欲しい。

すんでのところで気づけたのは気配察知（弱）があったからである。

瞬時に背負っていた斧を抜き、それで受ける。

ギンッ!!と火花が散り、金属と金属がぶつかり合う際の擦過音が鳴り響く。

間を空けずに腰に下げているペレッタを引き抜き、相手に構え銃口を向け、撃つ。

やばっ!

条件反射的に撃ちちった!?

避けておくんなましっ!

と思いつつ。

あ、でもここで殺しの経験をしておけば護衛する必要性がなくなるかな・・・とかも思っていたりして。

いつぞやに考えたことがそのまま再現されたね。

ノリで殺してしまうとは。

正当防衛だし、罪悪感は薄い。問題も無い。

ということをお願い。

「とっ!?!」

「えっ!?!」

この近距離で避けるとは!?!

こやつ、出来る!?!

とかふざけてる場合じゃないな。

瞬時に飛び去り、距離を取る。

「いきなり何のつもり?」

銃を避けたことからそれなりに強いと見て、油断せず気を張り詰める。

斧を収めて、使い慣れた武器であるペレッタを二挺、装備した。

自重するといった矢先に銃器の出番とは。

・・・仕方ないよね。

どうせもう使っちゃったし。隠す意味はなくなってしまった。

「いえいえ、すみません。」

職員から噂はかねがね。

とはいえ、いささか信用しづらかったので試させていただきました。

」

「・・・で、誰？」

「察しが悪いようですね？」

アホ言え。

得体の知れない人間にぺらぺらと何かを喋るわけあるまい。

おそらくはラクーン商会のスタッフが僕の実力を――みたいな話だろうが、ここでラクーン商会の人ですか？とわざわざ確認を取って成りすまされたらどうする？

いや、そんなこととして現状で誰が得をする？という話になるが。

と、戦闘モードのせいとか我ながらしくない思考してるがそれを抜いてもイキナリ斬りかかってくる人間と悠長におしゃべりしたいと思う人間はいないだろう。察してなんかやらないもんね。せいぜい説明口調で説明をしてくりゃれ。

その不機嫌さを見て取ったのか。

「これは失礼。」

ほら、このナイフも刃を潰してありますし。

問題は無かったと思いますよ？」

「だまりゃあ。」

「手厳しいことで。」

まあ何はともあれ、貴女は合格です。」

「・・・ふうん。」

「察しの通り、私はラクーン商会の仕入れ部部长。
トクナガと申します。」

「特技は不意打ち。審美眼。鑑定眼。と、人の良し悪しの見分けです。」

察しの通りって・・・食えないやつである。

白いワイシャツにダボツとした黄色い作業着っぽいものを着た狐目
短髪青髪男。

トクナガと言うらしい。

なんか好きになれそうに無い雰囲気醸し出す男である。

「貴女で合計4人となるわけですが、貴女を除いて説明は終わります。」

ので、これから貴女に細かい詳細を説明するわけですが、お時間は
よろしいですか？」

「よろしくなければ来ないでしょうが。」

「・・・全く。嫌われてしまったようで。」

「好かれる要素があると思ってることに驚きだわ。」

「そうでしょうか・
ほら？」

私の目など愛らしくはありませんか？」

「ずるがしこそうな印象しか与えないな。少なくとも僕にとっては。」

「

「・・・残念ながらよく言われます。」

「さいですか。」

その後、説明を受け、準備をした後。

明日の朝に出立することを聞き、準備を終えて寝る僕だった。

不意打ちで実力を試したのは盗賊や魔物はこちらの都合を考えない
タイミングで襲ってくるから、不意打ちに対する最低限の対応が出
来るかを見たかったとのこと。

すなわち自衛が出来るか？である。

自身の身を守ることすら出来ぬ輩に護衛の任をするのは荷が重いと
いうことだ。

21わ はじめて の ごえいいらい2 (前書き)

ワードに書き上げてからそれをそのままコピペで投稿してるのですが、なぜかワードのほうでは20話目なのに21わという。

なぜずれてるの? と思いつつ、投稿。

現在、マノフィカさんのデザインを色々描いてるのですが、いまいち決まらん。こうーくつくる可愛さが出ないんですね。うん。

21 わ はじめて の ごえいらい2

次の日。

僕は予定通り、依頼屋の二階で待ち合わせをする。ここで今回、一緒に護衛以来を受ける人たち同士の顔合わせをするとのこと。トクナガさんはすでに居て、優雅に紅茶を飲んでいた。

いや、優雅では無いな。

「おはようございます。」

「おはよう。他の三人は？」

「もうすぐ来ますよ。」

と話をすれば影。

ぞろぞろとやってきた。

「お、おはよう。えと・・・ひ、・・・ひび、き。」

1人はマノフィカさんだった。

少し驚いたけど、まあちらほら見かけてたのは確かだし、ここに居ても変ではない。

学園はあくまでも望む人間に望む技術を教えるためのものだし。

学園の生徒でも僕のように普通に依頼を受ける人間はいる。

マノフィカさんもその1人だと言うことだろう。

そして、何気に名前と呼ばれたのは始めてだったりする。

「おはよう。」

えと・・・そのポニーテール。似合ってるよ。」

「あ、ありがと。・・・変じゃなくて良かった。」

「ん？」

「な、なんでもない。」

マノフィカさんはストレートの髪をリボンでまとめてポニーテールにしている。

仲直りした際の心機一転か。ただのおめかしか。それとも単に気分か。

とりあえず誉めておく。

女の子がいつもと違うおしゃれをしたならとりあえず誉める。

そんな感じのことを聞いたことがあるし。

誉められて照れたのか、少し顔が赤い。

「おう、嬢ちゃん達が今回の同伴者か。

よろしく頼むぜ。」

その後に来たのは40くらいのおっさん。

渋い短髪で髭のおっさんで、体格がガッチリしている。いかにも冒険してます！って感じの人である。武器は大剣だろう。

背中に成人男性1人分ほどの幅と長さを持つ大剣を抱えているため、なおのこと冒険者っぽい。

そして何気に人族を見るのはこの世界に来て二度目だ。

意外と普通の人間は少ないのかな・・・とか思ったけど、比較的貧弱な人間は冒険者に向かないということとで僕の行動範囲内では見ない。というだけなのかも。ということを考えつつ。

よろしく願います。と返しておく。

「ああ、よろしくな。俺はテンガってんだ。」

「僕は響です。」

「マノフィカ。」

「友達なのか？お前ら？」

「えと・・・ええっと・・・」

友達って言って良いのだろうか？

こう聞かれると困るよね。

相手もそう思ってくれてるのか、自信が無い。

「べ、別にそういうわけじゃない。」

とマノフィカさん。

あ、やっぱりですか。

多少予想は出来てはいたけど、直接言われるところ。。。なんて言うのか。

心が痛いです。

「友達と言うのは名前で呼び合う仲だと母さんから聞いた。

だから響とは友達じゃない。」

「・・・？」

呼んでると思うけど？」

「マノフィカさん。。。じゃ、壁を感じる。だから友達じゃない。」

「さ、さいですか。」

なるほど。呼び捨てで呼び合うくらいじゃないと友達ではない。ってことか。

うん、まあ確かに。それは知人って感じがする。

高校とか中学ではさん付けで呼び合うヤツは見なかったな。

中にはそういう人もいるけれど、なんとなく堅いイメージがあるのは仕方ない。

英語なら、毎回毎回ミスターやミスを付けて呼ぶようなものだし。

「だから友達じゃない。」

「うん、そうだね。納得したよ。」

「と、友達じゃない。」

「――？うん。」

なんか泣きそうな目でこちらを見てくるマノフィカさん。

え、なんで？

むしろ友達じゃない発言されてちょっと泣きそうなのは僕のほうだ
と思うんだ。

いや、泣かないけど。

友達を増やすのなら、やっぱり男が良い。
と強がってみた。

「ぎゃ、逆に言えば呼び捨てで呼び合うようになれば友達。」

「え、うん。そうなるね？」

あれ？

なんでこんなしつこいくらいに解説されてるの？

あれか？

僕ってそんなにアホっぽく見えるか？

フィネアと暮らしてるから？

フィネアから周囲の人がアホっぽく見えるウィルスのな物が出てい
るのかもしれない。フィネア菌恐るべし。

そのままマノフィカさんはそっぽを向く。

いじけてしまったようだ。

ううむ。話の流れ的には呼び捨てで呼んで欲しい……のかな？
でも、友達じゃないと言われた直後だし。

友達になりたいならそのまま友達だと言い張っても良いような？

「マノフィカさん？」

「・・・うー。」

うむ、分かん。

呼び捨てで呼んでみようかとも思ったけど、もし僕の勘違いだったらと思うと。

そして、「呼び捨てで呼んで良いなんて一言も言っていないんだけど、きもーい」と言われたらどうしよう。

きつと恐怖症が悪化するに違いない。

うん。放っておこう。

機嫌ならそのうち直るし、特別直す必要も無い。

もともと嫌われてたしね。これが噂に聞く乙女心というやつなのかも。

二度も浮気をされた僕には一生分かりそうにないが。というかそれを分かってなかったから僕は浮気をされたのかもしれない。

実は肉欲だなんだというのは建前で乙女心の理解できない男に愛想を尽かした結果ーいや、よそう。

もう過ぎたことを考えるのは良くない。

それに恐怖症は治しても、これから先女性と共になる機会は無いのだから乙女心を分かる必要は無し。

少なくとも一晩経てば機嫌は直るだろう。

「ガハハハ。面白い嬢ちゃんたちだな。んま、仲良くな。一応言うておくが、護衛中に私情を持ち込むなよ？」

「？」

分かってますよ。」

「・・・ヒゲうるさい。」

「ま、マノフィカさんっ!？」

「グハハハ！」

言うねえ。まあ構わん。若い頃は俺もそんなもんだったしな。分かっているなら良いんだ。要らんお節介だったな。」

マノフィカさんの無礼発言も笑って許す。

テナガさんは見た目どおり中身も渋いオッサン——オジサマのようである。

「オメエはどうなんだ？

少年。」

「はひっ!？」

テナガさんは後ろを振り返る。

いつの間にか最後の1人も来ていた様だ。

獣耳があり、髪は赤。全体的にだらしなくボサボサと伸ばした髪の毛の隙間から鋭い眼光が覗く。

目も赤い。服装は俗に言うレザーアーマーとかそんな感じの物に鉄を加えて加工した防具レザーアイアン一式のようだ。

獣耳があることから獣人族のようである。

何気ない仕草と、盾と一般的な鉄のブロードソードという装備を見るに、特別強いと言うわけでもないが弱いと言うほどでも無いみたいである。

ただ、目つきに反して何やら挙動不審気味なのが不安要素である。さつきから居たようだが、話の邪魔にならないようにと隅っこに寄っていたことと良い、テナガさんに話しかけられて、リアクションが激しいところと良い。

「だ、大丈夫です。」

声のイントネーション的にも——かなり気が弱いようだ。

本当、目つきだけは不良もたじろぐ感じの雰囲気を出してるのに。形振りで台無しである。

そのちぐはぐさがなんというか……奇妙と言うか、可愛いと言う

か。

「僕は響。」

「マノフィカ。」

「テンガだ。よろしくな、小僧。」

「は、はわわ、は、はい。よろしくお願いします。」

私はユーリと言います。」

ぎこちない笑みを返しつつ、獣人族の少年改めユーリはお辞儀をした。

「さて、皆さん揃ったようですし、早速出発としましょうか。準備は大丈夫ですね？」

トクナガさんの声に皆が一様に頷く。

念のため、もういちどイベントリ確認、よし。

「問題ないです。」

「問題ない。」

僕とマノフィカさんが答え、他2人も問題ないためそのまま出発。こうして初めての護衛以来は始まったのである。

☆ ☆ ☆

がたこん、がたこん。

そんなこ気味良い音を発てて、馬車は街道を西のアルトネリ機械樹街へ向かってひた走る。

馬車が走り出して一時間。

とりあえず何事も無い。

最初こそどこからでもかかって来い。という感じで気を張り詰めていたんだけどね。

「退屈だな・・・」

「なんだ、響。オマエさん、護衛依頼は初めてか。」

「え、は、はい。どうして分かったんですか？」

素人っぽい振る舞いはしてないつもりだが。

「ガハハハ。護衛以来を始めてやるやつは必ずその一言を言うんだよ。」

「な、なるほど。」

素人っぽい振る舞いだったな。うん。

「基本的に護衛以来ってのは行動が縛られる上に、荷物を守るために先陣きって戦わないといけない。だからこそ戦術が限られるとか初心者にとっては難度が高めな依頼だ。その分報酬も良いわけだが・

でも、実際平常時ってのは基本的に何もすることがないもんでな。始めてやるやつは基本的に嬢ちゃんみたいに、肩透かしを食らうことが多いな。」

「う・・・ぐ。」

「そうして油断したヤツが真っ先に足元をすくわれるわけだ。」
「ぐぬ。」

言い返せない。

どれぶれでもそうだったな。うん。

あっちはゲームだが、こっちでは現実。依頼を失敗すればお金では

買えない“信頼”も失うし、下手をすれば命も失う。
なかなかへヴィな仕事と言えるだろう。

「まあ安心しな。だからこそその複数人依頼だ。

誰かが気を抜いても誰かが気づけばいい。そんなもんだ。」

「な、なるほど。」

「ある程度の不意打ちに反応できる程度には気を張って置け・・・
ということだな。」

「べ、勉強になります。」

「クツクツクツ。響は貴族の出か？」

面白そうに笑うテングさん。

「い、いえ。そういうわけでは。

どうしてですか？」

「雰囲気・・・とでも言うか？言葉遣いと良い、振る舞いなんかも
だ。いやに礼儀がなってる。冒険者ってのは大体がお金に困った一
般市民がーってとこだからな。そういったことを知らないやつ
のほうがいい。」

そうなのか。またもや勉強になった。
どれぶれではそんな設定無かったし。

「テングさんは冒険者になって、長いんですか？」

「ん？ああ、かれこれ30年はやってるな。」

「ほう・・・。」

「冒険者にしか見れない景色、得られない達成感。そんなのを求め
て生きてきたせいか妻にも愛想を尽かされてな。娘ともろくに会っ
てねえな。そういえば。」

「そ、それは・・・。」

じつとしてられない男ってやつか。

家庭に収まってられない男。

うむ、カッコいいな。

テンガさんの奥さんと娘さんには申し訳ないが素直にそう思う。ちよつと憧れる生き方だ。

「それとテンガさんなんて他人行儀に呼ぶな。一緒に仕事する以上、俺たちは仲間だ。

さん付けはしなくていい。」

「あ、はい、テ、テンガ。」

「おう！」

明らかな年上を呼び捨てにするってすつごい抵抗があるな。

「・・・呼び捨てで呼び合う。」

「ん？なんか言った？」

「・・・別に。」

死ねば良いのに。」

「なぜ！？」

ちよつと機嫌が直ったかな？と思つたらまたもやマノフィカさんが不機嫌モードに。

やっぱり呼び捨てで呼び合いたいのか？

た、試しに呼んでみようか。

あ、でも。

どうしよう。

いや、でも大丈夫か。

嫌われても、所詮はアレだ。

もともとそこまで好感度が高いわけでもなし。

「ま、マノフィカ・・・さん。」

「っ!？」

・・・ばか。あほ、まぬけ。」

呼び捨てにしようと思ったんだけど、すごい勢いでこちらを振り向いてきたもんだから怖くてついサン付けにってしまった。

やっぱり違ったのか？

ばか、あほ、まぬけは呼び捨てにしようとした僕に対する罵倒だろうか？

「おめえ、何ちよーしこいてんだゴラァ」的な意味での。

くそう、分からん。

そんな様子を見てたテングはただただ豪快に笑ってるし、ユーリはユーリでおろおろしている。

け、ケンカはダメですよお、と情けない声を出してるのがまた滑稽だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849u/>

男の娘なCQCで！

2011年10月12日00時14分発行